
真・恋姫†無双～技を極める傭兵

doragon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜技を極める傭兵

【Nコード】

N7179U

【作者名】

doragon

【あらすじ】

男は誰かに仕えることを良しとせず、傭兵だった。

諸国を巡り、いろんな王や武将や軍師などと交流する。

技の鬼神と呼ばれる男は恋姫の世界でどう生きるのか……これは男の生涯を描いた物語である。

主人公設定（前書き）

作者「並行連載頑張ります」

龍牙「まあ、頑張れよ」

作者「お前はくんな！」

龍牙「はっはっは」

作者「笑ってごまかすな！」

主人公設定

性 祇名柳 字 野空 真名 琥音

年 20 歳

特徴 服装は青で染めており、上は着物。下はズボン。

雇い主などには敬語を使うが、基本きさく。

又、何事においても金を優先する所がある。

自分に好意を寄せる相手に対しては、その気持ちには必ず応える。

恋愛関係においては相手に尽くすタイプであるが、一途と言っわけではない。

戦闘においては、力は低いが、守においては中々で粘って勝つタイプ。

生まれつき、目や耳が優れており、相手の動きや呼吸を聞いて先読みをする事が出来るが……身体が追いつかないなど万能では無い。

又、生まれついでの特特殊能力で『瞬間完全記憶能力』を持っており、これにより相手の戦闘技術を覚え、訓練して身につける。

努力型で技術を組み合わせる応用するなどして、強くなることを望

んでいる。

武器は普通の剣（開始時点）

傭兵としての始まり（前書き）

お待たせしました。

序章という事でいくつか書きます。

傭兵としての始まり

「それじゃあ、始めましょうか？」

「……」

俺の前には桃色の髪を後ろで纏めた女がいた。

どちらも剣を構えている。

俺は訳が分からなかった。そしてこう思う。

どうしてこうなったのだと。

俺の名は性は祗ぎ 名は柳りゅう 字は野空けいくう 真名は琥音くいん。

父は戦場で死に、母は病気で死んでしまった。

身よりがない俺は旅をしていた。

路銀を稼ぐために傭兵として働くことにした。

父親は国のために戦っていたが、俺は思う。

何故、国のために必死になるのだと。死んでしまえば元も子もないと思う。

だから、俺は忠誠心など持ち合わせてはいない。

傭兵をするのはあくまで生きるためだ。

兵士は儲かる。

死にそうになったら最悪逃げてしまえば良い。

とりあえず傭兵として手始めに、長沙太守の孫堅のところに行く事にした。

荊州刺史の劉表と近頃戦が行われるらしいという風聞を聞いたものもある。

江東の虎と名高い孫堅なら劉表に勝つだろう。

傭兵として働くなら勝つ可能性の高いところにいた方がそれだけ生き残れる確率も上がるしな。

戦場自体は初めてだが、人殺しなら経験している。

旅をする中で盗賊に襲われたから殺した。

父から多少の剣術を教えてもらっていたので、ある程度は戦える。

良く、人殺しをすれば後々反動がくると聞くが俺は何も感じなかった。

俺はやはり人としてズレているのだろうな。俺には人とは違う才能もある。

まあ、とにかく俺は長沙太守の孫堅のところに行った。

そして長沙に着いた俺は新兵としての試験を受けることにした。

俺には武将と戦えるだけの力はないしな。

まあ、戦が終わればすぐに抜けるが。

試験方法は簡単だ。

他の相手と手合わせをするだけだ。

俺以外の何人かも試合場へと足を運び、訓練用の剣や槍を持って相手と対峙する。

「それでは、始めい！」

試験管の兵が言う。その後ろには銀髪を後ろで纏めた妙齡の女性である孫呉の武将の黄蓋がいた

俺は試験を受ける前に武将の名前を調べていたから多少は分かる。

黄蓋の名は有名だったと言つのもあるが。

ちなみに隣には孫堅もいた。

とにかく試験が始まった。

「さあ、かかってくるが良い」

俺の目の前にいる筋肉質な男が言う。

「遠慮しとくぜ、しんどいしな」

「そうか、ならば俺から行つてやろっ」

男は俺に襲いかかってきた。

そして頭を斬るように剣を振るう。

俺は後ろに跳躍して避ける。

男は俺を追つて首を斬るために剣を振るう。

俺は男が剣を振るうより先に剣を振るって、それを弾いて防ぐ。

男は体勢を崩してたたらを踏む。

その隙に首に剣を突きつけた。

「どうする？ 続けるか？」

「降参だ」

それを聞いて俺は剣を鞘に納めた。

「そのあなた。ちょっと良いかしら？」

「俺ですか？」

何故か孫堅が近づいてきた。

「ええっ、そうよ。一緒についてきて欲しいのだけど」

「はあ？」

俺がそう言つと、孫堅は「こつちよ」と言つて、歩き出す。

黄蓋も孫堅の後ろを追う。

俺は何かあつたのかと思ひながらそれに続いて行つた。

そこは庭だつた。

孫堅は俺の前を歩いて止まる。

それを離れて見ている黄蓋もいた。

「剣を抜きなさい」

「え？」

「いいから剣を抜きなさい！」

「！」

孫堅から凄まじい殺気が放たれる。

流石は江東の虎と呼ばれる孫堅だ。

こんな殺気は今まで感じたことが無かった。

武将というのはやはり格が違う。

俺は死の恐怖に震えて身体が動かなかった。

とにかく何とか剣を抜く。

「それじゃあ、始めましょうか？」

孫堅は剣を抜きながら言う。

「……」

俺は何も言えなかった。

そして、孫堅が襲いかかってきた。

そして剣を上から下へと振るう。

俺はそれを防いだ。

腕が痺れ、身体がぐらつきそうになったが後ろに跳躍して間合いを離す。

孫堅は逃さないとばかりに追いかけて剣を振るう。

俺は剣では防げないと分かり、避け続ける。

「あなた、面白いわね」

言いながらも剣を振るう。

俺は避けることに必死で言葉を返せない。

「私の剣を避けれる新兵なんて今まで居なかったわよ？」

「それは孫堅様が手加減しているからでしょう」

そう、孫堅は本気ではない。俺にとっては重くて速い斬撃ではあるが……。

そうでなければ俺は一瞬で殺されている。

「良く分かるわね。そして、あなたは私の動きを読んでいるように感じるわ」

「目と耳は良いんで」

俺は相手の動きを見て、呼吸を聞く事で多少の先読みが出来る。

もっとも反撃なんてものはこの場では出来ないが。

「そう、じゃあしつかりと見て、聴きなさい！」

孫堅は足を踏み出すと首狙いに剣を振るう。

本気の一撃だ。

避けることは出来ない。

俺は孫堅が構えた瞬間に全力で剣を振るっていた。

そうしなければ死ぬからだ。

俺は吹っ飛ばされ地面を転がる。

「ぐう」

腕は痺れ、力が入らない。

視界もぐらぐら揺れている。

剣も弾かれていた。

「祭、この男を育てなさい」

「うむ、お任せください。堅殿、面白い若造が現れましたな」

「ええ、本当に」

俺はそれを聞きながら意識を失う。

目を覚ますと、俺は何処かの部屋にいた。

此処は何処なのだろうか？

混乱しながらも俺は部屋を出て、歩く。

今居るのは屋敷内らしい。

どうやら城の中のような。

孫堅が運んでくれたのだろうか。

何のために？

俺は外を目指して歩く。

孫堅と戦った庭についた。

空が明るすぎる事から俺は夜の間、ずっと眠っていたようだ。

孫堅は天才だろう。戦ってそれが分かった。

武将というのは皆、武の才能に恵まれているのだろう。

今の俺にはあんな凄い力と速さのある斬撃を出すことは無理だ。なら、せめて俺の持つ才能を使って、動きだけでも身につけよう。そこから何かを掴めるかもしれない。

俺は目を瞑り、頭の中で孫堅を浮かべる。

孫堅の呼吸、体重のかけ方、身のこなし、剣の振り方など戦闘技術を思い出し、自分という存在を孫堅に合わせるように剣を振るっていく。

聞こえるのは俺が振るう剣の風切り音だけだった。

やがて、それすらも聞こえなくなっていく。

傭兵の才能

「はあ！」

俺は剣を力の限り振るった。

「ふう」

俺は剣を鞘に納めた。

孫堅の戦闘技術を再現していたが、かなり疲労した。

まさに虎と言うべき獣の剣だ。力は確かに伝わりやすいが。

防御は孫堅ならできるだろうが、俺にはこれを再現しているときは無理だ。

それにきつい。まあ、身体には大分染みついたがな。

才能を持つ者は凄まじい。

腹も減ってきた。

何か食べ物のあるところへ行こうとするが。

「ちょっと待ってくんか？」

「何でしょう黄蓋様？」

俺に声をかけてきたのは黄蓋だった。

「お主のあの動きはどういうことじゃ」

「動きというのは？」

「とばけるでない！あれはまるで……」

どうやら見られていたようだ。

「孫堅様の動きですか？」

「！」

俺が問いかけると黄蓋は驚いた。

「確かにさっきまで孫堅様の動きを模倣していました」

「あれが模倣じゃと……」

なにやら訝しがつている。教えようか。

「俺の武なんか大したことはありません。目は相手の動きを良く捉え、耳は呼吸を良く聴けますがそれでも身体が追いつかなくては意味が無い。」

「……」

黄蓋は沈黙する。

「だが、何年か努力すれば武の低さを補えるかもしれない才能が俺にはあります。目で見た物、聴いた物を絶対に忘れず覚えることができるという才能が」

「何じゃと!？」

「だからこそ、俺は思いついた。相手の戦闘技術を覚えれば良いと。相手の動き、呼吸、体重のかけ方、武器の使い方を覚えてそれを身につければ良い。そうすれば強くなれる筈だと」

「確かに、力とはかく技術は良くなるじやろうな」

「ああつ、俺はそうやって強くなる。武が劣るなら技術で戦えばいい。多分俺にはそれしかできませんから」

「そうか、本当に面白い若造じゃの。ならばわしの弓を覚えてみせいい！」

黄蓋は的を持ってきて、そこから離れると弓を構えて矢を番える。

俺はそれを見て、呼吸を聴く。

そして、矢を放った。

的の真ん中に突き刺さる。

次々と矢が放たれ、矢は的に突き刺さっていた。

「どうじゃ、覚えたか？」

「しっかりと覚えました」

「そうか、昼にまた来る。身につけておくのじゃぞ」

「はい」

「それと若造の名は何じゃ？」

「性は祇、名は柳、字は罽空です」

「では、祇柳。これからわしがみっちり鍛える。覚悟は良いかの？」

「はい、俺の真名は琥音です。よろしくお願いします」

「うむ、わしの真名は祭じゃ。良い返事じゃったぞ」

「はい。武人として強くなりたいのがありますが、何より女性に負けるのは男として悔しいですから」

「そうかそうか、良い心意気じゃ。気に入ったぞ」

祭は俺の背中を叩く。

「後、敬語は止せ。似合っておらんぞ」

「そうか？　じゃあ素で話すか。これからよろしく頼むぜ祭さん」

「うむ、任せておけ」

祭は笑いながら庭から去っていた。

俺も飯を食べるために庭から離れる。

飯を食べた後、再度孫堅の戦闘技術を再現する。

完全に身につけるためだ。

その後、弓を持って矢を番える。

祭の弓術を思い出し、それに自分を合わせる。

矢を的に放つ。

矢は的の真ん中には刺さらずに、ズレて的の外側に刺さる。

俺はひたすら祭の弓術を身につけるために矢を放っていた。

腕が疲れたので休んでいた。

弓というのは引くときにかなり力がある。

今まで弓を使っていないので、慣れるには時間がかかる。

祭の弓術は身についたが。

「どうじゃ？ 身につけたかの？」

祭の声に振り向くと、側には二人の少女がいた。

一人は紫の髪を結っている軽装で腰の後ろに鈴を付けた剣を差している。もう一人は黒の長髪に、全身黒い装束をしていて背中に直刀を背負っていた。

「ああつ、なんとかな」

「では見せてもらおうかの」

「ああつ」

俺は弓を構えて、矢を番える。

そして放つ。

的に見事刺さった。

俺は次々矢を放つ。的に全て突き刺さっていた。

「うむ、見事じゃ」

「……」

「凄いです。まるで祭様みたいです」

軽装の少女は不審な目で俺を見つめ、黒い装束の少女は驚いていた。

「俺は祇柳、字は野空だ。二人の名前を覚えてくれないか？」

「我が名は甘寧、字は興霸だ」

「私は周泰、字は幼平です」

「二人とも祇柳はわしの副将になる男じゃ。よろしく頼むぞ」

「何！？俺は聞いてないぞ！？」

「何を言っておる。よろしく頼むと言っておったではないか？」

「うぐ！それはそうだが……」

「そういつわけじゃ。よし、思春よ。祇柳と手合わせをしろ」

「は……」

俺と甘寧は手合わせをするために距離を取る。

俺は剣を抜く。甘寧はまだ剣を抜いていない。

何かあるのだと思い、俺はただ目で見て、耳で聞く事に集中する。

静寂が漂う。

そして、甘寧が動いた。

動きは速い。一瞬で間合いを詰めると首狙いに逆手で剣を振る。

「はあ！」

「な！？」

俺は目で捉えたが、防げないと思い後ろに跳躍する。

鈴の音が響く。

首から血が少し流れた。

なるほど相手の隙を突き、一瞬でけりをつけるタイプか。

おっと、また動いた。

甘寧は様々な方向に走る。

攪乱か。

目で追っても、限界が来るな。

俺は目を瞑る。

呼吸と足音と鈴の音が聞こえた。

「そこだ！」

俺は剣を振るう。

「ちい！」

俺は甘寧の剣を弾いた。

甘寧の動きが少し止まった。

ここだ！

俺は孫堅の戦闘技術を再現して剣を振る。

防御を捨て獰猛に激しく剣を振る。

「うおおおおおお」

「くううううう」

甘寧は俺の剣を防ぐ。

俺を構わず剣を振る。

そして大きく踏み込んで体重をかけながら剣を振り上げ、振り下ろす。

甘寧はそれを防いだ。

鏑迫り合いとなる。

「舐めるな！」

甘寧は俺の腹を蹴る。

俺は吹っ飛んで地面に身体を打ちつけた。

甘寧はその隙をついて倒れている俺に剣を突きつける。

「そこまでじゃ」

甘寧は祭の号令を聞くと、剣を納めた。

やはり孫堅の戦闘技術は力が無いと防がれやすいか。隙も出来る。

だが、甘寧の戦闘技術は覚えた。

俺は立ち上がる。

「甘寧、速いな。良かったら真名を預かってくれ。琥音だ。」

「ふん、最後の攻めは見事だった。真名は思春だ。祭様の副将になるならもっと励め」

「ああつ、勿論だ」

「思春様が預けるなら私も、明命です」

「琥音だ。よろしくな」

「はい！」

明命は明るく返事をしていた。

「次は明命とわしじゃ」

「はい！」

俺と甘寧は二人から離れ休憩する。

明命は鞘に納めたまま直刀を構える。

祭も剣を構えていた。

そして、明命の殺気が消えた。

思春も殺気は薄い方だったが、明命の殺気は意識しないと感じないくらい薄かった。

呼吸を聞いていたが、中々小さい。

そして走り、直刀を振る。

祭はそれを防いだ。

速さは甘寧より遅いが、俺ならぎりぎり避けるしかないだろう。

そして、祭は剣を振る。

明命はそれを避け、離れるとまた向かっていく。

二人の剣舞が続く。

明命は思春と同じく相手の隙について、一瞬でけりをつけるタイプだ。

祭は経験による勘で防ぎ、また虚の隙を見せて明命の斬撃を誘導する。

そして、明命が攻めるにつれてできた隙について剣を振る。

明命は何とか防いでいたが、祭は猛攻をしかけて明命を追い詰める。

そして、明命の直刀を弾き飛ばした。

なるほど、斬撃を誘導するか。それと猛攻のときの体捌き。良い物覚えさせてもらった。明命の戦闘技術も当然覚えた。

「よし、少し休憩をはさんで思春と明命よ。わしとお主たち二人で手合わせじゃ。琥音は見て学べ」

俺はその言葉の通り、三人の戦闘技術を覚えることにした。

「よし、ここまでじゃ」

『ありがとございました』

「いろいろ学ばせてもらった。ありがとう」

そして、俺たちは庭から去っていた。

俺は飯を食べた後、覚えた祭と思春に明命そして戦闘技術を身につけるための訓練をしていた。

覚えた技術はすぐ身につけないと意味が無い。

俺はひたすら繰り返し身につける。

「組み合わせてみるか」

覚えた孫堅と祭と思春に明命の戦闘技術を組み合わせていく。

技術は組み合わせることで新しい技術となる。

どうしても力などは無理だからな。それを他の技術で補う。

俺が実力のある武将と戦うためにはそうするしかない。

傭兵の初陣

あれから少し時は経ち、俺は祭によって基礎から鍛えさせられた。

確かに技術についていけなければ意味が無い。

俺も熱心にやっていく。

体力や筋力をつけながら、氣の練り方も習った。

祭が兵の訓練でできないときには自由で俺は身体を鍛えながら、技術を身につけるための訓練と組み合わせる訓練をしていた。又、相手の動きを思い出し、想像しながらその相手と戦ったりもした。

それによって思春や明命に勝てるようになり、祭とは互角ではないが、少しは良い勝負が出来るようになった。

そういえば虎蓮^{フイレン}さんの娘である雪蓮（真名は預かっている）とも戦った。

虎蓮^{フイレン}は孫堅さんの真名だ。

雪蓮の技術は虎蓮さんと似ていた。

俺は明命の氣配遮断から思春の加速へと移って剣を振るったり、力を補った孫堅や祭の体捌きや元々の戦闘法である守備や先読みをしての誘導などいろいろとやったのだが……雪蓮も孫堅の娘で天才だった。すぐに状況を覆されて負けてしまった。

虎蓮さんとも何度か戦ったが、強すぎる。翻弄すらできない。

想像でも勝てないしな。

又、手合わせを何度かするうちに真名を預けられた。

雪蓮の妹である蓮華（孫権）と話をして、幼子である小蓮（孫尚香）と交流をした。

ああ、そういえばこんな事もあった。

俺は自由訓練をしていた。

「すまない。少しこちらにきてくれないか？」

「何でしょうか？」

俺を呼んだのは眼鏡をかけた長い黒髪の女性とその側にもう一人おっとりとした雰囲気眼鏡をかけた女がいた。

「私は周瑜、字は公瑾だ。」

「私は陸遜、字は伯言です。」

「俺は祇柳、字は罽空だ。何か用でも？」

「ああ、敬語は良い。お前の事は祭殿から聞いているからな。一度見たものや聞いたものを忘れず覚えると言っのは本当か？」

「本当だが？」

「では、本の内容なども覚えられるのか？」

「やったことはないから分からないが、多分出来ると思う」

「じゃあ、見せてもらって構いませんか」

「別に良いが……」

こうして俺は周瑜と陸遜と一緒に書庫に向かった。

結果からいえば俺は本の内容なども覚えれた。

すると二人の眼の色が変わって、部屋に監禁され軍略や様々な知識や政務のやり方など覚えさせられ、強制的に仕事を手伝わされた。この後、二人の真名を教えてもらった。

ちなみにこの事を言ったのは祭さんだった。仕事をさぼって、こっそり酒を飲んでいたときに見つかり怒られる前に俺を売ったのだ。

それを聞いた翌日。

「祭さん、俺を売ったな？」

「な、何の事じゃ？」

祭さんはしらばっくれていた。

「ふっふっふっ、さんざん政務を手伝わされたよ。夢に出てくるぐらいにな」

「それは大変じゃったの……」

「ああっ、とつてもな。ところで試したい技術があるんだ。付き合ってくれるよな？」

「う、うむ」

そして、庭に行つて剣を構える。

「さあ、逝くか？」

「字が違つておらんかの!？」

その日は勝つことができた。

また、「孫呉に仕えないかしら？」と虎蓮に言われたが、断つて客将ということにしてもらった。

雪蓮は「何でよー」と文句を言っていた。

俺にはどうしても国に仕えるという気持ちは湧かない。

そして劉表との戦の時が来た。

俺たちは荊州に攻め入る。

目の前には劉表の軍が見える。

「琥音は初陣じゃそうじゃな」

「ああ、人殺しは経験あるがな」

「そうか、その時はどうじゃったんじゃ？」

「何も感じなかったな。人の死ってこんなあっさりとしたものだったんだと思ったが……」

「……」

祭さんは沈黙していた。

「琥音頑張ってね」

「ああ、雪蓮もな」

「ええ」

「武運を祈ってやる」

「頑張ってください琥音さん」
思春と明命が言う。

「二人も頑張ってな」

「策は分かっているな？」

「琥音さん、頼みましたよー」

冥林と穩が言う。

「ああっ、すっかり覚えているから大丈夫だ」

「それじゃあ、皆行きましようか」

『おう！』

俺たちは虎蓮さんの言葉に返事をして、劉表軍に向かって行った。

俺は祭さんの側にいた。

向かって来る兵士に矢を放つ。

矢は兵士の額に刺さった。

兵士は倒れる。

俺は矢を放ち続けた。

前は弓を引くので精いっぱいだったが、今では苦にもならない。

「うむ、見事じゃ」

「祭さんが鍛えてくれたからだ」

近づいて来る兵士が距離を詰めてきたので俺は剣に持ちかえる。

そして兵士に向かって行った。

俺は剣を振り下ろす。

兵士の頭を斬った。剣を振るって、別の兵士の首を刎ねる。

身につけた技術を使い、走り、斬り、避けて、防いで、弾く。

目や耳を使って、周囲を警戒もする。

そしてまた斬る。

祭さんも兵士たちに矢を放ち、殺していく。

兵士たちは撤退していく。

「お前たち退くな、戦わんか！」

あれがこの部隊の将か。

俺は将に近づく。

「何だ貴様は！」

「俺は孫呉の客将祇柳だ。一騎打ちを申し込む」

「いいだろう。後悔するなよ？」

相手の将は俺に向かって来た。槍で貫こうと突きを放つ。

俺はそれを避ける。

再び突きが放たれるが、俺には相手の動きが読めるし反応も出来る。

本当、祭さんには感謝だな。

こんな程度の相手の戦闘技術など覚えてもしょうがない。

避け続けることで焦りがでた将の隙について、殺気を消しながら素早く後ろに回り込む。

将は俺を急に見失った事で混乱していた。

俺は後ろから剣を振るって首を刎ねた。

「敵将、この祇柳が討ち取った！」

俺は相手の首を持って叫ぶ。

祭さんの兵士の歓声と敵の兵士の悲鳴が響いた。

「初陣で敵将の首を取るとは大手柄じゃな」

「祭さんが譲ってくれたんだろ？」

「いや、それは間違いなく琥音の手柄じゃ、誇ると良いぞ」

「そうさせてもらっ」

俺たちはさらに攻め込み、劉表軍は撤退していった。

俺たちはそれを見て自分たちの陣地に戻る。

虎蓮さんは黄祖を追っていた。

俺たちは帰ってくるのを待っていたのだが……。

虎蓮さんは兵士たちに運ばれてきた。

黄祖が罨を仕掛けていたのだ。落石で虎蓮さんは瀕死の重傷を負った。

もう死ぬしかないだろう。

『母さん！』

雪蓮は急いで駆け寄る。

「油断したわ。私はもう駄目ね」

「そんな……」

雪蓮や孫呉の将たちは泣きそうだ。

俺は傭兵としての初陣で初めての雇い主が死ぬことにやるせなさを感じていた。

戦場というのは残酷だ。

「雪蓮、これからはあなたが王よ。この南海霸王を託すわ」

「はい、母さん」

虎蓮さんから雪蓮は剣を受け取る。

そして、虎蓮さんは次々に孫呉の將に遺言を残していく。

「琥音」

「何だ、虎蓮さん」

「あなたの手柄を聞いたわ。良くやってくれたわね」

虎蓮は微笑む。

「いや、大したことじゃないさ。それに今の俺があるのも虎蓮さんが居たからだ」

この人が居なければ俺は祭さんに鍛えてもらうことも出来ず、また戦闘技術を覚えることもなかった。

「そう、これから雪蓮たちを支えてあげてくれないかしら？」

この場合俺は嘘でも分かったと応えるべきなのだろう。

だが俺はそれには応えることはできない。

「悪い。俺は国に仕えるのは無理らしい。気楽に傭兵をやってるほうが性にあってるしな……」

「それは残念ね」

虎蓮さんは微笑した。

「だが、力を貸すべき時には貸そうと思う。傭兵としてだがな」

「頼むわね」

「任せろ。だから安心して眠ればいい」

「ふふっ、ありがとう」

「皆、私は向こうで見守っているからね」

そして、虎蓮は永遠の眠りに着いた。

雪蓮や孫呉の将は自分の天幕に戻った。

「……」

俺は夜空を見上げる。

旅を始めるとしようか。

俺はその前に雪蓮の天幕に入る。

雪蓮は酒を飲んでいた。

「よう、雪蓮」

「琥音……」

雪蓮は悲しみをこらえた顔をしていた。

「雪蓮、泣いて良いんだぜ？」

「駄目よ。私は王なんだから泣けば皆に示しがつかないわ」

「そうか、俺にはただの女に見えるぜ。それに俺は孫呉の将じゃないしな」

「……」

「俺の前では泣けよ。王として家臣や兵たちにみつともない姿を晒せないという気持ちは分かるがここなら誰も聞かない。酒で気を晴らすより健全だしな」

「琥音……」

「俺がお前の悲しみを受け止めてやるよ」

雪蓮は俺に抱きつき、顔を胸に埋め泣いた。

「うわああああ」

俺は頭を撫でてやる。

「よく我慢したな」

俺は両親が死んだときは泣けなかった。こんなもんなんだと言う気持ちだけが残った。

死に対して無関心なのだろうな。

雪蓮の泣き声を聞きながらそう思った。

雪蓮は泣き疲れたのだろう。いつの間にか眠っていた。

雪蓮を抱えて布団に置いて眠れるようにする。

俺は天幕を出た。

「行くのか」

俺が祭さんの天幕に行こうとすると祭さんは外にいた。

「ああつ、仕事は終わったしな。雇い主が死ぬとは思わなかったが……」

「そうか、これは報酬じゃ」

祭さんは俺に袋を投げる。

拾って見ると中には路銀が入っていた。

「こんなの受け取れねえよ」

「いや、お前は良く働いてくれた。策殿の悲しみを吐き出してくれたしう」

「それは虎蓮さんの願いを叶えられないことに対するお詫びだ。俺に報酬を受け取る資格なんてない」

「餞別でもあるのじゃが琥音、お前はもつと強くなるじやろう。そしてその姿をわしに見せてほしい。お前の師としての願いじゃ。旅に出るなら路銀も必要じやろ？」

「……分かった、受け取る。俺はもつと強くなるぜ。虎蓮さんの戦闘技術は俺の中でしっかりと生きている。これから祭さんたちは大変だろう。今は力を貸せないが困った時は言ってくれ。金は貰うが力を貸すぜ」

「期待しておるぞ」

「
ああ
」

俺は陣地から去っていた。

傭兵の初陣（後書き）

琥音が覚えている戦闘技術。

剣術 虎蓮、雪蓮、祭、思春、明命。

速さ 思春

気配遮断 明命

弓術 祭

傭兵は凄腕に

今、時代は動乱の時を迎えていた。

腐敗する漢王朝に不満を持った民衆が賊となり暴れ出したのだ。

頭には黄色い布をつけているのが目印だ。

数は多く、まさに一大勢力となっている。

各国の諸侯たちは立ち上がり、討伐するため戦っていた。

傭兵な俺としては戦が多くなる分儲かるからありがたいがな。

俺は剣を振るい、賊の首を刎ねる。

周りにはまだ賊がいる。

俺はただ剣を振るい、賊の首を刎ね、腹を斬り、頭を両断する。

気づけば賊たちの死体だけが転がっていた。

さて、雇い主の所に戻るか。

俺は雇い主の陣地に戻るため戦場を去った。

俺は雇い主のいる天幕に入る。

「あら、遅かったですわね琥音さん」

「思った以上に数が多くてな。まあ、仕事は果たしたぜ。麗羽」
俺の雇い主が言う。

「琥音さんお疲れ様です」

「兄貴お疲れー」

「お前たちもな。猪々子、斗詩」

俺の目の前には三人の女が居る。

冀州の州牧である袁紹（麗羽）。

袁紹に仕える武将である文醜（猪々子）に顔良（斗詩）だ。

俺は旅を続け、今は冀州の州牧の袁紹に雇われている。

「これで冀州周辺の賊たちはほぼ討伐出来たな」

「ええっ、まあわたくしたちにかかればこんなの赤子の手を捻るようなものですわ。おーっほっほっほ」

麗羽は高笑いをしていた。

俺たちは冀州の城へと戻った。

そして、冀州の賊を討伐した翌日……。

「それじゃあ、俺はまた旅に出る。報酬多目にくれてありがたいがとうな麗羽」

「ええつ、琥音さんは良く働いてくれましたし当然ですわ」

「兄貴本当強いよな。あたいと斗詩が二人がかりでなんとか勝てるぐらいだったのに、今じゃあ敵わねえもん」

「そうだね文ちゃん。琥音さん、今までありがとうございました」

俺が旅に出ることを伝えたと三人は見送りをしてくれた。

「何度も言いますが、わたくしに仕える気は無いんですの？ 金ならいくらでも出しますわよ？」

「悪いな。今は諸国を見て回りたいと言うのもある。まあ、追々考えておくぜ」

「琥音さんならいくらでも歓迎しますわ」

「おう、あたいもだぜ兄貴」

「私事です」

「ははっ、ありがとうよ。仕えることは無くても金さえ貰えればいくらでも力は貸すぜ。じゃあな」

俺は歩き出した。

麗羽は名家の笠を着てるところがあり、わがままでもあった。

猪々子や斗詩が何とか支えている。斗詩のほうに苦勞してるな。

まあ、別に悪いやつでも無いし金の払いも良いから俺は好きだ。

猪々子や斗詩も中々良い奴らだしな。

俺は猪々子や斗詩の戦闘技術を覚えた。

まあ、二人のような馬鹿力はないから大剣も大槌も振り回せないがな。

それと支払われた報酬によって、剣を新しい物に変えている。

今まで使っている剣より幅広く肉厚で、重量もあって頑丈でもある剛剣だ。

ある程度重い方が力もつく。斬り合って折れても駄目だ。

さて、次は幽州に行くか。

俺は幽州の公孫？の城に向かった。

俺は今、玉座にいる。

目の前には公孫？と水色の髪をした白い着物の女がいた。

雰囲気からただものではないと分かる。

「それでお前は客将として雇って欲しいと言ったな？」
公孫？が俺に問う。

「俺は傭兵でしてね。金さえ貰えれば力の限り働きます。俺は凄腕ですし、雇って損はさせませんよ？」

「ほう、自信たっぷりですな？ 私が確かめましょう伯珪殿」
白い着物の女が言う。

「ああ、頼む。ところでまだ名前を聞いてないんだが……」

「俺の名前は祇柳です。字は野空」

「じゃあ、祇柳。そこにいる趙雲と手合わせをしてくれ」

「我が名は趙雲、字は子竜。白蓮殿の客将になっている。手合わせ願おうか祇柳殿」

白い着物の女（趙雲）が言う。

「分かりました。お手柔らかに」

「それはどうでしょうな？」

そして、俺と趙雲は公孫？が見ている中庭で手合わせをする事になった。

俺と趙雲は武器を構える。

趙雲の武器は二又の槍だ。

槍の達人に会えるとは幸運だな。

俺は剣を右手で抜き、逆手に持ち変える。

「それじゃあ、始めましょうか？」

「ああ、私はいつでも良い」

「よし、始め！」

公孫？が合図をする。

俺は気を含む自分の気配を消しながら、趙雲に向かっていき、首を狙って剣を振る。

「む！」

趙雲は後ろに跳躍して避ける。

剣が首を掠めた。

これを避けるとは、そこいらの奴とは違うな。

俺は剣を順手に持ち替えて両手で構える。

「速いですな。今のは危なかった」

「そうですか」

「次はこちらから！」

趙雲が俺に向かって来た。

そして槍で頭狙いの突きを放つ。

速度は速い。

俺はそれを避ける。

「ほう、わが槍を避けるとは。自信たっぷりなだけはあるようだ」

「いやいや、ぎりぎりですよ」

俺は趙雲の動きを見て、呼吸を聞く。

そして覚える。趙雲の戦闘技術を。

俺は趙雲の槍を避け続ける。

「おや、反撃しないのですかな？」

「隙が無いですからね。まあ、そうさせてもらいますよ」

趙雲が槍を引き、左足を踏み込んで突きを放つ。

俺はそれを先読みして槍に向かって剣を右に振る。

どんな速さや力も勢いを殺せば防げる。

槍を弾いた。

趙雲は再び突きを放つ。

俺は先読みしてそれを弾く。

「今のはギリギリでした」

わざと脱力して隙を作る。

「隙あり！」

趙雲は突きを放つ。

俺はそれを先読みしながら突きを誘導して防ぎ、隙を大きくしていく。

「もらった！」

趙雲は大きく足を踏み込み、筋肉を軋ませて最高の一撃を放つ。

それが大きな隙となる。

俺は趙雲が突きを放つ前に動き、左袈裟切りを放つ。

「な！？」

趙雲はそれをなんとか防ぐ。

俺はそのまま自分の呼吸、足の踏み込み、剣の振り、動きを変えながら猛攻をかける。

「くうううう！」

「はあああああ！」

趙雲は後退しながら俺の剣を防ぐが、動きに対応しきれず体勢をくずして隙が出来る。

俺は剣を大きく振り上げ、足を大きく踏み込み、体重をかけながら振り下ろす。

趙雲は槍で何とか防いだが、槍は剣を止めれず弾かれる。

後ろに跳躍して趙雲は俺から離れた。

「今まで本気じゃなかったようだな」

「そんなことはありません。それでも結構必死なんですよ？」

「……」

趙雲は槍を構える。

そして、俺に向かってきた。

足を大きく踏み込み、筋肉を軋ませる。

「そちらは本気というわけですか」

さつきよりは隙も無くなっている。

「はい！ はい！ はいー！」

叫びながら高速の三段突きを放つ。

先ほどの突きより速い。

だが、筋肉の動きや足さばき、呼吸によって先読みする。

一撃目、顔狙いの突き。

首を傾げて避ける。

二撃目、左肩を狙った突き。

俺は右に避ける。

三撃目 避けた隙を狙って、俺の顔の右側面を貫こうとする。

俺は獣のように大きく左に走って避け、趙雲がこちらを見る前に、気配を消して静かに走りながら後ろに回り込む。

「これで終わりです」

「！」

俺は後ろから趙雲の首に剣を当てている。

「参りました」

俺は剣を引いて、鞘に納める。

「まさか星に勝つなんて……」

「どうです？ 雇ってもらえますか？」

「勿論だ。よろしく頼む」

俺は公孫？と握手をする。

「祇柳殿、大した腕だ。我が真名を受け取ってもらえますかな？」

「分かりました。俺も真名を預けましょう」

「我が真名は星だ。よろしく頼む」

「俺の真名は琥音。こっちこそ」

俺と星は握手をした。

「私の真名も預かってくれ。白蓮だ」

「琥音です。敬語じゃなく素で喋って良いですか？」

「別に構わないぞ」

「それじゃあ、これからよろしくな。白蓮、星」

俺が言うと二人は頷いた。

傭兵 仁の王に会う

白蓮に雇われて数日が経った。

あれから何となく白蓮と白蓮が率いる白馬陣の訓練を見せてもらった。

俺は白蓮の馬術を覚え、白蓮に頼んで馬を借りて身につけるための訓練をした。

今ではすっかり乗れるようになっている。

まあ、戦場では乗らないがな。後は趙雲の戦闘技術である槍術も身体に染みついてきた。

俺と星と白蓮は賊の討伐に向かう準備をするため玉座にいた。

「公孫？様！ あなたの親友と名乗る者が兵を多く率いれて、あなたに会わせてくれと言っておりますが……」

兵の一人が報告する。

「何？ 分かった。通してくれ」

白蓮は玉座に呼ぶよう兵に言う。

「良いのか？ 刺客かもしれないぜ？」

「大丈夫だ。もしもの時は星と琥音が守ってくれるんだろ？」

「まあな」

「当然」

俺と星は後ろに潜んで様子を見ることにした。

俺は弓を構えて、矢を番える。

そして、玉座に現れたのは三人の女性。

一人は薄い桃色で髪を二つに分けている女。

一人は長い黒髪を後ろで纏めている女。

一人は赤い短髪に首に赤い布を巻いている少女だ。

長い黒髪の女と赤い短髪の少女からは只者ではない雰囲気があった。

「桃香！ ひっさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！ 久しぶりだねー」

白蓮は薄い桃色で髪を二つに分けている女に向かって言う。

薄い桃色で髪を二つに分けている女もそれに答える。

どうやら知り合いらしいな。親友というのは嘘ではないようだ。

俺は弓と矢を背中に戻した。

白蓮は薄い桃色で髪を二つに分けている女と会話をしている。

どうやら三人は白蓮を頼って賊の討伐に参加したいらしい。

兵を多く率いれたのは嘘で、一人も居ないとの事だ。

思い切ったことをするもんだ。

「今私と行動してくれているのは愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの二人だけなんだ」

そして、後ろの二人の女が自己紹介する。

「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後お見知りおきを」

長い黒髪を後ろで纏めている女が言う。

「鈴々は張飛なのだ！ すっごく強いのだ！」

赤い短髪に首に赤い布を巻いている少女が言う。

白蓮は二人の力量に疑問を持っているようだ。

星が白蓮たちの前に玉座の後ろから姿を現す。

俺もそれについていく事にした。

「人を見抜けと教えた伯珪殿が、その二人の力量を見抜けぬのでは話になりませんな」

「確かに、相手の力量を見抜くというのは大事なことだ」

「むう、そう言われると返す言葉も無いが、ならば趙雲や祇柳はこの二人の力量が分かるとでも言うのか？」

「勿論だ。この二人は中々腕が立つようだぜ」

「武を志す者として、姿を見ただけで只者では無いことぐらいは分かるというもの」

「へえ」 まあ、星や琥音がそういうならば、確かに腕が立つんだろつな」

「ええ。 そうだろう関羽殿」

星は関羽に言う。

「そういう貴女も腕が立つ。 そう見たが？」
関羽はそう返す。

「そっちのお兄ちゃんも腕が立つようなのだ」
張飛が言う。

「ふふっ、さて、それはどうだろうな」

「まあ、そこそこは自信があるがな」

俺たちはそう返した。

白蓮は薄い桃色で二つに分けている髪の子と関羽と張飛の参加を認めた。

そして賊の討伐に向かうため城外に集合する。

「すごい！ これ皆、白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

「勿論さ。とはいっても正規兵半分、義勇兵半分の混成部隊だけだな」

「そんなに集まったんだ……」

「それだけ、大陸の情勢が混沌とし、皆の心に危機感が出ているという事でしょう」

「ふむ、確かに最近大陸各地で盗賊だ何だと匪賊共が跋扈しているからな」

「いったいこの国はどうなっていくのだ」

「民のため、庶人のため、間違った方向には行かせやしないさ。この私がな」

皆はこの大陸の事を憂いているようだ。俺にとってはどうでもいい事ではあるんだがな。

「趙雲殿」

関羽が言う。

「ん？ どうされた？ 関羽殿」

「あなたの志に深く感銘を受けた。我が盟友になって戴けないだろうか」

「鈴々も、おねーさんとお友達になりたいのだ！」

「ふっ、志を同じくする人間、考えることは一緒ということか」

「どういうことだ？」

「関羽殿の心の中に、私と同じ炎を見たのだ。そして志を共にしたいと。そう思った」

「友として共にこの乱世を治めよう」

「ああ！」

「治めるのだ！」

「あー！ 私も！ 私もだよ！」

星と関羽と張飛が握手をしているのを見て、薄い桃色で二つに分けている髪の女は急いで駆け寄り、自分の手を三人の手に乗せる。

「みんなで頑張って、平和な世界をつくろうね。大丈夫、力を合わ

せればドーンツてすぐに平和な世界が出来ちゃうんだから」

随分とお気楽だな。平和な世界か、そんなものは理想に過ぎない。この女はそれが分かっているのか？

「そんなに簡単なわけないのだ。お姉ちゃんは気楽なのだな」

「ふっ、なかなかどうして。そういうお気楽さも時には必要というものだ」

「そうだな、我が名は関羽。字は雲長。真名は愛紗だ」

「鈴々は鈴々！ 張飛と翼徳と鈴々なのだ！」

「劉備玄德、真名は桃香だよ！」

「我が名は趙雲。字は子竜。真名は星という。今後とも宜しく頼む」

四人は握手をした。

「琥音殿は此方に来ないのですかな？」

星が俺を見て言う。

「そうしたいのは山々だが、生憎と俺はお前たちのような正義の心は持っていないんでな」

「何！？ なら、お前は何のためにこの場にいるんだ！」

関羽が言う。

「騒ぐなよ。ここには賊を倒すために来ている。民を見捨てるわけでもない。頼まれれば助ける事だつてする。あくまでお前たちほど立派な正義心を持っていないと思っっているだけだ」

助けるのは報酬次第だな。慈善事業じゃ無いんだ。こつでも言つとかなないと襲われそうだしな。

「それは本当だな？」

「本当だよ」

俺は関羽の問いに応えた

「だつたら大丈夫ですよ。えつと……」

「祇柳だ。字は罽空。真名は琥音。今は白蓮に雇われている。幽州の民たちのために精いっぱい力を尽くすつもりだ。宜しく頼む」

人間関係を良くするためとはいえ、良くこれだけの嘘が出てくるものだ。まあ、賊を討伐すれば民のためにはなるしな。

俺自身はそんなことを気にせず、金のために力を尽くすだけだ。

だが、そんな心の内は隠しておかないとな。なるべく人とは仲良くなっておいた方が良い。

「はい！　お願いします」

「ああ！」

「勿論なのだ！」

「頼りにしてますからな！」

俺は四人と握手をした。

白蓮が俺たちの輪に入れず拗ねていた。

そして、俺たちは出陣する。

俺は賊がこちらに向かって来る前に矢を放つ。

矢は賊の額に刺さった。

「良い弓の腕ですな」

「そうか？」

俺は星と共に戦う事になった。

俺は次々と矢を放つ。

賊は矢によって何人かの仲間を失いながらも攻めてくる。

ある程度、近づいてきたので弓と矢を背中に仕舞って右手で剣を抜く。

「さあ、行くか」

「そうですね」

俺は剣を構え、星は槍を構える。

そして、賊たちに向かって行っ

俺は剣を振るって賊を斬り、星は槍で賊を突き刺す。

戦場は賊の死体で埋まって行く。

やがて、賊の討伐は終わった。

愛紗や鈴々たちも活躍したようだ。

俺たちは城に戻った。

傭兵は星と

あれから俺たちは次々と周辺の賊を討伐していった。

その結果、賊の暴動は収まり落ち着きつつある。

まあ、まだまだ出てくるだろうがな。

もうそろそろ旅を再開するか。俺が抜けても星や愛紗に鈴々が居るんだ。

問題は無いし、俺は賊の多い所に行って稼ぐとしよう。

俺はそう思いながら槍を持つ。

武器庫から拝借したものだ。槍を買っても良いが仕舞う場所がない。

手にずっと持つよりは背負ったりする方が楽だ。まあ、弓や矢を背負ってるから無理だがな。

俺は星の戦闘技術を基本に今まで覚えた戦闘技術を組み合わせながら、想像上の祭さんと手合わせをしていた。

いくら目や耳が良くて、先読み出来てもそれは正確とは言えない

初見の相手に対しては先読みでなく、予測となるからだ。

ある程度戦闘技術を覚える事で先読みが可能となるのだ。

だからとにかく戦闘経験を積み、勘を磨く。

勘から予測して、避けたり、防いだりして相手の戦闘技術を覚える。

そして先読みから相手の隙を作り、持てる技術で翻弄して倒す。

これが俺の本来の戦い方だ。

様子見のために仕掛けたりもするがな。

俺は祭さんに向かって槍で突きを放つ。

祭さんはそれを剣で防ぐ。

ある程度、戦っていると後ろから足音が聞こえた。

「おや、琥音殿。槍が使えたのですかな？」

星と愛紗と鈴々が庭にやってきた。

「まあ、少し齧った程度だがな」

「その割にはしっかりと型にはまっているようだったが？」

愛紗が言う。

「琥音のお兄ちゃん、やっぱり強そうなのだ」
鈴々も言った。

「俺からしてみればまだまだだ。お前たちは何しに来たんだ？」

「何、少し手合わせをしようかと思ったのですが」

「そうか、じゃあ好きにやってくれ」

俺は去ろうと歩き出した。

「琥音、私と手合わせしてくれないか？」

俺の背に愛紗が声を掛ける。

「ん？ まあ別に良いぜ」

そう言えば二人とは手合わせしていなかったな。

愛紗と鈴々は兵の訓練をしていたのもあって、手合わせの機会が無かった。

俺は教えるのが柄じゃないから兵の訓練を断ったがな。俺自身、兵を指揮した経験は少ない。

一人で戦ってきたものもあるしな。

俺と愛紗は手合わせするため間合いを取り、武器を構える。

俺は槍を、愛紗は薙刀だ。

側では星と鈴々が見ていた。

「それじゃあ、いくぜ？」

「ああっ」

俺は気を含む気配を遮断して、一気に間合いを詰め、足を踏み込むと額、首、腹を狙って三連突きを放つ。愛紗は後ろに跳躍して避ける。

むっ、少し間合いを詰めすぎたか？　今まで覚えた戦闘技術は剣術が多いからな。

槍にも完全には慣れていないようだな。

「見事な突きだ。やはり齧った程度には見えないな」

「いや、大したことは無いぜ」

「ふ、次はこちらからいくぞ！」

愛紗は走り、間合いを詰めて左の袈裟切りを放つ。

俺は後退しながら身体を後ろに反らして避ける。

愛紗は又、踏み込んで首狙いの右薙ぎを放つ。

俺は後退しながら頭を下げ避ける。

愛紗は又踏み込み、上段から振り下ろす。

俺は後ろに跳躍して避けた。

愛紗の斬撃の速さは星ほどでは無いが、力がある。

星は速さ重視なら愛紗は力と速さ両用といったところだろう。バランスが良い。

だが、戦闘技術は覚えた。

「大したもんだな」

「私の斬撃を避けれる琥音もな」

俺は槍を構え、間合いを詰めて愛紗の頭、首、腹、肩、手、足などあらゆるところを狙って突きを放ち続ける。

愛紗はそれを弾き、防ぎ、避ける。

俺は構わず突きを放ち続ける。

少しずつ隙を作って愛紗を誘う。

愛紗は俺の隙を狙って薙刀を振る。

俺は愛紗の動きを先読みして、それが振られる前に槍を振って弾いた。

そして力で押し負けたようにわざと後退する。

愛紗はただ薙刀を振っていく。

俺はそれを弾きながらも脱力して隙を作る。

さあ、決着をつけるか。

「終わりだ!」

「しまった!」

愛紗は大きく踏み込み、薙刀を振り上げて最高の一撃を繰り出そうとする。

俺は静かにその一撃を避けるために動く。

愛紗は薙刀を振り下ろす。

俺はそれをただ左に移動して避ける。

「な!？」

愛紗が体勢を戻す前に、俺は踏み込んで右の片手で突きを放って首に突きつける。

「終わりか？」

「降参だ」

俺は槍を引いた。

「愛紗に勝つなんて凄いのだ。鈴々とも手合わせしてほしいのだ」

「分かった。良いぜ」

「その前に少し良いですかな？」

「何だ？」

星がこちらに近寄ってきた。

「先ほどの琥音殿の動きが私の動きに似ていましてな。いや、そのものと言っても良いぐらいだ」

「何！？ それは本当か星？」

「ああ、多少動きは違っではいたがな」

「やっぱり分かるか。正解だ、確かにお前の槍術を基本にしている」

「そうですか」

「琥音、そういえばお前は戦場では槍を持っていなかったな？ あれだけの腕があるのにどうしてだ？」

愛紗が俺に問いかける。

「剣の方が使いやすいからな。それに槍で実際に戦うのはお前が初めてだ」

「初めてだと！？　ならば何故星の動きが出来るんだ！」

「星の槍術を覚えて身につけた。それだけだ」

「詳しく話して貰えますかな？」

星が真剣な表情で問いかける。

「分かった。俺は別に生まれつき、お前らみたいに大きな力も持つて無かったし、身のこなしも速くは無かった。だが、俺には他人と違って一つだけ出来る事があった。俺は一度見たものや聞いたものを覚えることが出来る。それを忘れることもない」

「な！？」

「……」

「お兄ちゃん凄いのだ」

愛紗や鈴々は驚き、星は沈黙する。

「だから俺は相手の戦闘技術を覚えて身につけることにした。幸い目や耳は良いんでな。相手の動きを良く捉えて、呼吸をよく聞くことができる。俺が強くなるならそうすることが一番だと思ったからだ」

「ならば、お前の戦闘技術は……」

「覚えた戦闘技術から力の出し方や身のこなし方を抜き取って、自分なりに組み合わせているだけだ。それに最初雇われたときに師に

なつてくれた人がいた。基礎を徹底的に鍛えてくれたよ。そして、傭兵生活が続けるうちに多少は凄腕になれたわけだ」

「なるほど、手合わせの時に動きが次々変わったのはそういうわけでしたか」

「ああ、相手の隙をつくには有効だからな。もっとも今まで剣と弓で戦ってきたから星の槍術を身につけるのに多少苦労した」

「我が槍術は長年の鍛錬によって会得したもの。琥音殿は手合わせの時に見ただけで我が槍術を完全に覚えたと、そして数日で身につけたと言つのですな？」

「要点も覚えているからな。だが、槍の間合いに慣れるのは苦労する。まだ完全とは言えない」

「は、はははは。大した御方だ」

星は笑いだした。

「私の青龍偃月刀も覚えたと言つのか？」

愛紗が言う。

「勿論だ。俺は使える物なら何でも覚えるし、身につける」

「ならばやって見せろ」

愛紗は俺に青龍偃月刀を差し出す。

「良いだろう」

俺は青龍偃月刀を受け取る。

目を瞑り、愛紗の戦闘技術を思い出す。

そして、それに合わせながら青龍偃月刀を振るっていく。

聞こえるのは風切り音だけ。やがて何も聞こえなくなる。

俺は最後の足を踏み出し、上段から全力で振り下ろす。

「とまあ、今はこんな感じだ」

俺は青龍偃月刀を愛紗に返した。

「確かに私の動きだ」

「見事ですな」

「ますますお兄ちゃんと戦いたくなったのだ」

「ああ、やろつぜ鈴々」

俺と鈴々は間合いを取って、武器を構える。

俺の武器は剣。鈴々の武器は蛇矛だ。

さて、どういう戦い方なんだかな。

「いくのだ!」

鈴々は俺が攻める前に向かって来た。

しかし、隙だらけだ。

俺は鈴々の戦い方が分かった。

力重視だ。そして、力に頼る者は総じて勘が優れているのが多い。
だからこそ防御を捨てているのだ。

力で圧倒できるというのもある。

俺にとっては扱いやすい。

戦闘技術を覚えやすいからだ。それに先読みしやすい。

「にゃあ!」

鈴々は蛇矛を振り下ろす。

俺はそれを先読みして、剣でぎりぎり防げる範囲で弾く。

腕が少し痺れた。

やはり力重視だな。

「やるな。腕が痺れたぜ」

「へへっ、琥音の兄ちゃんには負けないのだ」

「そうか」

鈴々は蛇矛を振る。

俺はそれを剣で弾く。

鈴々は構わずまた蛇矛を振る。

俺は弾く。

鈴々は蛇矛を振り下ろし、振り回し、突き、振り上げる。

俺はそれをただ弾いていく。完全に無力化できるところで弾いていきながら。

「これでどうなのだ!」

鈴々は振り回したが、隙が大きすぎる。

俺は鈴々が振り回す前に、足を大きく踏み込んで全力で剣を振る。

「にゃあ!？」

鈴々の蛇矛は大きく弾かれ、鈴々はたたらを踏んで体勢を崩す。

俺はさらに踏み込み、右手に剣を持ち、全力で突きを放った。

「にゃあ！」

鈴々は後ろに跳躍して避ける。

「あ、危なかったのだ」

「やはり避けられるか」

勘は良いようだ。

「今度はこっちの番なのだ！」

鈴々は間合いを詰めてきた。

鈴々は突きを狙う。

俺は剣を逆手に持ち、気配を消す。

「にゃあああああ！」

鈴々は突きを放った。

俺はその前に、左に避けれるよう静かに動く。

そして、突きを避け、鈴々が突きを戻す前に後ろに回り込んだ。

「にゃあ！？ どこに消えたのだ？」

「終わりだ」

俺は鈴々が振り向く前に首に剣を当てる。

「にゃあ、負けちゃったのだ」

「ああ、俺の勝ちだ」

俺は剣を鞘に納める。

「お兄ちゃん強かったのだ」

「鈴々の猛攻を防ぐとは、あれも技術によるものだというのか」

「見事な技術でしたな。十分琥音殿は天才と思いますが」

「いや、俺は凡人さ」

俺は庭から去っていた。

夜になり、俺は部屋にいた。

突然、部屋の扉が開いた。

「琥音殿。一緒にどうですかな？」

星が酒を持って、現れた。

「良いな。誘いを受けるとしよう」

「では、此方へ」

俺と星は部屋から出て、庭へと移動する。

夜空を見ながら酒を飲み始めた。

「つまみはどうですかな？」

「どんなつまみだ？」

「めんまです」

星は小壺を取りだした。

中にはめんまがあつた。

「まあ、頂くぜ」

「存分に召し上がってください」

俺と星はめんまをつまみに酒を飲む。

「なかなかいけるな」

「気に入りましたかな？」

「まあ、少しな」

「それは何より」

大分、酒も減ってきた頃、星が俺の肩にしなだれかかる。

「どうしたんだ星？」

「少し酔ってしまったようです」

その割には顔は赤くない。

「そうか、このままが良いか？」

「はい」

俺と星はしばらくの間静寂していた。

「琥音殿、責任取ってもらえますかな？」
星が口を開く。

「何の事だ？」

「我が槍術を盗んだではないですか」

「人聞きが悪いな。ただ覚えただけだ」

「ですが、我が槍術を使っていたのは事実でしょう」

「使える物は何でも使うさ。分かった、どう責任を取れば良いんだ

「？」

「おや、鈍いのですかな？」

「本気か？」

「私はいつでも本気ですぞ」

「魅力的な誘いだが、俺は気が多いぜ？」

「英雄は色を好むと言うもの。別に気にしませぬ」

「後悔するかも知れないぞ？」

「たとえば、どんな事があるうとこの気持ちは変わりませぬ」

俺は問いかけるが、星は真剣に答える。

「正直言つてあなたが羨ましい。私が鍛錬を積んで会得した槍術を見ただけで覚え、数日で身につけてしまった。そして、あなたの技術に惹かれている自分が、あなたを深く知りたいと思う自分が居る。この気持ちを受け取っては貰えぬのですか？」

星は俺の顔を目を逸らすことなく見つめる。

「……」

俺は星の顎を掴んだ。

「！……琥音殿？」

不安そうに星は俺を見つめる。

俺は星の口に自分の口を合わせる。

接吻だ。

そして、舌を出すと星の舌に絡ませていく。

「ん……ちゅ……く……ふ……」

星は力を抜き、俺に任せていく。

「は……ん……うん……ん」

そして、俺は口を離した。

「ん……はあ……はあ……はあ……琥音殿……」

星は頬を染めながら俺の顔を見つめた。

「今は此处までだ。俺は傭兵だからな。賊たちが蔓延っている今の世じゃあ稼ぎ時だ。仕事を優先しちまう。夜が明けたら旅に出るぜ」

「それでは、私も一緒に行きます」

「いや、お前が抜けたら白蓮も桃香たちも困るだろ？ 心配するな又会えるさ」

「しかし……」

星は不安な表情になる。

「星、俺は絶対にお前の気持ちに応えるし、責任も取るさ。だが、今は世が乱れているからな。」

落ち着くまで待とうぜ。そして又会った時にまだお前が俺を求め
るなら……。」

「その時は……」

星が顔を近づけながら言う。

「俺もお前を求める」

俺も顔を近づけた。

そして、どちらからともいうことなく接吻を交わした。

「それじゃあ、中々上手い酒だったぜ。ありがとうな」

「こちらこそ」

俺は部屋に戻るため歩き出す。

星、俺には勿体ないぐらいの女だよ。

だが、俺を想ってくれるその気持ちは受け取ったぜ。

かならず応えてやるからな。

俺は部屋に戻るとしばらく星の事を考えながら眠った。

傭兵は依頼される

俺は白蓮に旅に出ることを言い、今までの働きの報酬を払ってもらった。

白蓮や桃香と愛紗に鈴々、そして星の皆が見送りをしてくれた。

「じゃあな。俺はもうちょっと賊がいる所に行って来るぜ」

「ああつ、達者でな琥音。お前がいてくれて助かったよ」

「また会いましょうね琥音さん」

「そうだな、又会おうぜ」

白蓮と桃香の言葉にそう返す。

「琥音、私は絶対にお前より強くなってみせる」

「鈴々も次は負けないのだ」

「俺もそう簡単に負けるわけにはいかねえよ」

愛紗と鈴々の言葉にそう返した。

「琥音殿……」

星が此方に近づいてきた。

俺は星と抱き合う。

そして、顔を近づけ、接吻をした。

「待っておりますぞ」

「ああ」

そして星から離れた。

「……」

「うわあー」

「……」

「にゃあー」

白蓮たちの顔が赤くなっていた。

「まだまだ賊は出て来るだろうが大丈夫だ。又いつか会おうぜ」

俺は右手で会釈をすると、そのまま去っていた。

俺は次の国を目指して歩いていた。

風の噂で賊の名前は黄巾党になったらしい。

まあ、名前などどうでも良いことだ。

俺は旅する途中で村や街に寄って休憩し、襲って来る賊たちを退治していた。

無論、報酬を貰うことを条件にしてだ。

さて、ここらへんで休憩するか。

俺は目の前の街に立ち寄る。

「待て、お前は何者だ！」

門前に銀髪を後ろで三つ網にしている傷だらけの少女が言う。

両腕には鉄鋼を装備している。

「何者とはご挨拶だな。相手の事を聞くときはまず自分から言うべきだと思うが？」

「貴様、さては黄巾党の仲間だな？ 退治してやる！」

銀髪の女は襲いかかってきた。

「俺は黄巾党じゃないぜ？」

俺は勘違いを正そうとした。

「黙れ！」

銀髪の女は俺の言葉に耳を借さない。

そして、俺に向かって右の拳を放つ。

中々の速さだが、虚実も無く読みやすい。

先読みするまでも無く、俺はそれを右に避ける。

女は左拳を振る。俺は後退して避ける。

女は身体を捻りながら、右足を上げながら回転するままに 俺の頭部に蹴りを放つ。

俺はそれを両手で掴んで防ぐ。

「なっ!?!」

「これ以上は止めとけ。今ならまだ遊びとして許してやるぞ?」

俺は足を踏み込むと、俺は少女の足を押す。

「うわ!」

女は体勢を崩して、後ろによろけるが何とか踏ん張った。

「まだだ!」

女は右足を後ろに振り上げた。

何をするつもりだ?

「はああああ」

女は叫ぶ。右足が光り輝いた。

氣だ。そして女の体勢で俺は気づく。

「くられ、猛虎蹴撃!」

女は右足で蹴るように振る。

球体状の気が放たれた。氣弾か。

祭さんが教えてくれたのは氣を練って、肉体を強化する事。

まさか氣にこんな使い方があったとはな。

良いもん覚えさせてもらったぜ。

俺は氣弾を右に移動して避けた。

後ろで爆発音がした。

「まさか、あれを避けるなんて……」

女は驚愕していた。

「さて、もう冗談では済ませなくなっただぜ？」

俺は劍を抜いて両腕で構える。

「くっ！」

女も構える。

そして、俺は間合いを詰めようと左足を一步踏む。

『二人ともちょっと待つんや（待つのに）』

門の中から二人の女が現れた。

一人は紫の髪をおさげにした露出の高い服装をしていた。

もう一人は三つ綱に眼鏡を掛けていた。

「真桜、沙和！何しに来たんだ！」

どうやら銀髪の女の知り合いらしい。

俺は様子を見る。

「何しに来たって、あんたを止めに来たんや！」

「凧ちゃん落ち着くの〜」

紫の髪の女と三つ綱に眼鏡を掛けていた女は銀髪の女を説得する。

「何故止めるんだ！ あいつは黄巾党の仲間だぞ！」

「阿呆！ 良く見てみんかい！」

紫の髪の女の言葉を聞き、銀髪の女は俺を良く観察する。

「見たがどうした？」

「まだ分からのかい。このお兄さんどこにも黄色い布巻いて無いやろ？ 黄色の黄の字もあらへんがな。っていうか青やし」

「風ちゃん。黄巾党は絶対どこかに黄色い布を巻いているの。でもこのお兄さんはどこにも巻いてないの。」

「あ！」

「今頃、気づいたんかい！」

俺はそれを見て、剣を納めた。

「さて、誤解も解けたようだし、話をしてもらおうか？」

『は、はい！』

三人の女は俺の問いに即答する。

「本当に申し訳ありませんでした！」

銀髪の女。名を楽進、字を文謙という女は頭を下げる。恥ずかしいのか頬が紅潮している。

「いやー、本当すんまへんなあ。祇柳はん」

紫のおさげ髪の女。名を李典、字は曼成という女は気まずそうにしていた。

「ごめんなの、祇柳さん」

三つ網で眼鏡を掛けた女。名を于禁。字は文則という女も気まずそうにする。

彼女たちは大梁義勇軍で黄巾党の襲撃からこの街を守っているらしい。

「本当なら迷惑代として金を取るんだが、良い技を見せてもらったんでな。今回は許してやる」

「ありがとうございます！」

楽進は又、頭を下げる。

李典や于禁も安心した表情をしていた。

「祇柳様。勝手とは思いますが、私たちに力を貸してくれませんか？」

「祇柳はんは腕ききのようやしな。お願いや」

「お願いするのぉ」

三人は頭を下げた。

「力を貸すのは構わんが、報酬は出せるのか？」

「すみません。今の状態ではお金などはちょっと……」

「そうか」

俺は立ち上がり街から出ようとした。

「待ってください！ お金などは出せませんが私たちに出来る事なら何でもします。」

「何でもだな？」

俺は楽進に近づき、顎を掴んだ。

「！」

楽進の身体が強張る。

俺は顔を近づけた。

「こういうことでもか？」

「なっ！？ 祇柳はん！」

「祇柳さん、駄目なの！」

李典や于禁が動こうとする。

「お前たち来るな！」

『風（ちゃん）！？』

楽進は叫んで二人を止める。

「私で、この街が助かるのなら
楽進は目を瞑る。」

その身体は震えていた。

「冗談だ」

俺は手を離して、楽進の頭を撫でる。

楽進は戸惑いながら目を開けた。

「何でもなんて気軽に言うことじゃないぜ？　だが、覚悟は分かった」

「それでは……」

「力を貸してやる。ただし条件は三つだ」

「何でしょうか？」

「一つ目、救援を求めた事からもうじきこの街がある州の役人が来るよな？　そのときに俺が雇われるように言うこと。二つ目、この街にいる間の食事の提供。三つ目、寝床の提供だ」

「それで良いんですか？」

「そうだ。怖がらせて悪かったな」

俺は又、尻の頭を撫でた。

「いえ、ありがとうございます」

「祇柳はん。ビックリさせんといてえなあ」

「心臓止まるかと思ったの」

「本当に悪かったな。俺の真名は琥音だ。宜しく頼むぜ」

「私の真名は凧です。宜しくお願いします琥音様」

「うちの真名は真桜や。よろしく頼むで」

「沙和の真名は沙和なの。よろしくするの」

こうして、俺は三人と一緒に街を守ることになった。

俺は部屋で凧の戦闘技術を身につけるための訓練をしていた。

足を踏み込んで、拳を前に突き出す。

そして回転しながらの蹴りを放つ。

体術は中々、やりやすい。応用するとうとう。

氣彈の訓練もした。放った氣彈の制御が難しい。

ちなみに窓を開けておいてから、森に放っている。

だが、これも応用で何とかかなりそうだ。

しばらくすると訓練を止めて、休憩する。

「琥音様。氣が使えたのですか？」

凧が来た。

「ああ、練ることは出来るんだが、氣弾を撃つのは苦手だな。訓練中さ」

「そうですか」

「ああっ、そうだ。で？ 何しに来たんだ？」

「わ……私はその、見張りの休憩を……」

「そうか。お疲れ様」

「いえっ、私は別に……」

「凧は頑張っていると思うが？」

「そんな……」

凧は顔を赤くしていた。

「あの、琥音「大変や！」」

凧が何か言おうとしたが、真桜の声に遮られる。

「どうした？ 真桜？」

「黄巾党が現れたんや！」

「それじゃあ行くぞ。凧！」

「はい！」

俺と凧は部屋から出て、黄巾党を迎撃するため門前で待つ。

さて、仕事を始めるか。

傭兵は霸王に会う

俺は黄巾党に向け、矢を放つ。

矢は黄巾党の額に突き刺さった。

俺は遠くから黄巾党を弓で狙撃している。

少しでも時間を稼ぐためだ。防護柵も門前に置いてある。

夙たちも東西南北の門前で戦っていた。真桜は回転する槍を使う（彼女いわくからくりによるものらしい）沙和は双剣を使っている。

俺が守っているのは南門だ。黄巾党たちの動きも収まりつつある。

これなら何とかなりそうだ。

とはいってもそろそろ矢が尽きてきたな。

俺は仕方なく、剣を抜きながら門前の防護柵から前に出た。

そして、向かってくる黄巾党の動きを先読みして最小限の動きで斬り殺していく。

ある程度斬り殺すと、突如銅鑼の音が響き、突如複数の矢が飛来して、目の前の黄巾党に刺さっていく。

その方向を見ると薄い青色の髪の前髪が右目を隠すほどあり、前髪以外の髪を後ろに固めている女が弓を持っていた。

「はあああああ！」

そして桃色の髪を二つに分けている少女の鉄球が黄巾党に襲いかかった。

旗印は夏侯に許。救援が来たようだ。

俺はそれを見ると黄巾党に向かって行っただ。

黄巾党たちを撤退させることに成功した俺たちは救援にきた女と少女の二人と街の中で集合する。

「私は陳留州牧の曹操様の部下、夏侯淵だ」

「僕は許緒、街を守ってくれてありがとう」

凧たちも自己紹介をしていく。

夏侯淵は凧と面識があつたらしい。

「それでお前は？」

最後に俺が自己紹介する時になった。

「俺は名を祇柳、字は野空です。傭兵で旅をしていたのですが、ここに寄った時に凧たちに街を守るよう依頼されました」

「そうか」

「あれ？ 琥音はん。性格違つてへん？」

俺は真桜を見る。真桜は軽く怯えた。

「すみませんが、素を出しても良いですか？」

「ああ、楽にしてくれて構わない」

「僕も気にしないよ」

夏侯淵と許緒は言う。

「それじゃあ失礼して。とりあえず撤退させた黄巾党だが、まだ襲って来るだろう。夏侯淵さんの主の曹操さんの本隊が来るまでどれぐらいかかる？」

「姉者や曹操様ならおそらく急いで向かって来るだろう。ある程度凌ぐ必要があるそうだが……」

「だよな。正念場になるか。矢の補充をしてもらって良いか？」

「分かった。お前も弓に覚えがあるようだしな」

「まあ、ぼちぼちだ」

「そうか、その腕しつかりと見させてもらおうとしよう」

夏侯淵の弓術は弓で戦う事に主軸を置いたものだ。

複数の矢を番えて動きながら放ち、遠くから狙撃したりしていた。

祭さんは剣も扱えるから、弓は遠距離の相手に対してのみ使っていた。

俺は夏侯淵の戦闘技術をしっかりと覚えている。

まだ身につけてはいないが、後で身につけよう。

又、許緒の戦闘技術も覚えたが、馬鹿力を持っていないので鉄球は扱えないだろう。

身につけたら応用に活かすか。

「報告！ 黄巾党が現れました！」

兵士の一人が報告に来た。

「よし、行くぞ季衣！」

「はい、秋蘭様！」

夏侯淵は言う。

「俺たちも行くぞ！」

「はい！」

風が返事を返し、真桜と沙和は頷く。

そして、俺たちは黄巾党から街を防衛するため戦う。

俺と夏侯淵は柵を壊そうとした黄巾党に矢を放つ。

矢は黄巾党に刺さり、黄巾党の命を奪う。

「良い腕だな」

「夏侯淵さんに比べりやまだまださ」

「そんなことは無いと思うが？」

「そうか？ まあ、お褒めの言葉として受け取っとくぜ」

俺はさらに矢を放つ。

黄巾党は先ほどの襲撃よりも勢いを増して、街の中へ向かって来る。

これじゃあ、きりが無い。

防柵もいくつかは壊された。

風たちに許緒は中に入ってきた黄巾党を倒している。

「秋蘭様！ 西側の大通り、二つ目の防柵まで破られました！」
許緒が言う。

「ふむ、防柵はあと三つか。どれくらい保ちそうだ？ 李典」

「せやなあ、応急で作ったもんやし、あと一刻半保つかどうかって所やないかな？」

「微妙なところだな。姉者達が間に合えば良いのだが……」

「なんとか持ちこたえるしか無いな」

「しかし、琥音様や夏候淵様が居なければ我々だけではここまで耐えることは出来ませんでした。ありがとうございます」

凧が言う。

「それは我々も同じ事。貴公ら義勇軍がいなければ、連中の数に押されて敗走していたところだ」

「俺は雇われたからな。最善は尽くすさ」

「いえ、それも琥音様や夏候淵様の指揮があつてのこと。いざとなれば、後のことはお任せします。自分が討つて出て……」

「凧、それは許さない！」

俺は凧を止める。

「琥音様？」

「お前は俺の雇い主だろう。俺は雇い主やそれに関連する人を守ることを信条にしている。それに死んだらそこで終わりだ。犬死は駄目だ。それにお前が死ねば真桜や沙和が悲しむぜ？」

もう虎蓮さんを失った時のようなやるせない気持ちを味わうのはごめんだ。

「そうだよ。今日はぜったい春蘭さま達が助けに来てくれるんだから、

最後まで頑張つて守りきらないと！」

「せやせや。突っ込んで犬死にしても、誰も褒めてくれへんよ。うちらも凧には死んでほしくないしな」

「……」

凧は沈黙している。

「今日百人の民を助けるために死んじやったら、その先助けられる何万の民を見捨てることになるんだよ。わかった？」

俺が何か言う前に許緒が言った。

「……肝に銘じておきます」

「ふふっ」

夏候淵が笑う。

「あ、何がおかしいんですか、秋蘭さまー！」

「いや、昨日あれだけ姉者に叱られていたお前が、一人前に諭しているのが……おかしくてな」

「うっ、ひどーい」

夏候淵は許緒をまるで妹を見るような目で見ていた。

「夏候淵さまー！東側の防壁が破られたの！。向ここの防壁は、あと二つしかないの！」

沙和が不安そうに言う。

「あかん！ 東側の最後の防壁は材料が足りひんかったからかなり脆いで。すぐ破られてまう！」

「とりあえず俺が先に行つて凌いでおく！ 後は頼むぜ夏侯淵さん」

俺は東側の門に行き、矢を放つて黄巾党を足止めする。

そして足止めしていると、銅鑼の音が響く。

旗印も見えた。曹に夏侯だ。

ふつ、ようやく到着か。

俺は弓と矢を背中に背負つて、剣を抜き黄巾党たちに向かって行つた。

俺は剣を振るつて、黄巾党を斬つて辺りを死体で満たしていく。

遠目に黒髪な長髪で、大きく跳ねた前髪で後の髪を後ろで固めている女が剣を振るっているのが見えた。

そして、正規軍である曹操の到着により黄巾党は壊滅した。

俺は先に会わないように、又、休憩のために街の中に戻った。

「春蘭！ 季衣！ 無事か！」

先ほど剣を振っていた女が言う。

「危ないところだったがな。まあ、見ての通りだ」

「春蘭さまー！助かりました！」

「二人とも無事で何よりだわ。損害は大きいようね」
金髪を二つに分け、巻いている女が現れた。

黒髪の女が夏侯惇で、金髪の女が曹操なのだろう。

曹操からは覇気を感じた。

「はっ、しかし彼女たちと彼のおかげで、防壁こそ破れましたが、最小限の被害で済みました。街の住人も皆無事です」

「彼女たちは？」

曹操たちは俺たちを見る。

俺は凧を促した。

「我らは大梁義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するため、こつして兵を挙げたのですが……」

『あー』

凧が言うつ、何人かが叫ぶ。

真桜は曹操と、沙和は夏侯惇と面識があったらしい。

「……で、その義勇軍が？」

「はい。黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず、こうして琥音様と夏侯淵様に助けていただいている次第……」

「そう。己の実力を見誤ったことはともかくとして、街を守りたいというその心がけは大したものね」

「面目次第もございません」

「とはいえ、あなた達がいなければ、私は大切な将を失うところだったわ。秋蘭と季衣を助けてくれてありがとう」

「は！」

「で？ あなたは？」

曹操は俺を見る。

「俺は祇柳。義勇軍で雇われた傭兵です。休むために此処に立ち寄ったのですが依頼されましてね」

「そう、あなたにも礼を言うわ。ありがとう」

「いえいえ、そうだ。宜しければ俺を雇ってくださいませんか？ 腕には自信があります。損はさせませんよ？」

「へえ、随分と自分を高く売るのね」

曹操は面白そうに俺を見る。

「華琳様。この祇柳と言う男、弓の腕は私と同等と言って良いぐらいで、剣の腕も優れておりました」

「琥音様は夏候淵様が来るまで指揮をしてくれました」

「本当的確な指揮やったわ。動きやすかったしな」

「琥音さん、本当に強かったの」

「確かに祇柳の兄ちゃんは凄かったな。弓も剣も強いなんて凄いよ」

「秋蘭や季衣がそこまで言うなんて。それじゃあ雇おうかしら」

「華琳様！こんな男雇っては駄目です！」

背の小さい猫の耳の形をした布を被っている女が言う。

「そうです！ 私はこの男が信用できません！」

夏候惇もそう言った。

「ふむ、納得いかない人がいるようだ。腕のほどを見せましょう」

「良いじゃない、ぜひ見せてもらっわ」

「貴様、良く言った！ 私が相手してやろう」

夏候惇が剣を抜いた。

「春蘭！そんな男肉片も残さずぶった斬っちゃいなさい！」
猫の耳の形をした布を被っている女が言う。

「おう、任せろ！」

夏侯惇もそれに答えた。

「中々、物騒な事言いますねえ。怖くなってきましたよ」

言いながらも剣を抜いた。

俺と夏侯惇が構えると、曹操たちは俺たちから離れる。

「行くぞ！」

「ええ、来てください」

夏侯惇は力重視だ。戦いぶりを見て分かった。

まあ、鈴々よりは隙が無いがな。

夏侯惇は俺に詰め寄ると剣を振り下ろす。

俺は先読みすると剣を振り上げて、ぎりぎり無力化出来るところで弾く。

腕が痺れた。

「ほう、我が剣を弾くとはやるではないか。秋蘭や季衣の話も嘘ではないようだ」

「いえいえ、結構ぎりぎりなんですよ？」

「そうだろう、そうだろう。まだまだいくぞ！」

夏候惇は剣を振り、振り下ろし、振り上げる。又振る。

猛攻を繰り出してきた。

俺はそれをぎりぎりで弾いていく。

そして、後退していく。

「どうした、どうした！ そんな程度か！」

「中々激しい攻めだ……」

俺は言いながらも弾いていく。

そして、徐々にではあるが先読みしながらギリギリから完全に無力化できるところで弾いていく。

「む？ 貴様、本気を出してきたのか？」

「守りには自信がありましたね」

「はっ、その守り砕いてくれる！」

夏候惇は大きく踏み込み、最高の一撃を繰り出すために剣を振り上げる。

俺はそれを先読みすると、剣を左の逆手に持つ。

そして、右に静かに移動する。

「はああああ！」

夏侯惇は振り下ろす。

俺はそれに合わせるように前へと踏み出して、夏侯惇の顎に右手の掌底を叩き込むため振る。

「!？」

夏侯惇は後ろに跳躍して避ける。

掌底は掠った。

だが、十分だ。

「中々素早いではないか」

「そうですかね？ 次はこちらからいきますよ？」

「よし、来い！」

俺は左の逆手で持った剣を前にして、右手を後ろに退き、右足も後ろに退いた構えをする。

「それがお前の構えか？」

「そうです」

俺は右足に氣を集中させ溜めながら夏候惇に向かって行く。

「隙ありだ！」

夏候惇は足を踏み出すが、ぐらつく。

「む！？」

さつき掠った一撃は見事、脳を揺らしたようだ。

俺は夏候惇が体勢を戻す前に左の逆手の剣で首を狙って振る。

「くそ！」

夏候惇は僅かに首を後ろに反らして避ける。

俺は振った勢いそのままに回転して、右足の溜めた氣を解放して纏う。

尻は溜めた氣を解放して放つが、俺は氣弾を放たずに留めることで纏う事が出来るよう訓練した。

右足は光り輝く。

そして回転を加え、氣を纏った右足の蹴りを夏候惇の腹に繰り出す。

「はあああ！」

「があ！」

蹴りが炸裂した瞬間に纏った氣を放つ。

瞬間爆発が起こった。

「ぐあああああ！」

夏侯惇はかなりの距離を吹っ飛び、やがて地面に背中を叩きつけた。

これが俺の氣弾の使い方だ。足や手に纏って叩きつけて放つ。

こうすれば避けようが無い。

周りを見ると、皆呆然としている。

俺は曹操に近づいた。

「どうですか？ 俺の腕のほどは、さっきのは試合なので加減しましたが」

あれぐらいなら夏侯惇も頑丈そうだし、大丈夫だろう。

すぐには起き上がれないだろう。

「ええ、あなたを雇うわ」

「それは良かった」

こうして俺は雇われる事になった。

傭兵は霸王とその部下と交流する。

「大丈夫か姉者？」

夏候淵は夏候惇の元に駆け寄る。

「大丈夫だ、秋蘭」

夏候惇は起き上がって、立ち上がった。

「貴様いつたい何をしたのだ？ 身体が一瞬ぐらついたぞ」

夏候惇は俺に問いかける。

「なに、簡単なことですよ。顎を掌底で打っただけです」

俺は右の掌底で自分の顎を軽く叩く。

「だが、私は避けた筈だ」

「それでも掠ったでしょう？ 顎は脳と繋がってますから、衝撃を与えるとそのまま脳に伝わるんです。それが軽い衝撃でもね。そして俺は夏候惇さんの顎を掌底で打って脳を揺らした。これがあなたがぐらついた理由です」

「良く分かんが、つまりお前の作戦か？」

「まあ、そう言うことですな」

「……最後のあの蹴りは？」

「あれは氣弾を応用しただけです」

「そうか、貴様の实力は分かった。次は負けんからな」

「俺も負ける気はありませんよ？」

「ふつ、望むところだ」

俺と夏侯惇は握手をする。

「祇柳の兄ちゃん、春蘭様に勝つなんて凄い……」
許緒が言う。

「琥音様、お見事でした」

「琥音はん、凄すぎやろ」

「とっても凄かったの」

凧、真桜、沙和が俺に近づきながら言う。

「まさか姉者を倒す程とはな。驚かされたぞ祇柳」
夏侯淵が俺に近づいて言う。

「こっちは結構必死だったんですよ？」

「その割には余裕に見えるが？」

「さあ、どうでしょうかね」

「随分と頼もしい奴のようだな」

夏候淵は微笑していた。

「もう、何でそんな男なんかにやられちゃうのよ！春蘭！」
猫の耳の形をした布を頭に被った女が言う。

「今回はこいつの方が一枚上手だった。次は私が勝つがな！」
夏候惇はそう言った。

「ところで、あなたたち義勇軍の事だけど。秋蘭、彼女たちはあなたから見てどうだった？」

「はっ！ 鍛えればひとかどの将になれるかと……」

「そう、あなたたちの名は？」

曹操は凧たちを見て言う。

「楽進と申します。真名は凧。曹操さまにこの命、お預けいたします」

「李典や。真名の真桜で呼んでもええで。以後よろしゅう」

「干禁なのー。真名は沙和っていうの。よろしくおねがいしますなのー」

凧たちは真名を預けた。

「風、真桜、沙和ね。　祇柳、あなたは傭兵を止めて私に仕えなさい」

「それは無理ですね。俺には忠誠心というものがありません。誰にも仕える気は無いし、気楽で自由にできる傭兵が合ってるんですよ」

「あなたは春蘭を倒すほどの腕を持ち、弓の腕も秋蘭と同等だと言う。傭兵にしとくにはもったいないわ」

「そう言われましてね……」

「まあ、いいわ。かならずあなたを手に入れてあげるから。そうねえ、祇柳は人を鍛えることは出来るのかしら？」

「風たちの訓練か。ふむ、すこしばかり俺の覚えた技術など教えてみるのも良いかもしれない。やってみるか。」

「人を鍛えた事はありませんが、報酬を頂ければ、引き受けますよ。傭兵としてね」

「それじゃあ、決まりね」

「ええつ、俺の真名は琥音です。あなたたちに預けます」

「私は華琳よ。真名を呼ぶことを許すわ」
俺と華琳は握手をする。

「ところで素の口調に戻して構いませんか？」

「え？　ええ、構わないわ」

「それじゃあ、失礼して。これからよろしくな。華林」

「随分変わるのね……」

「まあ、一応の礼儀って奴だ。雇い主を不満にさせたら駄目だしな」

「そう、ひとまず義勇軍の三人をあなたに預けるわ。あなたたちもそれで良いわよね？」

曹操は凧たちに聞く。

「はっ、私は琥音様なら文句はありません。どうかご指導の程宜しくお願いします」

「うちも文句ないで、鍛錬の方はお手柔らかに頼むで、琥音はん」

「沙和も文句ないの、鍛錬はほどにしてほしいの」

「ああっ、よろしくな。まあ、心配するな。俺は厳しくはしない主義だからな」

「華琳様、どうしてこんな奴に真名を預け、おまけに貴重な部下を預けるのですか！」

今まで何も言わなかった猫の耳の形をした布を被った女が叫ぶ。

「あら、桂花は琥音が不満かしら？」

「はい、そもそも男と言っただけでも不快です」

どうやら猫の耳の形をした布を被った女は男嫌いらしい。

あまり関わらないでおくか。

触らぬ神になんとやらってな。

「でも、琥音は傭兵よ。報酬さえ払えばどんなことでもしてくれるわ。そうよね？」

華琳は俺に問いかける。

「ああつ、内容にもよるが基本は報酬さえくれれば問題ない。裏切ったりしないから安心してくれ。傭兵は信用が第一だからな」

「私は琥良の実力を見て、そして話を聞いて信頼できると思ったからこそ預けようと決めたわ。向こうも信頼してくれたようだし、私もその信頼に答えた。私の判断に不満があるのかしら？」

「そ、それは無いですが……」

華琳に言われ、猫の耳の形をした布を被った女は言葉を無くす。

「それじゃあ、春蘭たちも真名を預けなさい」

華琳がそう言うと、夏侯惇たちが近づいて来る。

「はっ、琥音。華林様の信頼を裏切ったら私が叩き斬ってやるからな。私の真名は春蘭だ」

「心配するな。俺は雇い主は裏切らねえよ。宜しくな春蘭」

「おう！」

俺と春蘭は二度目の握手をする。

「私の真名は秋蘭だ。宜しく頼むぞ琥音」

「宜しくな秋蘭」

俺と秋蘭は握手をした。

「僕の真名は季衣。琥音の兄ちゃんの事、お兄ちゃんって呼んでも良い？」

「好きに呼んでくれて構わないぜ。気にしないからな。これから宜しくな季衣」

「えへへ」

俺は季衣の頭を撫でてやる。季衣は嬉しそうに撫でられていた。

「……」

猫の耳の形をした布を被った女は沈黙している。

「桂花？」

華琳は促すように言う。

「わ、私の……」

屈辱を噛み締めるかのように言葉を紡ぐが真名を言おうとしない。

「別に嫌なら言わなくても良いぜ？ 男嫌いなんだろう？ 無理してまで預けられても困るし、俺からはお前に対して交流しないつもりだからな」

さつきまで言葉を続けていた女は俺の言葉に安堵して沈黙する。

「琥音は余計な事は言わないで。桂花、私の愛するあなたなら春蘭たちが真名を預けたのにあなたが真名を預けないなんてことはしないわよね？ 私は自分勝手な女を愛した覚えは無いわ」

華琳の言葉に猫の耳の形をした女は顔を青くする。

「私の真名は桂花よ！」

そして、鬼気迫るような顔で真名を言う。

「お前の名前と字は？」

「な、何よ？」

「男が嫌いなんだろう？ 嫌いな奴に真名なんか呼ばれたくない筈だ。一応預かっておくが名前か字で呼ぶ。だから教えてくれ」

「私の名は荀？。字は文若よ」

「そうか、今は華琳のために力を貸すつもりだ。信頼にも応える。その気持ちだけは分かってほしい。俺からはお前に対して一切の干渉をしないから安心してくれ」

「……」

荀？は戸惑うかのような表情をしていた。

「これで全員、自己紹介を終えたわね」

そして、俺と凧たちは華琳たちによる黄巾党の討伐に加わることに

な
っ
た。

傭兵 有能さを示す

俺たちはこれからのため軍議をしていた。

「さて、これからどうするかだけれど、新しく参入した琥音たちもいることだし、一度状況をまとめましょう。春蘭」

華琳は春蘭に説明するよう促す。

「は！ 我々の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。細かい事は…
…秋蘭、任せた」

「人任せかよ！」

普通は細かいことを説明するものだと思うんだがな。

「やれやれ。黄巾党の構成員は若者が中心で、散発的に暴力活動を行っているが特に主張らしい主張はなく、現状で連中の目的は不明だ。また首領の張角も、旅芸人の女らしいという点以外は分かっていない」

秋蘭は正確に現状を説明してくれた。

「不明な点が多いか。厄介だな」

「ええ、中々困らせてくれるわ」

俺の呟きに華琳は答えた。

「目的とは違うかもしれませんが我々の村では、地元の盗賊団と合流して暴れていました。陳留のあたりでは違うのですか？」

屈が質問をする。

「同じようなものよ。風たちの村の例もあるように、事態はより悪い段階に移りつつある」

「悪い段階？　どういう意味ですか？」

春蘭も質問をした。

「この大部隊を見たでしょう？　ただバカ騒ぎをしているだけの烏合の衆から、盗賊団やそれなりの指導者と結びついて組織としてまとまりつつあるのよ」

その問いに荀？が答えた。

「ふむ？」

春蘭は良く分かっていない。

「要するに、今までのように、春蘭が大声で咆えたくらいじゃ逃げ出さなくなるって事よ」

「ああ、なるほど」

「本当に分かってるのかしら？」

「秋蘭や季衣だけでは苦戦するという事だろう。それくらいは分かるぞ。バカにするな！」

それは分かっていると言って良いのだろうか？　春蘭は知能が低いんだな。將軍なのに大丈夫か？　まあ、鈴々と同じような感じか。

「ともかく、一筋縄では行かなくなっただけの事よ。ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだったけれど。これからの案、誰がある？」

華琳は皆に意見を聞く。ふむ、人を増やして大部隊になる黄布党か。なら……。

「俺から提案があるが、良いか？」

「ええ、良いわよ」

華琳は面白そうなものを見る目で俺を見る。

「人が増えて、大部隊になればなるほど戦場において重要である糧食の消費も当然増える。それなら何処かに連中の物資の集積地点があるはずだ。そこを叩くつてのはどうだ？」

「なるほど」

「その手があったわね」

秋蘭と荀？は理解したようだ。

「にゃ？」

「どういう事だ？」

季衣や春蘭には難しいか。

「良い所に気づいたわね」

「まあ、戦場で稼いでいるからな」

「ますます、あなたが欲しくなってきたわ」

「そうか」

まあ、俺の意見が雇い主のためになるなら何よりだな。

「琥音様。流石です」

「琥音はんって本当有能やなあ」

凧は憧れの視線を俺に向け、真桜は感嘆していた。

「それじゃあ、すぐに各方面に偵察部隊を出し、情報を集めなさい。桂花は周辺の地図から物資を集積できそうな場所の候補を割り出さなさい。偵察の経路は何処も同じくらいの時間に戻ってこられるよう計算して。出来るわね？」

「お任せください」

華琳の言葉に嬉々として返事を返す。

「他の者は、桂花の偵察経路が定まり次第、出発なさい。それまでに準備を済ませておくように！」

「はい！」

「分かりました！」

春蘭と季衣が返事をするが、分かっていると信じよう。

「相手の動きは流動的だわ。仕留めるには、こちらで情報収集の早さが勝負よ。皆、可能な限り迅速に行動なさい！」

「はっ！」

凧が返事をした。

「すいませ〜ん。軍議中失礼しますなの〜」

沙和が軍議の場所に場所に入ってきた。

確か街の民に食料を配っていた筈だ。

「どうしたの、沙和。また黄巾党が出たの？」

「うっん、そうじゃなくてですな〜」

「何だ。早く言え」

春蘭が急かす。

「町の人に配ってた食糧が足りなくなっちゃったの。代わりに行軍用の糧食が配ってもいいですか〜？」

「桂花、糧食の余裕は？」

「数日分はありますが義勇軍が入った分の影響もありますし、ここで使い切ってしまうと、長期に及ぶ行動が取れなくなりますね」

「とはいえ、ここで出し渋れば騒ぎになりかねないか。いいわ、まづ三日分で様子を見ましよう」

「三日分ですね。わかりましたなの〜」

沙和はそれを聞くと駆け足で出て行った。

「桂花、糧食の補充を手配しておきなさい」

「承知しました」

「琥音。あなた偵察はどうかしら？」

「俺は傭兵だ。そういう任務も当然出来るさ」

「そう、期待しているわ」

「ああ」

そして、沙和を除いた武將たちが偵察へと出かけた。

俺は黄巾党の罾や伏兵を警戒しながら気配を消して山の中を静かに走って探していた。

偵察なら思春や明命の技術が役に立つ。

視界にぼんやりと砦のようなものが見えた。

俺は氣を目に集める事で、強化する。

はつきりと古ぼけた砦が見える。

廃棄された皆か。

そして、黄巾党達が物資の移動の準備を始めている。

早くしないとまずいな。

俺は報告するため戻った。場所もしっかりと覚えた。

「黄巾党はすでに物資を運ぶ準備をしていた。早急に手を打たないとまずいぜ」

「そうね。すぐに陣を撤収するわ。皆、急いで支度なさい」
俺が報告すると、すぐに華琳は指示をする。

「まだ、秋蘭が戻っていませんが……」

「待つ時間も惜しいわ。現地で合流するように遣いの者を出しなさい」

「予備の糧食も置いていくしかないわね。配る時間も惜しいけど、捨て置くと、今度は取り合っていないさかいの種になるか。沙和を残して配給を任せるべきかしら？」

「ああつ、沙和もしっかりと仕事をしていたようだし。向いてると思うぜ。任せた方が良さだろう」

「琥音が言うのなら、配給は沙和に任せて、総員、可能な限り早い

で撤収、終わった隊から出発なさい！」

「は！」

桂花が返事をする。

「春蘭、撤収はいいから先頭で案内なさい。一番遅くなった隊は、夏候惇隊の陣の撤収をさせるわよ！」

「了解です！」

春蘭も返事をした。

こうして俺たちは沙和に配給を任せて、集積地点である山奥の古ぼけた砦へと撤収しながら向かって行った。

傭兵 競争に加わる

俺たちは半日はかかるであろう行程を凄まじい勢いで駆け抜け、数刻で黄巾党の物資の集積地点である山奥の古ぼけた砦に着いた。

「本当に良い場所を見つけたものだわ……」
華琳が呟く。

「敵の本隊は近くに現れた官軍の迎撃に向かっているようです。残る兵力は一万がせいぜいかと」

凧の言うとおり、俺たちから大分離れたところで争っているのが見えた。

「籠れば有利な砦を捨てる。良くも悪くも賊と言う事か。発見できていなかったら、ここももぬけの殻だったな」

「華琳さまのご威光に恐れをなしたからに決まっているわ。だから、わざわざ砦まで捨てようとしているのだろう」

俺の呟きに春蘭が反応する。

それは違うと思うぞ？ 春蘭。

「連中は捨ててあるものを使っていると言う事なんだろう。だから捨てることに何も感じない。琥音、良く見つけてくれた」

「ああつ、役に立てて何よりだ」

「本当、見つける事ができて良かったわ。秋蘭、こちらの兵は？」

「義勇軍と併せて八千と小々です。向こうはこちらに気づいていませんし、荷物の搬出で手一杯のようです。今が絶好の機会かと」

「ええ。ならば一気に攻め落としましょう」

秋蘭の報告に華琳は砦を攻めることを決める。

「華琳さま。ひとつご提案が」

荀？が進言する。

「何？」

「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせてください」

なるほど。確かにそうすれば華琳の名は一気に広まるな。

「え？ どういうことですか？」

「この砦を落としたのが、我々だと示す為よ」

「なるほど。敵の本隊と戦っているという官軍も、本当の狙いはおそらくここ。ならば、敵を一掃したこの砦に曹旗が翻っていれば…」

…」

季衣は理解できなかったが、秋蘭は理解できたようだ。

春蘭が鈴々なら、秋蘭は愛紗と言ったところか。

「面白いわね。その案、採用しましょう。軍旗を持って帰った隊は、厳罰よ」

「なら、誰が一番高いところに旗を立てられるか、競争やね！」

「こら、真桜。不謹慎だぞ」

華琳の言葉に真桜は提案して、凧が諫めたが。

「ふん。新入りどもに負けるものか。季衣、お前も負けるんじゃないぞ」

「はいっ！」

春蘭よ。大人気ないぞ。

「姉者、大人気ない」

「そうね。一番高いところに旗を立てられた隊は、何か褒美を考えておきましょう」

周りの状況を見て、華琳が言う。

「それなら俺も参加しよう。良いよな？」

「ええ、勿論よ」

話が分かる雇い主だぜ。

「ただし、作戦の趣旨は違えないこと。狙うは敵の守備隊の殲滅と、敵の糧食を焼き尽くすことよ。いいわね」

「は！」

春蘭が真っ先に反応する。

まあ、賊の糧食を奪えば評判が下がるしな。

「これで軍議は解散とします。先鋒は春蘭に任せるわ。いいわね？
春蘭」

「は！ お任せください！」

「なら、この戦をもって、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせる
わよ。我が霸道はここより始まる！ 各員、奮励努力せよ！」

こうして軍議は終わった。

俺は凧と真桜に意見を出した後、義勇軍の配置を任せた。

俺は傭兵だ。元々義勇軍は凧たちが率いていたしな。

弓を構えて、矢を三本番え放つ。

全体的に突き刺さった。

「すこしずれてるか……」

俺は秋蘭の弓術を身につけるために凧たちの報告を待つ間、訓練をしていた。

祭さんの弓術を身につけたおかげで、当てることはできる。

弓術の根底は一緒だ。狙って射る。

動きや呼吸や射ち方などは違っているが、祭さんほどの達人の弓術を身につけてるおかげでそんなに時間をかけることなく秋蘭の弓術を身につける事ができる。

「琥音様、何故弓を？」

「ん？ まあ、ちょっとした調整をな。配置は済んだのか？」

「はい、楽進隊は布陣完了です」

「そうか。沙和も連れてくるべきだったな。あいつなら喜んで参加するだろうし」

「そうですね。沙和なら参加するでしょう」

「ところで、凧は旗立て勝負の褒美は何が良いんだ？」

「私ですか？ 私は別にないのですが、琥音様は何かあるんですか？」

「俺か？ そうだな、凧と一緒に過ごすために休みが欲しいかな」

「え？ 私とですか？」

「凧は嫌か？」

「い、嫌ではありませんが……」
凧は顔を赤くしていた。

「なんてな。冗談だ」
俺は凧の頭を撫でる。

「……」
凧は少し残念そうにしていたが、頭を撫でられると再び顔を赤くして俯く。

俺は少し撫でた後、撫でるのを止めた。

「あ……」
凧は小さく声を出す。

「なあ、「何や何や。何面白い話しとるん？」」

俺が言う前に真桜が後ろから来た

「真桜か。配置は終わったのか？」

「勿論、終わったで」

「そうか。旗立て競争での褒美を聞いてたんだ。真桜は何が良いんだ？」

「そんなん秘密や。琥音はんは？」
からくり関連ではあるだろうな……。

「俺も秘密だ。この戦が終わったら宴会でもするか。代金は俺が持

とう。勿論、沙和も一緒にな」

「マジなん！？ 琥音はん、太っ腹やわ」

「良いんですか？」

「ああっ、ただし沙和の分まで頑張るんならな」

「よっしゃー、やる気出たわ」

「ありがとうございます」

真桜は喜び、尻は頭を下げる。

「気にしなくて良いぜ」

たまにはこういう事に金を使つのも悪くない。

さて、報告に行くか。

華琳のところに報告に行った。

「華琳、楽進隊と李典隊布陣完了したぜ」

「華琳さま！ 秋蘭隊、布陣完了しました」

俺と季衣が報告する。

「そう、なら行くわよ」

「御意！ 銅鑼を鳴らせ！ 関の声を上げろ！ 追い剥ぐ事しか知らない盗人と、威を借るだけの官軍に、我らの名を知らしめてやるのだ！ 総員、奮闘せよ！ 突撃いいいいい！」

春蘭の号令により、俺たちは進軍を開始した。

俺は矢を五本番えて放つ。

矢は黄巾党の額、首、胸に刺さる。

狙いからはズレている。

「もうちょつと調整がいるな」

左から殺気を感じた。

俺は左から袈裟切りをしてきた黄巾党の剣の腹を弓で下から押すようにして弾き、右の拳に少量の気を纏って甲を顔面に叩きつける。

炸裂した瞬間に気を放つ。

爆発が起こり、黄巾党は吹っ飛び地面に背中を叩きつけた。

「こっちは十分だな」

俺は弓を背中に仕舞いながら剣を鞘から抜く。

そして、黄巾党に向かって行く。

黄巾党を叩き斬り、死角に回り込みながら斬り、動きを先読みしながら斬る。

黄巾党の斬撃は弾き、避け、防いで又斬る。

次々と黄巾党を殺していく。

周りを見ると風や真桜も奮戦していた。

黄巾党は次々と仲間を失い、中には悲鳴を上げながら逃げ回る奴もいる。

俺は進みながら黄巾党達をただの亡骸に変えていく。

しばらく進むと砦の前に着いた。

上を見上げると、季衣が城壁を登っていた。

中々、身軽だ。

目的地は砦の頂点か。

俺は季衣の動きを覚えて、素早く壁を登り始める。

思春や明命の技術を身につけたおかげで、動きだけならどんなものでも再現できる。

明命の隠密訓練では素早い木登りのやり方も覚えた。

少しトラウマが出来た。

俺が砦の頂点に着くと、季衣はまだ来ていなかった。

動きを覚えさせてもらったこともあり、待つことにする。

戦場を見渡すと、黄巾党は数を減らしていく。

春蘭や秋蘭も奮戦している。

そろそろ戦も終わるだろう。

「あれ？ 兄ちゃん？」

「よっ、季衣」

俺は右手を上げて、会釈する。

「兄ちゃんいつ来たの？」

「ついさっきだ、お前よく登れたな」

「へへっ、僕は昔から木登り得意なんだ。それにここが一番高いところだと思っただ」

城壁を登れるとは、一体どういう木登りをしてたんだ？

「そうか」

「うん、でもお兄ちゃんも木登り得意だったんだね」

「まあな。じゃあ、一緒に旗を立てるか」

「良いの？」

「別に構わないぜ。遠慮するな」

「うん、ありがとう兄ちゃん」

俺と季衣は二つの旗を立てる。

そして、一緒に降りると別々に分かれて戦場へと戻った。

「琥音様。今まで何処へ？」

何人が黄巾党を斬っていると思と真桜と合流した。

「まあ、ちよつとな。おつ、糧食も焼かれているようだ」

周りを見ると、春蘭とその兵によって糧食が焼かれる。

「何か、勿体ないなあ」

「気持ちは分かるぜ」

しばらく見ていると声が聞こえた。

「目的は果たしたぞ！ 総員、旗を目立つところに挿して、即座に
帰投せよ！ 帰投、帰投ーっ！」

秋蘭の号令が響く。

「さあ、帰ろうぜ」

「はい！」

「はあ、疲れたわ」

俺たちは黄巾党のいた砦から華琳の城へと帰って行った。

その帰り道。

華琳は俺たちを集め、簡単な会議らしきものを開いた。

帰ったら、片付けに専念して休めるように言う事か。

仲間の事を考えた良い気遣いだな。

「作戦は大成功でしたね、華琳さま！」
春蘭が言う。

「ええ。皆もご苦労様。特に琥音、素晴らしい働きだったわ。本当
あなたが欲しくなるわね」

「俺はいつでも雇い主のために全力を尽くしているからな。報酬は
弾んでくれよ？」

「分かっているわ。風や真桜も初めての参戦で、見事だったわ。沙
和も的確な配給だったわね」

「ありがとうございます」

「おおきに」

「ありがとうなのー」

三人は礼をする。

「さしあたり、これでこの辺りの連中の活動を牽制することが出来
たはずだけれど……」

「はい。しばらくは大きな動きは出来なんでしょう。ただ、もともと
と本拠地を持たない連中のこと。今回の攻撃も、時間稼ぎにしかな

らないはずです」

「でしょうね。だから連中の動きが鈍くなった今のうちに、連中の本隊の動きを掴む必要があるわ」

「情報を集めて回るか。まあ、補給線が復活すれば重要度の高い所へ優先的に回されるしな。それを追って行けば重要地点も掴めるという事か」

随分と地道だな。仕方がないが。

「そうね。しばらくは小規模な討伐と情報収集が続くでしょうけれど、ここでの働きで、黄巾党を私たちが倒せるかどうかが決まると言っても良いわ。皆、一層の努力奮闘を期待する！ 以上！」

「ああ、そうだ。例の、旗を一番高いところに飾ると言う話だけだと結局だれが一番だったの？」

「あーっ。何か忘れと思うたら、それが！」

華琳の言葉を聞いて、真桜が叫ぶ。だが、旗立て勝負を提案したのは真桜だったと思うんだが。

言い出した奴が忘れるとはな。

「はっはっは。初めての戦で、そこまでの余裕はなかったか！
まだ青いなあ！」

春蘭が笑いながら言う。

「くうう！ 置いて帰るので精一杯やったわ」
真桜はがっかりしている。

「春蘭は大人気なさすぎるがな」
俺はわざとらしくため息を吐いた。

「な、なんだとう！」
春蘭は怒っている。

誰が見ても大人気ないだろ。

「で、誰なの？」

「俺と季衣だと思っぜ。なあ、季衣？」

「うん！」

「どこに挿したの？」

「砦の頂点だ」

「正殿の屋根の上に突き刺さっていた、あれか！？」

「ああっ」

「琥音様、何時の間に……」

「さすが傭兵なだけはあるなあ、ちゃっかりしとるわ」
何やら凧と真桜が呟いている。

「……どうやって挿したの？」

「僕、木登り得意なんですよ」

「コツさえ掴めば誰でも出来るぜ？」

「ちょっと待て。季衣はまだ分かる。納得はできんが、琥音はどうやって登ったのだ？」

春蘭が俺に問いかけた。

「足で壁を蹴りながら登って、ある程度勢いをつけてから手で登ったが？」

『……』

皆は呆然としている。

「凄い、流石は琥音様だ」

「それができるのは琥音はんだけやない？」

まあ、俺のは組み合わせだからな。訓練を積みれば誰でも出来ると思うんだがな。

「なら、その勝負は季衣と琥音の勝ちで良いわね。二人は何か欲しいものある？」

「うーん。特に、何も無いんですけど」
季衣は困ったように言う。

「欲のない子ね。何でも良いのよ？」

「何かあるだろう。食べ物とか、服とか……」

「え？ どっちも、今のままで十分ですし」

「領地まではさすがにあげられないけれど。何か無いの？」

「そんなものいりませんよー」

二人の意見にも季衣は何かを頼むと言うことはしなかった。

純粹だな。

「まあ、いいわ。季衣はひとつ貸しにしておくわね。何か欲しいものが出来たら、言いなさい」

「はいっ！ ありがとうございます！」

季衣には動きを覚えさせてもらったし、後で宴会にでも誘うか。

「で？ 琥音は何か欲しいものある？」

「そうだな。腕スキの鍛冶屋を紹介してくれ。いくつか使いたい武器があるんだ。勿論、金はそっちで払ってくれよ？」

「へえ、あなた剣や弓以外にも何か使えるの？」

「まあな」

「良いわ。最高の鍛冶屋を紹介して、武器にかかる費用も此方で払う。その代わり、後でそれを使った手合わせを見せてもらおう」

「ああ、良いぜ」

こうして俺は華琳の知る中で一流の鍛冶屋を紹介してもらい、槍と愛紗の青龍偃月刀に似た薙刀に鈴々の蛇矛に似た矛と鉄甲を頼んだ。槍と薙刀と矛は本来の物より少し短い。後で真桜に頼んで、半分に分けて接合するという武器にした。

からくりなら真桜だしな。

そして、穂先を槍、薙刀、矛に変える事が出来るようにした。

とりあえず槍の穂先を着けて半分になっている。

薙刀と矛の二本の穂先でも短めの武器として使える。

収納するものも真桜に作ってもらった。

腰に巻けて、後ろに二本の棒を収納する場所がある。また、右横に槍と薙刀と矛の穂先や刃先を収納する場所もある。

左横は俺がいつも使っている剣の鞘を収納する場所だ。

鉄甲は腕から手までを覆う鎧のようなもので、軽く、強度自体は低いが、俺にはこいつを使う事で出来る技術があるので、強度を気にせず軽めにした。元々俺の守備なら強度自体は関係ないしな。

左腕に装着するもので、一つだけだ。

勿論、どれも一流なものだ。本当良い褒美だぜ。

ただ、あの後に凧と真桜と沙和と季衣で宴会をしたが、季衣が想像以上に食べ物を食べたので、溜めていた金がごっそりと減ってしまった。

余裕はあるのだが見通しが甘かったようだ。

まあ、良いか。皆楽しんでいたし、喜んでいたしな。

傭兵 霸王の城での暮らし

しょうさん「はあ！」

凧が拳を放つ。

腹を狙ったその一撃を俺は左の掌で弾いて、右拳の甲を凧の右顔面に打つ。

凧はそれをくらって、動きが止まる。

俺は左足で凧の腹を蹴った。

凧は蹴られて後退する。

俺は凧に向かって行く。

右の拳を放つ。

凧は防ごうとしたが、俺は途中で拳を止めて、右足で凧の左太腿を蹴る。

凧は痛みによって顔を顰める。

俺は凧の腹に縦にした左拳を打ち込み、引き戻すと縦にした左拳を顎に向かって振り上げる。

凧は顔を後ろに反らして避ける。

俺は右膝を上げて風の腹に打ち込んだ。

風はくらって、わずかに後退する。俺は左の掌底と右の掌底を水月に交互に打ち込んだ。

風は大きく後退する。

「はあああ！」

風は俺に向かって踏み込み、腰を捻りながら右足を振り上げて俺の左顔面を狙った蹴りを繰り出す。

俺は屈みながら地を滑るような右足の蹴りを風の左足に放つ。

「うあ！」

風は体勢を崩して、地面に背中を打ちつけて倒れる。

俺は風の顔面に右拳を突きつけた。

「これで終わりだ」

「参りました」

俺は凧から離れる。

凧も起き上がった。

「凧、お前の攻撃は素直すぎて読まれやすい。もっと虚実を混ぜないとな」

「はい！ 琥音様」

「後は、もっと最小な動きで相手に大きな打撃を与えられるようにならないとな。まあ、これは俺が教える。」

「ありがとうございます」

「おう、お前たちは十分才能がある。すぐ強くなれるさ」

俺は凧と真桜と沙和を訓練で鍛えていた。

とりあえず一人ずつ手合わせをして、欠点を教えながら良くなれるように指導する。

「うちら三人続けて相手にしても、まったく疲れてへんなあ」

「沙和たちと同じ武器を使っけていても強いのに」

俺は凧には体術、沙和には双剣、真桜には槍を使っていた。

双剣は俺の持つ剛剣と武器庫から持ってきた剣で戦い、真桜の槍は特殊なので、そのまま俺の持つ槍を使った。

「まあ、俺は最小の動きで戦っているからな。疲れはしない。お前たちも訓練を積みばできるようになる」

そして、俺は最小の動きを見せながら尻たちに模倣させて、又指導していく。

「ああ、疲れたわ」

「なの」

「良い勉強になります。琥音様」

「よし、休憩するか。次は基礎を徹底的に鍛えるからな。良く休んでおけ」

そして、三人に休憩させて俺は自分の訓練（朝早くにもやっている）をしようとした時に春蘭と季衣が現れた。

「琥音、此处に居たのか」

「やつほー、お兄ちゃん」

「ん？ 何か用か春蘭に季衣」

「おう、手合わせをしろ！」

「僕もよろしくね」

あれ以来、何度か春蘭とは手合わせをしている。

いつも勝っているが。

「今度こそ私が勝つ！」

「俺も負けるわけにはいかないな」

俺と春蘭は剣を構える。

槍や薙刀や矛も使って手合わせをしたこともあるが、一番手に馴染むのはやはり剣だ。

まあ、槍なども十分使いこなせるがな。

俺は春蘭に向かっていく。

俺は左の袈裟切りに剣を振る。

春蘭はそれを剣で防ぐ。

鏑迫り合いの状態になった。

少しの間、押し合っていたが、俺は力を抜く。春蘭は突然力を抜かれたことにより体勢を崩した。

俺は春蘭の腹を蹴る。

春蘭はその前に後ろに跳躍して蹴りの威力を軽減した。

「はああああ！」

春蘭は俺に向かって来た。

そして、剣を振り下ろす。

俺はそれを先読みして、静かに春蘭の後ろに回り込んだ。

「ぬ！」

俺は首に剣を突きつけようとしたが、春蘭はすぐさま右に跳んで避けた。

俺は春蘭を追う。

そして、体勢が崩れているうちに。春蘭に詰め寄り右に剣を振る。

「甘い！」

うまく力が乗っていない状態でありながら春蘭はそれを防ぐ。

俺はそのまま、右に左に剣を振り、右の袈裟切りに左の袈裟切り、剣を振り上げ、振り下ろす。

春蘭は剣で防ぎ続ける。

俺は猛攻をしかける。

俺は反撃されないように動きを変えていく。

春蘭は後退しながら何とか防いでいく。

春蘭は後退しながらも反撃するために剣を振る。

俺はそれを先読みして、左の鉄甲で剣の軌道を止めた。

「な!？」

俺は首に剣を突き付けた。

「私の負けだな」

俺は剣を引いて、鞘に納めた。

「琥音様、お見事でした」

「剣に槍に薙刀に矛に弓に体術。全部強いなんて凄いわぁ」

「琥音さん強すぎるの」

「じゃあ、次は僕だね」

言いながら季衣は鉄球を構える。俺も剣を両手で構える。

「ああ、来いよ」

「行くよー」

季衣は鉄球を投げた。俺は当たる直前に右に避け、季衣に向かって行くと突きを放つ。

「やっぱり、兄ちゃんは速いなあ」

俺は季衣の首元に剣を突き付けていた。そして、剣を引いて鞘に納める。

「そうでもない、ただ最小の動きで動いているだけだからな。」

「ふうん、やっぱり兄ちゃんは凄いや」

「俺なんか大したことはないさ」

「姉者や季衣に勝てる事は大したものだと思うが？」

秋蘭が後ろから声をかけてきた。

「そうだ、お前のような奴は今まで戦った中で初めてだ。いつも私の剣を防ぎ、お前の力は大したことないのに速さも重さも変わっていく。やりにくいぞ」

「まあ、そうしないと勝てないからな。力じゃお前には負けちゃう」

「そうか、だがいずれお前に勝つからな」

「俺も簡単に負けないぜ」

「望むところだ」

俺と春蘭は笑う。

「ところで、秋蘭はどうしてここにいるんだ？」
俺は秋蘭に問いかける。

「華琳様が琥音を呼んでいてな、ここにいると聞いて呼びに来たんだ」

「華琳が？ 分かった。すぐに行こう」

「ああ、頼む」

俺は夙たちに自由に訓練をするように言って、華琳の元へ向かった。

「何か用か、華琳？」

俺は玉座に来た。

「ええ、あなたに聞きたいことがあるの」
言いながら紙を取り出す。

俺はそれを見る。

「これは、ここの街の様子か？」

「そうよ。この街をもっと良くするためにはどうすればいいと思う？」

「おいおい、良いのか？ 俺にこんな物見せて？」

「良いわ、あなたの考えを聞かせてちょうだい」

俺は紙をもう一度見る。

中々良い政治をしているようだが、警備は不足しているようだ。

「警備の状況が気になるな。あくまで俺の考えだが……」

俺は警備について良くなるように意見を出す。

穏や冥林に仕込まれたおかげである程度の内政もできる。

まあ、苦手だからあまりしないのだが……。

「そう、良い考えね。それじゃあ警備部隊についてはあなたに任せようかしら？」

華琳は俺の考えを聞くと、そう言った。

「別に良いが、俺はいずれ旅に出るぞ？」

「だったら、その前に使い倒してあげるわ」

「そうか、まあ、雇い主のために全力は尽くすぜ」

「そうしてちょうだい」

俺は玉座から出る。

俺は警備部隊の隊長となり、部下として凧と真桜と沙和も警備部隊に入る事になった。

傭兵は 江東の麒麟児と再会する

俺は腰の後ろから棒を二本抜いて、二つを接続して薙刀にする。

俺は薙刀を振り下ろすと黄巾党を両断する。

更に振るい、黄巾党の体を切断していく。

鮮血が舞い続ける。

黄巾党の動きを先読みしながら、斬り、避け、弾き、防ぎ、又斬る。

更に死角に回り込んで斬る。

隣には凧もいる。

俺と春蘭に季衣と凧は黄巾党と戦っている官軍の救援に来ていた。

状況は黄巾党に官軍が押されている。

もう、撤退しかないだろう。

俺は黄巾党を斬りながら進んでいると官軍の将を見つけた。

出陣する前に多少は情報を得ている。

「あなたは華雄將軍ですか？」
俺は問いかける。

「おう、そうだ。貴様らはどこの兵だ？」

「俺の名は祇柳。陳留の州牧、曹操の代理で馳せ参じました。ご無事ですか？」

「ああ。本隊はすでに下がり、こちらでも苦戦しておったが、貴公らのおかげで何とか命を繋ぐことが出来た。礼を言う」

「はい。黄巾党は俺たちが引き受けます。官軍の皆さまは急いで撤退してください」

「すまん。ならば、その言葉に甘えさせてもらう。張遼にも連絡せよ、撤退するぞ！」

「は！」

「総員、撤退せよ！ 撤退だ！」

華雄は撤退していく。

本隊が撤退しているのに、何故華雄はここに居たんだ？

殿を務めていたわけじゃないようだしな。

「祇柳様！」

兵士の一人がこちらに近寄って来た。

「どうした？ 何かあったのか？」

俺は兵士に問いかける。

「はい。夏侯惇將軍の部隊が突如退却した黄巾党を追いかけて行きました」

俺は兵士の報告に一瞬、耳を疑った。

「それは確かか？」

「はい！」

俺は問いかける。

あの春蘭^{バカ} それは思いつきり罷じやないか……釣られてやる。

仕方が無い。

「呟、俺は春蘭と季衣を連れ戻しに行つて来る。ここは任せたぜ」

「はい！」

俺は春蘭たちが黄巾党を追いかけていった方向へと向かつて行つた。

とにかく急ぐ。

追いかけていくうちに森の中に入っていく。

ここはまさか荊州か。

俺は更に急ぐ。

目の前に春蘭と季衣の姿が見えた。

「春蘭！」

俺は叫んだ。

「おう、琥音。どうしたのだ？」

「どうしたじゃねえよ。お前何やってんだ！」

「見て分らんか？ 黄巾党を追っているんだ。何をそんなに怒っているんだ？」

「お前ら、ここが何処に分かってるか？」

俺は無駄だと知りつつ、二人に聞いてみた。

「何？」

「んにゃ？」

春蘭と季衣は首を傾げる。

やっぱり分からないか。

「ところで、黄巾党はどうした？」

「それが急に消えちゃったんだ」

季衣が答えた。

「そうか、やっぱりな」

「さっきから何を言ってるのだ。お前は？」
また春蘭が首を傾げる。

「ここはな……袁術の領土なんだよ！」

「何！？」

「にゃ！？」

ようやく事態が飲み込めたようだ。

「良いから、早く逃げるぞ！」

俺は言いながら戻ろうとする。

その時、耳にこちらに向かって来る音が聞こえた。

そちらを見ると、砂埃が見える。

「間に合わなかったようだ」

とりあえず目を凝らして見る。

孫の旗と袁の旗が見えた。

あれは雪蓮か！

袁術の客将になったと聞いてはいたが。

良い、なんとかなるかもしれない。

「良いか、今から俺がなんとかするからお前たちは何も話すなよ？」

「わ、分かった」

「その部隊！ 所属と名を名乗……琥音？」
雪蓮の声が響く。

「よう、久しぶりだな雪蓮」

俺は右手で会釈する。

「琥音、随分変わったわね。一瞬見違えたわ」

「まあ、戦場を渡り歩いてきたからな」

「そう、ところでどうしてここに？」

「ああつ、それがな。今は陳留の州牧である曹操に仕えてるんだ。官軍の救援をしていたんだが、後ろにいる曹操の將軍である夏侯惇と許緒が黄巾党の罠に引っかけた。ここまで来てしまった」

「陳留とは随分北ね。軍を引き連れてるんだから侵略してきたと取られても文句は言えないわよ？」

「そうだな。だが、こいつらは黄巾党を追っていただけだ。侵略の意思は無い」

「そうだ。そちらも賊がいては困るだろう。同行してもらってもい

いから連中を追わせてくれんだろうか」

俺が言っと、春蘭はとんでもない事を言った。何も話すなと言ったのにな。

「それは都合よすぎるだろ。春蘭」

俺はため息を吐く。

「そうね。琥音の言っとおりよ」

「策殿。こちらの準備、整ったぞ」

祭さんが雪蓮の後ろから現れた。

「久しぶりだな、祭さん」

俺は右手で会釈する。

「琥音、遅くなったの……」

「ああ、ちゃんと鍛錬続けてるぜ」

「うむ、見れば分かるわい」

「あら、思ったより早かったのね。つまんないの。もうちょっとゆつくりしていても良かったのに」

これは雪蓮に借りができそうだな。

「む？」

「夏侯惇と言ったわね？ 消えた敵部隊がどこにいるか、知りたくない？」

「良いのか？」

俺は雪蓮に問う。

「ええ、この辺りは沼地が多いから、身を隠すにはぴったりのよ。ヘタに追いかけると気づかれて、さらに逃げられちゃうからね」

「ということは……」

「私の領だつたら許しはしない所だけれど、袁術の土地に誰が入ろうが知ったことではないわ。盗賊退治をしてくれるというなら、今日だけは目をつぶってあげる」

「何？ 貴様が袁術じゃなかったのか？」

春蘭はまたとんでもないことを言う。

「馬鹿か！ 袁術じゃなくて孫策だよ。雪蓮はな」

「冗談にしても笑えないわよ。私は袁術の客将の孫策、こっちは副官の黄蓋」

雪蓮は不機嫌になりながら言う。

「どうする夏侯惇殿？」

「答えるまでもなかつ。任務を果たしたら、すぐに帰らせてもらう。それで良いか？」

「なら、こちらで案内するわ。付いてきなさい」

「すまないな。雪蓮」

本当は撤退するつもりだった。

「良いのよ、別に」

「いや、そういうわけにもいかない。俺の雇い主は誇りを気にするんでな。借りを返したがるだろう。それでだ、俺がお前たちに雇われるというのはどうだ？ 報酬は半額にしとくぜ」

「私は別に借りとかどうでもいいんだけど、琥音が来てくれるなら良いわ」

「決まりだな。まずは黄巾党を倒すか」

「ええ」

「琥音、お前の鍛錬の成果見せてもらうぞ」

「ああ、良く見ていてくれ」

そして、俺たちは雪蓮たちの案内で黄巾党の討伐に向かった。

傭兵は 霸王と別れる

俺は矢を五本番えて、黄巾党に向かって放つ。

矢は黄巾党の額、首、胸に突き刺さる。

黄巾党は次々に倒れる。

俺は矢を番えながら走る。

黄巾党たちの後ろに回り込んで、矢を放つ。

矢は黄巾党を死へと誘う。

俺は矢を背負うと、左の鉄甲で振り下ろされた剣を防ぐ。

右の縦拳を腹に打ち込む。

黄巾党は吹っ飛んで地面に倒れた。

俺は黄巾党に向かって、左の鉄甲をつけた拳を顔面に打ち込む。

黄巾党の顔面を潰して、吹っ飛ばした。

さらに走り、跳躍して回転しながら右の蹴りを繰り出した。黄巾党の左顔面に炸裂する。

俺は右の掌底を振って、顎に打ち込んだ。

右肘を後ろに引くように打ち込む。黄巾党の顔面を潰した。

右足を蹴り上げて、黄巾党の顎を打ち上げる。

後ろに向かって、顎を打ち上げた足で蹴る。

腹部に炸裂した。

俺は左と右の拳と掌底を腹と水月に打ち込んでいく。

また黄巾党のいる場所に向かって行く。

跳躍しながら右膝を顔面に打ち込んだ。

そして黄巾党の反撃を鉄甲と手で防ぎ、弾いて拳から掌底に拳の甲、蹴りや膝を打ち込んでいく。

そして死角に回り込んで、拳や蹴りを打ち込んでいった。更に氣弾を纏った拳と足を打ち込んで黄巾党の身体を破壊していく。

「よし、体術も弓術も馴染んできたな」

俺は剣を抜く。

「本当に腕を上げたのう、体術も身につけたようじゃし」

「使えるものは何でも使うからな」

俺は雪蓮の元へ向かう。

黄巾党を頭から両断した。

「本当、久しぶりだよな」

「そうね、黙って行く事なかったじゃない。皆寂しがってたわよ。勿論、私も……」

「悪いとは思ってるさ」

俺たちは会話しながらも剣を振って、黄巾党を上から横から両断したり、首を刎ねていく。

「随分強くなったようじゃない。こっちに来たら手合わせしましよっ？」

「そっだな」

黄巾党たちの鮮血が舞い、死体が転がっていく。

やがて、戦場は黄巾党の死体で埋まった。

「本当すまなかったな」

「うむ、礼を言う。おかげで助かった」

「ありがとうございます」

俺たちは次々に礼を言う。

「良いのよ。賊を討伐してくれたしね。待っているからね琥音」

「ああ、またな」

そして俺たちは華琳のいる城へと戻った。

「……と言うわけだ」

俺は華琳に報告する。

多少孫策の事も話した。

「まあ、借りを返せるならそれで良いわ。あなたが抜けるのは想定外だけどね」

「元々、俺は雇われてるだけだからな。抜けても問題は無い。孫策

とは知り合いだったのも助かった」

「あなたが孫堅と知り合いだったのも驚きだね。春蘭は後でお仕置きね」

「華琳様！」

春蘭は顔を青くしている。

「だが、華林。黄巾党はまた力を増してきているな」

一時的に黄巾党の勢いは収まってきたものの、今日の軍議でまた盛り返してきているのが分かった。

「それは折り込み済みな事だから、驚くことではないけれど。以後、奴らの相手は気を引き締めるように。特に春蘭と季衣、いいわね！」

「はっ！」

「はい！」

二人は返事をする。

「黄巾党はこちらの予測以上の成長を続けているわ。官軍はあてにならないけれど、私たちの民を連中の好きにさせることは許さないいいわね！」

「分かっています！ 全部、守るんですよ！」

「そうよ。それにもうすぐ、私たちが今までに積み重ねてきた事が実を結ぶはずよ。それが奴らの最後になるでしょう。それまでは今まで以上の情報収集と連中への対策が必要になる。民たちの血も米

も、一粒たりとて渡さないこと！ 以上よ！」

そして軍議は解散となった。

翌日、俺は今までの働きによる報酬を貰い、陳留から南陽へと向かうために城外にいる。

見送りもしてくれるようだ。

「琥音、あなたのおかげで大分助かったわ。ありがとう」

「ああっ、こつちも良い雇い主に会えて良かったぜ」
俺は笑いながら言う。華琳は微笑していた。

「琥音、すまなかったな」

「姉者が迷惑をかけた」
春蘭と秋蘭が謝罪する。

「気にするな。春蘭は一生懸命だったただけだしな。忠誠心は凄いと思うぜ。まあ、もうちょっと考えることは必要だと思っぜ？」

「うむ」

「本当にすまなかった」

「気にしなくて良いぜ」

俺は苦笑しながら言う。

「兄ちゃん、居なくなるのは寂しいよ」

「そうか。まあ、また会いに来るさ」

俺は季衣の頭を撫でる。

「うん、待ってるね」

「おう、待っててくれ」

また頭を撫でると、季衣から離れた。

「ふん、あんたなんて二度と来なければ良いのよ」
荀？が言う。

「はは、中々きついこと言うな。とりあえずはいなくなるから安心してくれ」

「どうして怒らないのよ？」

「嫌いなものはどうやったって嫌いだろう？ 暴言吐くのもしょうがないと思うしな」

「……」

「じゃあな、苟？」

「別れの時ぐらいは真名で呼んでも良いわよ。あなたの働きに対する報酬つてところね」

「そうか。それじゃあな桂花。俺からしたら又、華琳たちに会いにきたいけどな」

「……勝手にしなさい」
桂花は小さく呟いた。

「琥音様、行ってしまうるんですね」

「なんや、寂しくなるで」

「寂しいの？」

「ははっ、短い間だったがお前たちと居るのは楽しかったよ。俺の初めての部下だったしな。これからも三人で力合わせて頑張っていく」

れ」

「はい！」

「分かったわ！」

「分かったの！」

三人は返事をするが、凧に元気が無かった。

「大丈夫だ。また会える。次に会ったときに強くなったお前を見せてくれ。それがお前の師としての願いだ」

俺は凧の頭を撫でる。

凧は顔を少し赤くしながらこちらを見る。

「凧ならすぐに強くなれるさ。それじゃあな」

「はい！ 自分もつと強くなります。その時に伝えたいことがあります。聞いてくれますか？」

「分かった。お前が強くなったらちゃんと聞けぜ」

「お願いします」

俺は又、凧の頭を撫でると手を離す。

「琥音、次は必ずあなたを手に入れるわ」

「無駄だと思うがな。まあ、頑張ってくれ」

「ええ、言われなくてもね」

「それじゃあな、皆。一緒に居て楽しかったぜ。又会おうな」

俺はそう言って、歩き出すと陳留を後にした。

さあ、雪蓮に会いに行くか。

傭兵は又、江東の虎に雇われる

今、俺は雪蓮の居る荊州南陽に向かっていた。

それにしてもまた、雪蓮たちとの所に行く事になるとはな。俺が傭兵として最初に仕えたのは雪蓮の母親で長沙の大守であった虎蓮さんだった。

未熟だった俺に対して虎蓮さんは手合わせを挑み、俺は負けた。その後、祭さんによって育てられた。

今思えば虎蓮さんは俺の記憶力や目と耳が優れていることを分かっていたのだろう。

だが、俺の初陣で虎蓮さんは荊州刺史の劉表の部下黄祖の罠によって戦死した。

まさか、いきなり雇い主を失うことになるとは思わなかった。

戦は誰でも死ぬ可能性が出てくる。敵の刃や矢、罠など敵に殺される。又、流れ矢などの不運によって死ぬこともある。

何が起こるかは分からない。それが戦だ。

分かっているにしてもそれなりにショックは受けた。

あの人も又、俺の師だ。あの人がいたから今の俺がある。

俺は虎蓮さんが死んだ後に誓いを立てた。

雇い主やその仲間を必ず守るという誓いだ。

忠義心というものは今でも理解できないが、それに近いものは芽生えたのかもしれない。

俺は今までの事を軽く思い出しながら歩いていた。

「南陽はあそこだな……」

俺は目の前に見える門を見ながら呟いた。

雪蓮たちは虎蓮が死んだあと分裂する豪族などを抑えるため仕方なく袁術の客将となった。

その際、袁術により旧臣たちもバラバラな地方へと送られたらしい。華林の所に仕えていたときに再会したが、袁術の客将と名乗っているときは不機嫌だったのが分かった。微妙な感情の変化だったが、よっぽど日頃嫌な目に会っているのだろう。

だが、虎蓮さんの娘である雪蓮はいずれ袁術から独立しようとしているに違いない。

いずれは袁術も滅ぶだろう。虎蓮さんの約束もあるしその時には俺も力を貸そう。

今はたまたま力を貸すことになったがな。

俺は南陽の門を抜けて城を目指す。

「おら、お前ら動くなよ！」

城を目指していた俺だが、遠目から黄巾党の男だろう数人が民を人質に取り、野次馬が集まっているのが遠目に見えた。

俺は気配を殺して、街の物陰に隠れて様子を見る。

男たちの数は五人。剣を首に当てるようにして人質に取られているのは老人の男と女だ。恐らく夫婦だろう。

そして男たちの目の前には見覚えのある者が居た。

「人質を離しなさい。」

雪蓮だ。

「離せと言われて、はい、そうですねーって聞けるかよ！」

黄巾党の男は答える。

「しえ、雪蓮ちゃん……」

「わ、僕はいい。婆さんだけでも……。」

どうやら雪蓮と親しいらしい。民と仲良くなるとは雪蓮らしいな。

老夫婦は男たちに囲まれている。

どうやったかは知らないが黄巾党たちはこの街に入った。しかし、警備兵が誰かに見つかり、捕まる前に何とかあの夫婦を人質にとったのだろう。だがそこに雪蓮が現れた。

雪蓮から滲み出ている覇気によって黄巾党は動けないでいる。雪蓮も下手には動けないため好機を待っているようだ。

膠着状態になっている。しかしこの状況で人質を取るとするのは得策ではない。

素直に人質を取る前に降参して命乞いをするか、何もせずに逃亡すれば良かったのだ。まだそのほうが何とかなっていた可能性はある。人質を取った以上殺すことはできないし、かといって離すこともできないだろう。

「ねえ、今人質を離してくれたら命は助けてあげるわ。どう？」

「……」

雪蓮の誘惑に男たちは迷っている。

もちろん雪蓮の言うことは嘘だ。民に危害を加えた以上許しはしないだろう。

あいつらはもう許される範囲を超えたのだ。後は死ぬしかない。

そして、黄巾党全員雪蓮の覇気に吞まれて後ろがから空きになっている。

俺がいる物陰からは黄巾党の背後から状況を確認しているために黄巾党は俺に対して無防備という事になる。

この場合、俺があいつらの隙を作ってもいいのだが、剣で人を殺す
と行為によって、切断される肉体に飛び散る血や臓物は民たちにと
ってはかなり衝撃的な光景になるだろう。

できるならば見せるものではない。矢も衝撃的ではあるがまだ優しい
ものではあるはずだ。

俺は弓を背中から抜いて、矢を五本取り出す。

悪いがお前たちは此処で終わりだ。だが、運が良かったな。剣で斬
られる痛みを味わうこと無く一瞬で冥土に逝けるんだからな。

そして、五本の矢を番えると気配を消したまま物陰から飛び出して、
黄巾党に向かって矢を全て放った。

「が！」

「な！」

「ひ！」

「あ！」

「ぐ！」

黄巾党を一瞬で冥土に送った矢は全て寸分の狂いなく後頭部に刺さっていた。

男たちは倒れる。

俺は矢を背中に仕舞う。

雪蓮も人質になっている老夫婦も野次馬も皆、啞然としていた。

雪蓮は俺の姿を見ると、剣を鞘に納めた。

「琥音！」

そして走り近寄って来た。

「よう、また世話になりに来たぜ」

「いらっしやい、さつきはありがとうね」

「気にする必要はない。俺からはあいつらが無防備だったからな。さつさと片付けただけだ」

「でも、助かったわ」

雪蓮は微笑む。

「あ、あの」

人質になっていた老夫婦が声をかけてきた。

「おじいちゃん、おばあちゃん。大丈夫？」

雪蓮は二人に微笑みながら言う。

二人は頷く。

「さっきはありがとうございました。おかげで助かりました」

二人は俺に頭を下げる。

「別に感謝しなくても良いぜ。俺は雪蓮がやることを代わりにやっただけだからな」

「それでもあなたは私たちの恩人です」

二人は又頭を下げた。

「分かった、もう良い。十分だ」

俺は二人に顔を上げさせた。

そして拍手喝采が起こる。

俺は別に感謝されるような立派な人間ではないんだがな。

「見事な狙撃じゃったぞ」

祭さんが近寄って来た。

どうやら近くで様子を窺っていたらしい。

「まあ、かなり使えるようにはなったが、まだまだだ」

「良く言うわ、わしですら矢がいつ放たれたのか分からなかったぞ」

「俺はただ、今自分が出れることをやったただけだ」

「本当、強くなったもんじゃ」

祭さんは笑いながら背中を叩く。

「師として鼻が高いわい」

「それは良かった」

「それじゃあ、城に行きましょ。いろいろと話したいこともあるしね」

「そうだな。行くか」

祭さんは黄巾党の死体の処理を兵に命じて、俺と雪蓮と祭さんは城に向かって歩き出す。

「お帰り、琥音」

雪蓮が俺の顔を見ながら言う。

俺は苦笑しながらも言う。

「ただいま」

こうして、俺は一時的ではあるが再び雪蓮たちの世話になることになった。

傭兵は江東の虎たちと交流する

俺は雪蓮と祭さんに一緒に荊州南陽の城に入った。

「冥林、穩、ただいま」

城に着いた雪蓮が冥林に向かって言う。

左隣に穩も居る。

「何を呑気に。急に出て行ったから心配したぞ。人質は助けられたのか？」

「相変わらず行動が早いですね」

冥林はやれやれと言う風に首を振りながらも苦笑し、穩は笑っていた。

「うん、琥音が人質を助けてくれたの」

雪蓮がそう言ったので、雪蓮と祭さんの後ろに居た俺は二人の前に出た。

「久しぶりだな、冥林。元気だったか？」

冥林は俺を見ると、少し驚いていたがすぐに冷静になり言葉を返してきた。

「ああ、久しぶりだな。今でも戦場を渡り歩いているのか？ 随分

遅しくなっているようだ……」

「まあな、俺は傭兵だ。戦がある限りはどこでも働け。そして、今では凄腕だ」

「そうか、なら頼りにさせてもらおう。何より報酬は半分でいいと言っただけだな」

冥林は右手を差し出してきた。

「俺はがめついが、今回は成り行き上そうなってしまったからな。だからといって手は抜かないから安心しろ。よろしくな」

俺も右手を差し出して握手をする。

「琥音さん、久しぶりですね」

冥林との握手を終えると、穩が声をかけてきた。

「おう、穩も元気そうで何よりだ。」

「はい」

穩は笑うと、俺の背中に両腕を回すと抱きついてきた。

俺も同様にして穩を抱きしめる。

「ちょっと、穩ずるいわよ！ 私もまだなのに」

雪蓮が不満げに頬を膨らませていた。

「（また後でな……）」

「（はい）」

俺は穩の耳元に顔を寄せて呟くと、穩も呟きお互いに離れた。

そして雪蓮に近づく。

穩と同様に雪蓮を抱きしめた。

「これで満足か？」

「うん」

俺と雪蓮はしばらく抱きしめ合ったままだったが雪蓮は満足したように俺から離れた。

「今日は琥音も帰ってきたし、今から宴会ね」

嬉しそうに雪蓮は言う。

「良かったな、雪蓮。俺のお陰で酒を飲む口実が出来たな？」

俺は軽くからかってやった。

「ちょっと、琥音。それじゃあ私が酒好きみたいじゃない」

雪蓮は俺の言葉に気を悪くしたようだ。

「ん？　なんだ違うのか。今日は酒無しで宴会だな」

「それは助かる」

「むう、仕方ないの」

「ですねー」

俺の言葉に雪蓮以外の皆が反応した。

「ちよっ！？　ちよっと、誰もそんなこと言っていないでしょ！」

雪蓮は慌てながら言う。

「やっぱり酒好きじゃないか……」

「冥林、琥音が私を虐める」

雪蓮は冥林に近寄りながら泣くように冥林の胸に顔を埋める。

冥林は軽く抱きしめる。

「いつも人を困らせているんだ。良い薬だ」

「あゝん、冥林まで」

雪蓮は冥林から離れる。

俺は雪蓮に近寄って、頭を撫でる。

「悪かった。お前の気持ちは素直に嬉しいよ」

雪蓮はくすぐったそうにしていたが、撫でられるままになっていた。

「ん、琥音は意地悪ね」

「お前がかわいいから、つい虐めたくなるんだよ」

「う……」

雪蓮は顔を真っ赤にしている。

本当可愛いな。

冥林に祭と穏はにやにやして見ていた。

「傭兵というのは女の扱いもうまいものなのか？」

「いろいろ成長したようじゃな」

「雪蓮さん、顔真っ赤ですね」

口々に呟く。

「さて、悪いが少し休ませてくれないか。旅したばっかなんでな。さすがに疲れた」

思ったより遠かったために、少し疲労が溜まっているから休むことにした。

「良いわ、ゆつくり休んでね」

雪蓮は俺の申し出を快く引き受けてくれた。

俺は用意された自分の部屋に着くと、武器などを置いて寢床に横になると少し眠った。

そして、起きると雪蓮が宴会に呼びに来たところだった。

宴会は始まり、並べられた料理や酒を味わいながら俺が渡り歩いた国（その国の主が言われて困らない範囲の情報）の事を話して雪蓮たちからは今現在の状況を聞いた。

蓮華や小蓮に思春そして明命とは袁術によって散り散りにされたりしい。

予想していた範囲ではあった。俺は麗羽から多少袁術の事を聞いていたが、袁術が子供だと言うことと部下に張勳が居ると言うことくらいしか知らない。雪蓮たちによると、ただわがままな子供で、部下の張勳は多少頭が回る程度で大したことは無いとの事だった。

独立するための準備は進んでいるそうだ。

雪蓮や祭は酒を十杯は飲んでいたが、酒豪ということもあり平気だ。俺も雪蓮や祭さんに付き合っただけ飲んでるが十五杯目を飲むと酔いが回って来た。

「今日は宴会ありがとうな。そろそろ部屋に戻るとするぜ」

「えー、もう終わりなの？ まだまだいけるでしょ？」

「そうじゃ、男なんだからもっと飲まんか」

雪蓮も祭もそろそろ酔いが回ってきているようだ。

「もう習慣でな。悪酔いするまでは飲まないようにしている。仕事に差し支えるからな」

「今日は琥音のための宴会なんだから良いじゃない」

「今日の主役が遠慮する必要は無いわい」

雪蓮や祭さんは口々に言う。

「別に今日、明日は構わないぞ？」

冥林も珍しく二人に助け船を出した。

「そうですねー、琥音さんもっと飲みましょーよ」

穏も俺を誘うが、俺は明日やる事がある。

「悪い、明日は虎蓮さんの墓参りがしたいんだ」

宴会の空気が壊れてしまうことは分かっていたが、俺にとって大事なことのために言った。

皆は沈黙し、雪蓮が口を開く。

「そうね、琥音が墓参りに来てくれたら母さんも喜ぶし、明日案内するね」

「ああ、頼む」

そうして宴会は終了した。

自分の部屋で俺は人を待っていた。そして、扉が開かれる。

「琥音さん、もう眠るところでしたか？」

扉を開けたのは穏だった。

「いや、元々呼んだのは俺だしな。待っていた」

そして、俺と穏はお互い近づき、抱きしめ合うと口づけをした。

「ん……ふ……ふう……」

そしてお互い舌を絡めて唾液を啜るようにして味わう。

「はあ……じゅる……ちゅう……じゅる……ふく……」

そして十分堪能すると口を離す。

「琥音さん。もう、私……」

穏は顔を赤くしていた。今ので昂ったようだ。

「俺も、もう我慢できない」

そして穏をやさしく寝床に押し倒すようにして、前戯を始める。

「ふあああ」

耳から首筋そして胸と太腿など穏の身体を舌や手で愛撫していき、仕上げに右の指二本と舌で秘所を少し弄ると愛液が噴き出した。

「もう、良いみたいだな？」

「はい、お願いします」

そして、俺と穏は獣のように激しく求め合った。

「はあ……はあ……はあ……はあ」

穩は荒い息を立てている。俺たちは横になっていた。

穩はしなだれかかるように俺に抱きついている。

「随分御無沙汰だったからな。激しくなっちゃったが大丈夫か？」

「はい、むしろ嬉しいです」

「なら、良かった」

俺と穩がこういう関係になったきっかけは穩に政務や文字などを教わっていたときだ。

穩が言うには本を読んだりして知識が高まると性的に興奮するらしい。

教わっている間にどんどん悶えていくため俺もたまらなかった。

そして、とどめの一撃が「琥音さん、私を抱いてください」という
穩の一言だ。

俺の理性は崩壊した。穩に合意を取ると俺は穩を抱いた。

元々穩に悪い印象も持っていなかったし、抱いた後には好意も芽生
えた。

「本当ならずとお前の側にいてやるべきなんだろうが。悪いな、
穩」

俺は謝罪する。俺は自分でも相当に駄目な奴だ。

「良いんですよ、琥音さんは自由気ままに傭兵をしたいんですよ？
私は琥音さんのそんなところが好きです。まるで風みたいですし」

それにと穩は続ける。

「戦が終わったら一緒に居てくれると言ってくれましたし、此処に
いる間は私の事を……」

「愛するぜ、だが俺にはまた俺を待つてくれる女が居るんだ。それ
でも良いのか？」

「構わないですよ。でも私の事を忘れないでくださいね」

穩は微笑む。

「忘れるかよ。俺は記憶には自信があるんだ」

もつとも穩も分かつて言つたのだろう。

やばい、また昂つてしまった。

「今度は私からしてあげますね」

俺と穩はまた獸のように求め合った。

傭兵は最初の雇い主を弔う

俺は朝の光が差ししてきたところに起きる。穩は俺の側でまだ眠っていた。

起こさないようにして起き上がると顔や体を水で洗う。そして服を着替えると俺は部屋に戻った。部屋に戻ると、ちょうど穩が目覚めたようだ。

「おはよう、穩」

「おはようございます。琥音さん」

俺と穩は軽い口づけをした。

「今日虎蓮さんの墓に行つて来るな」

「はい、琥音さんの今までの事聞かせてあげてくださいね」

「そのつもりだ」

穩は俺の部屋から去っていった。俺はそれを見送った後習慣である訓練を始めた。

雪蓮たちと食事を取った後、雪蓮の案内で虎蓮さんの墓の場所まで行った。

虎蓮さんの墓は王の墓としては寂しいものだった。まあ派手な墓なんか好みはしないだろう。

まず雪蓮が墓に近寄る。

「母さん。本当は独立してから此処に来るつもりだったんだけど、今日は琥音が来てくれたの。後、私たちに仕えてくれるって」

雪蓮はさりげなく嘘を言った。

俺は苦笑する。

「死人に嘘を吐くなよ。雪蓮」

「ええ、どうして仕えてくれないのよ」

雪蓮は不満をもらすが、俺は無視して雪蓮の前に来ると、墓の前で座るように屈む。

「久しぶりだな、虎蓮さん」

俺は虎蓮さんの墓に語る。

「あんたが死んだ後、俺はいろんな国を回った。とにかく戦場を渡り歩いた。相変わらず国に仕えることをしなかったよ。そこは変わっていない」

俺は今までの事を報告する。

「まあ、変えるつもりはない。それとあの頃から更に強くなったぜ。今なら虎蓮さんともいい勝負できるかもな。敵わない願いになっちまったが」

まだあんたに俺は勝っていないんだ。あんたに勝てるようになる強さを得ることを目標にしているんだぜ？

「あんたのおかげで俺は凄腕の傭兵になれた。あんたが居なかったら凡人のままでいただろう。あんたは俺の師匠だ。そして俺はあんたが死んだ後、誓いを立てたよ」

それはな……。

「雇い主とその仲間を守ることだ。もう雇い主やその仲間の涙なんか見たくは無いからな」

最初はただ傭兵として働いて生活することだけを考えていた。自分だけが生き残ればいいとも考えていた。忠義心も持っていなかった。

「俺が唯一変わったといえそこだ。忠義心のようなものが芽生えたのかもな」

だが、悪くは思っていない。これもまた虎蓮が残してくれたものだ。

「今回はたまたま、力を貸すことになっちまったが、独立のときにも力を貸すぜ。」

虎蓮さんとの約束もあるしな」

仕えはしないが、約束は守る。

「俺が居れば安心だろ？ それじゃあ又来るぜ」

俺は立ち上がる。ふと風が吹いた。

虎蓮さんが頼んだよと言っている気がした。

「母さんといいい勝負が出来るって、私にも勝てないのにそんなこと
言って良いの？」

「ああ、それを証明してやるよ」

「へえ、楽しみね」

俺は言うつと雪蓮と一緒に歩き出し虎蓮さんの墓から去る。

またな、俺の初めての雇い主であり、師匠であり、俺を変えた人。
あんたがまだ生きていたら俺は傭兵を止めてあんたに仕えていたか
もしれない。

俺と雪蓮は虎蓮さんの墓から城に戻った。

そして、俺と雪蓮は昼食を食べてから庭に移動した。

冥林と穏と祭さんが俺と雪蓮さんの手合わせを見るため側にいる。

祭さんは審判だ。冥林と穏は離れて見ている。

「さて、私より強いかどうか見てあげるわ」

雪蓮は鞘から剣を抜きながら言う。

「琥音、お前の本気を見せてもらっぞ」

祭さんが言つと合図の準備をするために右手を掲げる。

「さて、戦場を渡り歩いて何処まで強くなつたのか見なければな」

「琥音さん、頑張ってください」

冥林が呟き、穏は応援する。

俺は剣から鞘を抜いて、雪蓮に向かって言う。

「お前には五連敗していたな？」

「もしかして、根に持っているの？」

雪蓮の言葉に俺は笑う。

「ああ、俺も男でな。女に負けたままで良しとはできないんだよ。悪いが負けを塗り替えさせてもらっ

「できるかしら？」

「ああ、出来るだろうぜ」

俺と雪蓮は構えた。そして祭さんが試合開始の合図を告げる。

「始めい！」

祭さんが掲げた手を下ろす。

その瞬間、雪蓮が向かって来ようと足を踏み出そうと動いた瞬間、俺は殺気を消しながら走って右手で持った剣を横にした状態で雪蓮の首に向かって突きを放つ。

「!？」

雪蓮は俺の動きに反応できなかった。俺は剣が当たる寸前で止めている。

「まずは一勝だな？」

「……」

雪蓮が俺の剣を弾こうと振り上げる。

俺は後ろに下がって避けた。

雪蓮が俺に向かってきた。剣を俺の首に肩や胴などを狙って振る。

俺はそれを剣で弾いて返す剣で雪蓮を狙う。両腕では無く右手で持った剣で弾いている。

雪蓮も俺の剣を弾いて、斬撃を繰り出しているが俺の斬撃が上回り出す。

「く！」

俺は先読みで剣の軌道を掴んで無力化しているが、雪蓮は勘を持っ
ても俺の剣が読めなくなっているようだ。もっともそうしてい
るのだがな。

「これならどう！」

雪蓮は剣を大きく振り下ろす。

俺はそれを左腕の手甲を上げて防ぎながら右手の剣を腹部を突く直
前で止めている。

「二勝目だ」

「そんな……」

俺は雪蓮から離れてわざと無防備になった。

「まだ本調子じゃないか？ 来いよ」

俺は手招きしながら雪蓮を挑発する。

「面白いじゃない！」

雪蓮は俺の言葉に腹を立てたか殺気を出して向かって来た。

そして、両手で持った剣で突きを放つ。

俺はその前に動き、雪蓮が左足を踏み込もうとした瞬間に左横に移動した俺はそれを右足で払う。

雪蓮は躓くよう転ぶところだったが上手く両手を突いて転がるようにして立ち上がる。

俺は雪蓮の背後から首に剣を当てていた。一振りすれば両断できる。

「三勝目だぜ？」

「ふふふふ、あははははははは」

雪蓮は笑いだした。さて、そろそろ入ったかな？

「最高よ、琥音。本当に強くなったじゃない。でもここからは取らせないわ」

雪蓮は舌舐めずりをする。その瞳は燃えていた。

雪蓮は生粋の戦闘狂だ。血を見ると興奮状態になるらしい。

また、強敵と戦い続けてもその状態に入ると言う事が分かった。

前はこの状態の雪蓮に押されて負けたが、次はそうはいかない。

「取ってやるさ。ここからは俺の技術を存分に使つてな」

俺は左腕で腰の右横から槍の穂を取った。

それを逆手で抜いて、雪蓮から隠す。

棒に接続しなくても暗器として使うことが出来る。

「良いわね。じゃあ全力で行きましょうか」

雪蓮がまた突進する勢いで向かって来た。

「はあああああ！」

剣を振り下ろす速度は先ほどより速い。

俺は剣を振って防ぐが弾けない。片手では力が足りず、押される。

だが、何も防ぐ必要は無い。俺はそのまま雪蓮の左隣へと移動し剣を手放しながら雪蓮の首に槍の穂先を当てる。

「四勝目だ」

「でも、剣を手放したわね？」

俺は槍を引くとそのまま前に走って雪蓮から離れる。

槍の穂先は腰の後ろに戻した。

「いいのかしら？ 剣を取らないで？」

「ああつ、武器はまだあるしな。だが弓と槍や薙刀に矛は使わない。素手でやってやるよ」

「馬鹿にしてるのかしら？」

いよいよ殺気が増してきた。殺気は十分だな。至極読みやすくなつた。

俺は右足に氣を集中して溜めていく。右足が光り輝いた。

雪蓮は俺に向かって走ると剣を右袈裟に振り下ろすがそれは虚で突きに变化した。

俺はそれを先読みしていたので腹部に右の前蹴りを叩き込んだ。

炸裂する瞬間に溜めた氣も放つ。

「がは！」

前蹴りが炸裂した瞬間爆発が起こって雪蓮は吹っ飛び地面を転がる。

「五勝目だ。これで最後だな」

「まさか、ここまでとはね」

加減をしているがかなり効いている。

俺は雪蓮に向かって走る。右腕の拳には気を溜めている。

そして拳を雪蓮の顔を狙って放つ。雪蓮は剣を振りながら後ろに跳躍した。

爆発が起き、雪蓮は吹っ飛ぶが着地する。

俺は目の前の落としていた剣を拾う。というより剣を拾うためにさっきの攻撃をしたのだ。

雪蓮も剣を構えていた。

俺は雪蓮に向かって走る。一気に間合いを詰めると両腕で持った剣を振り下ろす。

雪蓮はそれを防ぎ鎧迫り合いとなった。俺は右膝蹴りを腹部に繰り出す。

「甘いわ!」

雪蓮は後ろに下がって避けようとしたが、此处までの流れは俺が仕組んだものだ。

雪蓮は中々勘が鋭い。だが鋭すぎるのも問題だ。

膝蹴りは嘘で、上げようとした右足を降ろしながら踏み込んだ瞬間に気を放つ。

足から少量の気を放って爆発の勢いで俺の走りは加速して、雪蓮に近づきながら剣で突きを放つ。当たる直前で寸止めた。

「これで俺の勝ちだ」

「負けたわ」

俺は剣を引くと鞘に納めた。雪蓮も納める。

「まさか、策殿に勝つとはな」

祭が近寄り話しかけてくる。

「ようやく、勝てたぜ」

技を磨いた成果がようやく出てきた。雪蓮との想像試合も役に立った。

「悔しいわね。まったく琥音の動きが読めなかった。私は読まれていたのに」

「ようやく自分に合う闘い方を身に着けたからな。もう負けることは無いぜ」

相手が反応できないよう殺気を消し、攻撃は力まずに自然な流れで繰り出す。

攻撃しようとする瞬間は誰しも攻めるために僅かな隙が出来る。俺は呼吸や微細な動きを観察する事で先読みできるために隙をついてしまえばいいのだ。

相手は気づいた時には殺される事だろう。読まれても相手の流れをこっちの物にすれば問題は無い。

「黄巾党のときは本気を出していなかったのじゃな？」

祭さんが言う。

「出す理由も無いだろ？」

そして、冥林と穩が近寄って来た。

「琥音、まさか雪蓮に勝つほど強くなるとは思わなかったぞ」

「さすが、琥音さんですね」

二人は俺を褒めるように言う。

「こんな俺が格安の報酬で使えるんだ。悪くないだろ？」

「そうだな」

冥林がそう言う。

「琥音、次は私が再挑戦するわ」

「良いぜ、今日はもう無理だがな」

俺はそう言い、手合わせは終わった。

手合わせが終わった後、冥林に内政を頼まれた。

俺は今までの内政状況を書いた書簡を貰う。

「実際に見ないと具体的な改善案も出せないからな。街の様子を見てくる」

「分かった。ところで、今までお前が雇われた国では内政はやったのか？」

「何度かはな。自分からは言わないことにしてるんだ。傭兵が内政

に関わるのは元々おかしいだろ？ 頼まれればやるがな」

麗羽に雇われていたときに斗詩の仕事を手伝い内政に関わり、華林に雇われていたときに警備の仕事を任され内政に少しとは関わったぐらいだ。

「だが、お前のことだ。政務の手腕も落ちてはいまい？」

冥林は言いながら苦笑する。

「基本は冥林と穩に仕込まれたからな。頼まれた以上は結果を出すぜ」

「ああ、期待している」

俺は冥林の部屋から自分の部屋に行き、書簡を置いてから街に出た。

「おい、琥音」

歩いていたら祭さんに呼ばれた。仕事があると言っていたはずだが店で酒を飲んでいた。

さぼっているようだ。

「何をしておるんじゃ？」

「内政を頼まれたからな。とりあえず街を見ているんだ」

「そうか」

祭さんは言いながらも酒を飲んでいる。

「あまりサボっていると冥林に怒られるぜ？」

「別に恐れなどせんわ」

「あ、冥林だ」

俺は向こうの方を指差す。もちろん嘘だ。

「な!？ ど、どこじゃ?」

祭さんは俺の指差した方向を見て冥林を探す。

「恐れてるじゃねえか」

「た、謀ったな。師を騙すとは」

「なかなか反応が面白かったよ」

「ぬう、のう琥音……」

祭さんは面白いことを思い浮かんだとばかりに呟く。

「穏を抱いたな?」

「まあな」

何を言ってるんだかな。

「つまらんのう。普通恥ずかしがるもんじゃろ?」

「事実だからな。恥ずかしがることなんてねえよ」

「ほう、穩の事はどう思っておるんじゃ？」

「好きだ。愛している」

「それじゃあ、策殿に仕えるのじゃな」

「それは無い。俺に忠義心など無いからな」

「それは矛盾しておらんかの？」

「だろうな。だが、實際傭兵生活をする中で俺の事を待ってくれている女は何人が居る。もうとどまることはできないし、穩も承諾済みだ」

「それでは穩を愛しているとは言わんじやろ」

「俺は強欲だからな。一人だけを愛することはできない。だが、俺を求めてくれる女には側にいる間は応えるし、戦が終われば屋敷で暮らすなりして全員を愛そうと思っている」

「ほう、大したもんじゃの。だったら」

「祭さんは立ち上がった。」

「そこにわしも入って良いのかの？」

「祭さんは俺を見つめる。」

「俺で良いならな。節操なしな最低男だぜ。女の敵だ」

「構わん。甲斐性に自信を持っているようじゃからな。試してやろう」

「分かった。祭さんのことは好きだしな。俺を育ててくれたこともあるがずっと一緒というのも悪くない。むしろ望んでいる」

「わしも琥音とずっと一緒にいる時が一番楽しいぞ」

俺たちは見つめ合う。

「今度は本当に冥林が近づいているようだ。街の様子は見終わっていないしこのまま続ける。隠れながら行くと良い」

「うむ、分かったわい」

俺は祭さんと別れた。

そして、街を見回った後部屋に戻ろうとしたが、背中に声が掛けられた。

「琥音――！」

次は庭の木の枝に腰かけている雪蓮を見つけた。

酒を飲んでいるようだ。足を組んでいて中々、扇情的である。

「こっちに来なさいよ」

雪蓮は手招きする。

「悪いが仕事があるんでな」

そう言っつて、部屋に戻ろうとした。

「痛たたた、琥音に蹴られたお腹が……」

平気なくせに痛そうに演技をする。

やれやれ。

「分かったよ」

俺は木に登り雪蓮の隣に移動する。雪蓮は俺に酒を渡してきた。

「あまりサボっていると、冥林が怒るぜ？」

「怖くないもん」

雪蓮はそう言うのだが、さてどうだろうか？。

「あ、冥林だ！」

祭さんの時と同様の手を使った。

「うそ！？ どこといつ？」

やっぱりひっかったな。

「怖いんじゃないか」

「あー、ひどい。弄ばれちゃったな」

雪蓮は泣き真似をする。

「琥音に傷ものにされて弄ばれて私、もうお嫁に行けないわ」

「じゃあ、俺が貰ってやるよ」

「それは本当なの？」

雪蓮は俺の言葉に顔を赤くする。

「さあ、本当かもしれないし、冗談かもしれないぜ？」

「もう、どっちなのよ……」

雪蓮は拗ねるように頬を膨らませる。

俺は頭を撫でる。雪蓮は撫でられるままだ。

「好きな方を選べ。酒はほどほどにしろよ？ 後、俺は多少は仕事を頑張る女が好きだ」

「わ、分かったわよ」

俺は雪蓮にそう言つと木から降りて自分の部屋に戻った。

「琥音、私は……」

部屋に戻る途中、雪蓮の呟きが聞こえたが聞いていない振りをした。

俺は書簡を見ながら街の様子を思い出して、どこを改善すれば良いかいくつかの案を出した。

「こんなところで良いだろう」

そして、冥林の部屋に向かった。

俺は扉を開ける。

「よう、ひとまずは終わったぞ」

俺が言うつと仕事をしていた冥林がこちらを向く。

「ああ、其処に置いといてくれ」

冥林が指差す方向に俺は自分の改善案を書いた書簡を置いた。

「いくら改善案を書いておいた。まあ、出来る可能性のあるものばかりにしたつもりだからな。採用するかどうかはそっちが決めてくれ」

「分かった・今日はすまなかったな」

冥林はなぜかそう言った。

「何がだ？」

「二人が仕事をするように言ってくれたのだろう？」

「気にするな。冥林もあの二人が仕事をするほうが助かるだろ」

「あの二人のサボり癖には参っている。なあ、琥音」

「ん？」

「どうしてお前は国に仕えることはせんのだ？ 傭兵をやるよりは報酬も安定しているだろう」

冥林は俺に問う。

俺は苦笑ながらも問いに答えた。

「さあな、今でも何故だか忠義心は持てねえよ。雇い主のために全力を尽くす気持ちはあるがこれは忠義心では無いと思っている。俺は生きるために傭兵をしているからな」

「生きるためなら傭兵なんかしなければ良いのではないか？」

冥林は当たり前の疑問を口に出す。

「だろうな。とりあえず稼ぐために始めたが、今ではこの仕事を誇りに思っている。他の道はもう選べないな」

「そうか」

冥林は納得をしたようだ。

「まあ、雇われているうちは精一杯働くよ」

「お前は十分、私たちの助けになっている」

冥林は苦笑した。

「それは良かった。じゃあ部屋に戻らせてもらっぜ」

「また頼むぞ。琥音」

「内政は傭兵の仕事じゃねえけどな」

「確かにな」

俺と冥林は笑い合い、俺は冥林の部屋から出た。

自分の部屋に着くと穩が居た。

「今日もか？」

「はい」

穩は俺の問いに頷く。

「分かった」

俺は穩の求めに応えた。

傭兵は江東の虎と……

雪蓮たちに雇われて数日が経った頃、袁術の使者が孫策の元を袁術からの命令を携えて訪れた。内容は「黄巾党本隊と決戦し、撃破せよ」という無茶な内容だった。黄巾党は各地の諸侯の活躍によりその数を減らしつつあるが、本隊はまだ二十万は居るらしい。

大して南陽に居る軍は多く見積もっても一万だ。数に差がありすぎて討伐などできない。

死ねと言っているようなものだろう。当然の如く雪蓮は袁術の元へと向かった。

そして、袁術の元へと向かった雪蓮が帰って来た。

「どうだった？ 雪蓮」

冥林は雪蓮に袁術の元に向かって何が会ったかを聞く。

「どうもこうも、あの命令書の通りよ。冀州に居る黄巾党本隊を討伐しろですって」

雪蓮はやれやれと言う風に首を振る。

「まあ、各地方に散っている呉の旧臣たちを呼び寄せても良いかどうか聞いたらすんなり許してくれたわ」

「本当かよ？ 雪蓮の力を分散させておきながらまた集合を許すつてのは、随分と愚かな事をしたな」

俺は袁術の行動が信じられなかった。客將の力を分散させたのにも関わらず又、力を蓄えさせたのだから。雪蓮を抑えていた鎖を壊したようなものだ。

「まったくよ。皮肉の一つや二つ言ってやったのに全然気づきもしなかったわ。張り合いないわよ」

雪蓮はつまらなそうにため息を吐く。

「だが、これで動きやすくなったな」

「うむ、これで何とか独立する日も近くなったの」

「ようやくですね」

冥林に祭さん、そして穩は呟く。

「まあ、まずは黄巾党を討伐しないかね。琥音頼りにしてるわよ？」
雪蓮が微笑みながら言う。

「ああ、任せろ」
俺も笑いながら言った。

雪蓮たちは戦に出る準備を始めた。俺も武器の整備を始めた。

そして、黄巾党本隊が居る冀州を目指して進軍した。

冀州に向かっている間に方針を決めるための軍議が始まる。

「穩。蓮華達はいつ合流するって？」

袁術から直々に蓮華たちを集めて良いと言われた雪蓮は、蓮華たちに集合するよう書簡を送っていた。

「兵を集めてから合流するらしく、少し時間が掛かるとのことでした。」

穩は雪蓮の問いに答える。

「そう、ならば初戦は私達だけね。」

雪蓮は穩の問いに呟く。

「連れてきた兵は多くない。いきなり敵本隊と戦うことは出来んの
お。」

祭さんも自分たちの兵力を承知しているのでどうすればいいか考えていた。

「何も俺達だけで戦うわけじゃないぜ。他の諸侯もどうやら来ているようだ。まずは出城に籠っている黄巾党を叩けばいいだろう」

俺は戦に出る前に情報を集めていた。傭兵に限らず戦に出るなら戦地の情報はかなり重要な物となるからだ。敵兵の数、城や砦の場所、周辺の国の状況などを知ること自分たちにとってどう動けば良いか最良の方法を得ることが出来る。

戦場では間違った判断一つで死に至ることもある。

傭兵ならなおさら気にするものだ。何処に雇われたら稼げるか、生き残れるかなど情報を集めていないとこの仕事は続けられないだろう。すぐに死ぬことになる。

それに俺の根本は生きることだ。死にたくないから自分に少しでも有利な雇い主を探す。

いつも戦場で生き残るのは臆病者であり、俺も死を恐れている臆病者だ。

何が何でも生き残れる方法を考えている。だから強さを望むし、情報なども集めている。昔は雇い主ですら裏切っても構わないと傭兵を始める前に決めていたが、虎蓮さんに変えられて雇い主も仲間も生き残れるように力を尽くすことが傭兵をする上での誓いになった。

「そうだな、出城に籠った黄巾党を叩いた後に諸侯の軍と足並みを揃えて本拠地に迫れば、この兵数でも何とかなるでしょう」

冥林は俺の意見を聞くと、自分の意見を言う。

「私は琥音さんと冥林さんの意見に賛成です」

穩がそう言つと、雪蓮も口を開く。

「ふむ。ならそれで行きましょ」

「了解した」

こうして今後の方針は決まった。

「では、そろそろ軍を止めて昼にしようかの
祭さんが休憩の合図を出す。

「わーい、お昼お昼」

穏は嬉しそうに言う。

「琥音、話したい事があるから一緒に食事をしましょう。 冥林、
後の事はよろしくね」

雪蓮は俺を昼食に誘いながら俺の右腕を挟むようにして掴む。頭を
右肩にしなだれかからせていた。

「俺を食事に誘うなら、その先も期待していいんだろっな？」
俺はにやけながら言う。

「その先……？」

雪蓮は俺の言葉が分からなかったらしく首を傾げる。

「あまり遅くならないようにな」

冥林が苦笑して言う。

「さあ、雪蓮は魅力的だからな。どうなる事やら」

そして雪蓮を連れて歩き出す。

「え！？ その先って、まさか……」

雪蓮はようやく理解したらしい。

「さあ、何処で食べるんだ？ 何なら俺がお前を食べる場所を決めるかな」

俺は笑みを浮かべた。

「きゃあ、冥林、助けて」

雪蓮は叫んでいた。

「誘ったのは雪蓮だしな」

「いやあ、めでたいのう」

「おめでとーございます。雪蓮さん」

雪蓮の叫びを聞いた皆が言う。

「ちよっとー!？」

雪蓮はまた叫んでいた。

俺は苦笑しながら雪蓮と一緒に歩き出す。

俺たちは冥林たちと離れた場所で昼食を食べていた。

「まあ、全部冗談だな」

「何でもいつも私だけ虐めるのよ」

雪蓮は怒ったように頬を膨らます。

「面白いし、雪蓮がかわいいからだ
言いながら雪蓮の頭を撫でる。」

雪蓮は俺に撫でられるままだが、まだ機嫌は直っていない。

「いつもいつも、それでごまかされなんかしないわよ。純粹な乙女を傷つけたんだからね」

「純粹？ 何処が？」

俺は首を傾げる。

「また、そう言う事を言う。私は琥音の事が……」

何やら呟いているようだが、俺には聞こえなかった。

お互い、食事を食べ終えた。

「で？ 話つて言うのは何だ？」

俺は雪蓮に問う。

雪蓮は決心を固めるため、深呼吸をしてから口を開いた。

「琥音、蓮華を知っているわよね？」

雪蓮は意味のわからない事を言った。

「勿論だ。真名を預け合うくらいには親しくなれたしな。今じゃ嫌われてるだろうが」

蓮華とは俺が虎蓮さんに雇われ、祭さんに訓練されているときに出会った。

祭さんの副将となる俺に興味を持ち、会いに来たのがきっかけだ。

少し話をする、祭さんが信頼しているならと真名を預けてくれた。虎蓮さんが死んだ後俺はすぐに旅に出たからそれっきりだ。逃げたようなものだから怒っているだろう。

「別に嫌ってなんかいないわ。あの子も王の後継者よ。琥音だって自分の事は伝えてあるんでしょ？」

「ああ、一応はな」

初陣に出発する際に、戦が終われば旅に出ることは伝えていた。

「だが、戦場から居なくなるとは思わなかっただろ？」

「私も最初、びっくりしたけど。っていつか私には旅に出る事とか言わなかったじゃない」

「まあ、まさか初陣があんな形になるとは思ってたからな」

俺の言葉に思い出したのだろう。雪蓮は少し沈黙する。

「蓮華はあなたの事を心配していたわ。ちなみにあなたの事も伝えてないけど」

雪蓮は笑顔でそんな事を言う。

「なんで、伝えてないんだよ」

「その方が面白いから」

「おいおい」

俺はため息を吐いた。

「でね、蓮華はあれから成長してちよつと、真面目すぎでカタブツになっちゃったけど。可愛いし、おっぱいも大きくなったし、お尻の形も最高よ」

「ほお、それは再会が楽しみだ」

「そこでね。蓮華を妻にする気はない？」

雪蓮はそう言った。

「どういう意味だ？」

俺は雪蓮に問う。

「だって、蓮華と結婚すれば琥音も私たちに仕えるでしょ？」

「本人の意思を無視するなよ。言っておくが、俺には俺を待つてくれる女が何人が居る」

「え？」

「だから結婚なんかしたら、俺を待つてくれる女を泣かせちまうし、俺もその女を泣かせたくは無い」

「じゃあ、穏は？」

どうやら穏との関係を何処かで知ったようだ。

「承諾済みだ。こんな最低男を愛してくれる良い女だよ。俺も愛しているけどな」

それにと俺は言う。

「雪蓮は俺の事をどう思っているんだ？ 本当は蓮華じゃなくて前が俺の妻になりたいんじゃないのか？」

俺は雪蓮に近づき、顔を近くまで寄せて瞳を覗き込む。

「私は別に……」

雪蓮は顔を赤くしていた。

「まあ、良く考えるんだな。俺は一人の女だけを愛することはできない。求められれば応えちまう。責任は取るけどな。そいつの元にいる間は愛するし、戦が無くなって傭兵しなくても良くなったら屋敷で暮らすなりして全員を愛そうとも思っている。だが、こんな節操無しな男より良い男は居るだろう？」

「ねえ、琥音」

雪蓮は言っただけ沈黙する。

「ん？」

俺は首を傾げながら続きを待った。

「琥音は母さんが死んで、私が酒を飲んでいたときに言ったよね」

「……」

俺はその時の事を思い出す。雪蓮の悲しみを酒では無く、俺に向けさせた。

「琥音にとっては私もただの女だって」
そう言くと俺の身体に抱きついてきた。

俺も雪蓮を抱きしめる。

「私は琥音が好き。国に仕えさすとかはもう良いわ。私もあなたを待つ女の中に入れてくれる？」

「俺で良いならな」

「勿論よ。前に嫁に貰ってくれるって言ったでしょ？ あれ、本気にしてるんだから」

「そうだな。独占させることが出来ないが、それでも良いか？」

「そのかわり、たっぷり愛してよね」

雪蓮が言うつ、俺は目を瞑って雪蓮の唇に自分の唇を近づけて重ならせた。

「ん……」

そして、舌を出して雪蓮の口内へ入れて雪蓮の舌に絡める。

「ふ……うっ……ふうん」

雪蓮も俺の舌に自分の舌を絡めた。

「ん……れろ……れろ……ふ」

俺は雪蓮の唾液を吸っていく。雪蓮も同じように俺の唾液を吸りだす。

「う……じゅる……ちゅっ……ふっ」

そして、俺は唇を離す。

「お前が俺を求めれば応えてやるよ」

「琥音」

俺たちはまた、口づけを交わした。

「愛しているぜ、雪蓮」

「私もよ」

そして、しばらく見つめ続ける。

「さて、皆の元に戻らなくちゃね」

「そうだな」

雪蓮は俺の右腕を挟むようにして両腕で掴み、頭を俺の右肩にしないでからせる。

「いろいろすつきりしちゃった。もう我慢はしないからね」

「そんな殊勝だったか。雪蓮は？」

「あら、知らなかったの？ 私は純粋な乙女なのよ？」

「純粋かどうかは知らないが、お前は可愛いよ。それに俺には勿体ないぐらいの良い女だ」

「やっと、分かったのね」

俺と雪蓮は笑い合って、歩き出した。

食事を終えて、俺たちは進軍を再開した。

「雪蓮は自分の気持ちをお前に伝えられたようだな」

俺の隣に冥林がやって来た。

「分かるか？」

「上機嫌だったからな」

「分かりやすいしな」

俺が呟くと、冥林は笑みを漏らす。

「どうにかお前を私たちに仕えさせようと策を考えていたが、その必要も無くなったようだ」

「それは良かった。俺が誰かに仕えるってのは天地がひっくり返ってもありえないだろうがな」

「本当に惜しい。お前がいれば私たちは助かるのだがな」
冥林は呟く。

「冥林、お前無理をしてるだろ？」

「何？」

「ずっと思っていたが、お前が眠っているところを見た事が無い」

「いや、良く眠っているぞ」

冥林はそう言うが俺は言ってやる。

「嘘を吐くなよ。いつか壊れるぞ？」

「私には、雪蓮に天下を治めさせるという夢がある。そのためなら無理もするさ」

これも又、一つの忠義って奴が。本当に理解できないものだ。

「なら仕方ないな。俺が旅に出るまでの間と独立に力を貸しに来た時も、冥林が眠れるようもつと働いてやるよ。雪蓮たちのためになるよう働いたが、まだ足りなかったようだ」

「そんなことは無い。お前は十分私たちの助けに「なってねえよ」」
俺が言うと冥林は黙った。

「一人でも楽が出来ない奴が居たら、俺はお前たちの助けにはなっていない。俺は良い女には尽くす。お前に何かあったら雪蓮が悲し

む。あいつを泣かせたくは無い。それに冥林と穩のお陰で内政を覚えて、雇い主の役に立てられる事が増えたんだ。冥林は俺の政務の師で、大切な人だよ」
俺は微笑する。

「……琥音」

「心配するな、報酬は半額でもあるが格安にしてやるからよ」

「それは助かるな」

そして、冥林は俺の顔を見つめる。

「琥音、ありがとう」

冥林は顔を赤くして、礼を言った。

「気にするな」

これから忙しくなるが、冥林の照れた顔を見れたのだから十分だ。

「斥候が戻ってくる。戦闘準備に取り掛かるぞ」

冥林は照れを隠すためなのかそう言った。

「分かった」

俺も意識を戦闘に向けて切り替える。

冥林は各部隊に指令を伝えるため、伝令を放っていた。

「おいおい」

俺はその間、遠目から俺たちより前に居る雪蓮の様子を見ていたが、雪蓮が起こした行動にため息を吐かざるを得なかった。

「どうした、琥音？」

「雪蓮の奴、先行部隊を率いて前進したぞ。たぶん黄巾党を見つけたんだろう」

「何！？」

冥林は驚いている。当然だろう。総大將が軍師の意見も聞かずに突っ込んでいったのだから。

俺は思わず春蘭を思い出した。

「たぶん、止めても聞きそうに無いからな。助けに行つて来る。説教でも考えててくれ」

「たっぷりと説教してやる」

冥林は怒りを込めて呟いた。

俺は冥林たちより先に雪蓮と祭さんの所に向かった。

俺は遠くから弓で矢を放ちつつ、黄巾党たちに近づくと弓から腰の後ろにある棒二本を取り出して頭部を叩き粉碎していく。黄巾党が怯む間に棒二本を接続し、棒の先に腰の右横から槍の穂を抜いて、接続した。槍の完成だ。

左手に槍を持ったまま、右手で鞘から剣を抜いて右手で持つ。

沙和の双剣術を応用したものだ。とはいえ、槍と剣では長さも重心も違っているため戦いにくい、相手は賊であり大したことは無い。それに慣れれば、これもまた役に立つだろう。

俺は右の剣を振り、左の槍で刺す。黄巾党の身体は切断され、胸に穴を開けて倒れる。黄巾党の俺の動きに反応できない。反撃しても先読みできるために避けながら斬り殺して、突き殺す。困もつとすれば上手く動いて同士打ちを起こさせる。

次々と目の前の黄巾党を殺していく。鮮血が飛び散り、舞い続けた。

そして、雪蓮と祭さんを見つけた。

「勝手に突っ走るなよ。雪蓮、祭さん」

「あつ、琥音。やっぱり来てくれたわね」

「待っておつたぞ」

雪蓮と祭さんはこちらに気づいて笑う。

「冥林が怒っていたぞ。長い説教が待っているぜ」

「え、琥音は助けてくれるわよね？」

「そうじゃ、わしはお前の師であり、女なのだからな」

雪蓮と祭さんはそう言うが、正直それはごめんこつむりたい。

「無理だ。諦めるんだな」

「そんな」

「それは無いじゃろ」

こついう会話をしながらも、俺たちは黄巾党を殺し続けている。

「大体、お前たちの身に何かあったらどうする？　ここは戦場だぞ。何が起こるか分からないんだ」

「平気よ。琥音が守ってくれるもん」

「頼りにしておるぞ」

雪蓮と祭さんは呑気な事を言っている。

「当たり前だ。誰が殺させるかよ」

「やっぱりね。ところでそれ戦いにくくない?」

雪蓮は俺の剣と槍を指差す。

「問題無い、感覚が掴めてきた。効率良いしな」

「どこまで強くなるのよ」

「本当、器用じゃの」

雪蓮と祭さんは呆れたように言う。

「自分の女を全て守れるようになるまでだな」

「かつこつけちゃって、また惚れちゃったじゃない」

「さすがわしの選んだ男じゃ」

「それは何よりだ。さっさと片付けて冥林の元に戻るぞ」

「やだなあ」

「帰りたくないのう」

「自業自得だ」

「うう」

「はあ」

言いながら俺と雪蓮と祭さんは黄巾党の命を次々に奪っていった。

そして、黄巾党を全滅させて俺と雪蓮と祭さんは今にもご立腹だろ
う冥林の元に向かう。

「雪蓮っ！」

「うわっ、っわっ！？」

俺たちが帰ってくると、冥林の怒号が響いた。

雪蓮は俺の背中に隠れる。俺を盾にするな。

「総大将自ら軍の先頭に立って突撃するなんて。項王の真似をしているつもり？」

「ごめんなさい。でもさ、やっぱり兵士達には私の勇敢な姿を見せないといけないじゃない？」

「時と場合によるわ。いくら強大な敵だといっても、黄巾党はしょせん賊。賊相手に勇敢ぶっても、それはただの蛮勇にしかない。それぐらい、あなたなら分かるでしょ。」

「うん、今後は気を付けます。」

「よろしい。じゃあ次からは私の指示に従ってもらいます。良いわね？」

「はあゝい」

雪蓮はそう言うが、間違いなく懲りてはいないだろう。

念押しするか。

「心配するな冥林。同じ間違いは俺がさせない。雪蓮も俺の頼みなら聞いてくれるしな？」

俺は雪蓮の方を向いて言う。

「うん」

雪蓮が笑顔で頷く。

「琥音が言うなら安心だな」

冥林も納得したようだ。

「穩。一隊を黄巾党の陣地に向かわせ、物資を確保しておけ。その他の部隊は蓮華様達との合流地点に向かう。」

「はい」

冥林は雪蓮への説教を終えると、穩に指示をする。

「黄蓋殿は部隊を纏め、被害の報告を。その報告の後、雪蓮を止められなかった言い訳をして頂きましょう。」

「うぐ、わ、分かった。はあ……」

「どのような言い訳を聞かせて頂けるのか、楽しみにしておりますよ」

冥林は楽しそうに言っていた。

そして、俺たちは蓮華たちが合流するのを待っていた。

傭兵は江東の虎の後継者と語る。

俺たちが蓮華たちを待っていると、遠くから砂塵が確認できた。

俺には蓮華や思春に明命の姿が見えている。本当に懐かしいものだ。蓮華とは話をしたぐらいたが、思春と明命には隠密の技術を覚えさせてもらったのと腕を鍛えあった仲だ。俺の技術の一因を担っている。

「後方に砂塵あり、ですー。どうやら蓮華様達がやってきたみたいですよ。」

穩も発見したようだ。

「さすが蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る刻にという合流時間をつかりと守ってくれているな。」

「そういう融通の効かなさが、心配ではあるんだけどね。」

「雪蓮が不真面目すぎるんだよ。釣り合い取れてて良いじゃねえか。」

「あつ、ひどい。」

「確かにな……。」

「冥林まで。」

俺たちがたわいもない事を言っているうちに蓮華たちの牙門旗が止まり、人影が走り寄って来た。

人影は蓮華だ。後ろには思春に明命が居る。

「お姉様！今、報告を聞きました！ 単騎で敵陣に突入するとは、
どういうことですか！」

雪蓮に会うなり怒号を上げた。

「うわぁ」

雪蓮は再びの説教が始まる事を予感したのdarou。元気を無くして
いた。

冥林の説教だけでは終わらなかったようだ。

「あなたは孫家の家長にして呉の指導者！ それがこんな戦いで蛮
勇を振りかざしてどうします！」

「う、ごめんなさい」

雪蓮は蓮華に謝っている。俺は思わずにやけてしまった。

雪蓮を怒れるぐらいには成長したようだ。

「少しはご自分の立場を考えて下さい。 あなたは我らにとって大
切な大切な玉なのですから。」

「はぁーい」

雪蓮は気の抜けた返事をする。

「なるほど、成長したようだ。初めて会った時より気真面目になったようだ」

初めて会った時はもうちょっと口調も砕けていた。

「ああ、小々真面目すぎるがな。というより成長を焦っているようだ」

冥林が言う。

「焦りか。立派な王になるためにとってところか？ 虎蓮さんの影響もありそうだな」

立派な親を無くしたのだ。後を継ぐと必死になっているというのが見て分かる。

「そうだな。器で言えば雪蓮よりも大きいのだが」

「まあ、威厳はあるな」

いろんな王を見ているために、少しは王として立派かどうか分かる。

傭兵にとって、雇い主が立派であるかどうかを見極める能力は必須だ。

下手をすれば報酬を没られる可能性が出てくる。立派な主なら報酬をしっかりと払ってもらう事が出来るので安心して働ける。

今の所、報酬を渋られたことは無い。俺は雇い主を選ぶ能力にも自信を持っている。

「後は経験だけ積みめば、英雄になれるじゃろ」
祭さんは呟く。

「琥音さんも手伝ってあげてくださいね」

「分かっているさ」

俺は穏に言葉を返す。

「しかし、せめて周囲を見ることぐらいはしてほしいな。俺は無視されてるのか？」

蓮華は雪蓮を怒るのに夢中で、俺に気づいていない。

俺は雪蓮たちの後ろに居るので、雪蓮を怒っているところからは見えないうかが少し観察すれば分かる筈だ。

「そう言っな。それもまた時期に身につくだろ。気づいていただけたようだぞ」

「ああ」

冥林が言い終わる前には蓮華の説教は終わっていた。

蓮華は俺に気づき、呆然としている。

俺は雪蓮たちの前に出て、蓮華が確認できるようにしてやる。

「く……琥音？」

蓮華は呟く。

「ああ、久しぶりだな。蓮華、元気だったか？」

蓮華は俺に抱きつく。

俺は蓮華の頭に手を置いて、撫でてやる。

「急に居なくなるなんて心配したわ。あれからどうしていたの？」

「どうと言われてもな？　俺は傭兵だから戦場を渡り歩いてただけだぞ。綺麗になっただな」

俺は撫でるのを止め、蓮華も俺から離れた。

「ありがとう。琥音も遅しくなっているわね」

「それはどうも」

「でも、連絡ぐらいはしてほしかったわ」
蓮華は苦笑する。

「心配かけて悪かったよ。すまなかった」
俺は素直に謝った。

確かに連絡ぐらいはしても良かったかもしれない。腕を磨くのに必死だったと言う事もあるのだから。

「良いわ、無事というのも分かったしね」

「本当にすまない。また世話になるぜ？」

「ええ」

蓮華は微笑した。

嫌われているかもしれないと思っていたのだが、俺の心配は杞憂に終わったようだ。

むしろ、俺を心配してくれていたという。蓮華には感謝しなければいけないな。

勝手に出て行った俺を許してくれたのだから。

そして、俺は思春と明命のほうに向かって歩く。

「お前たちも久しぶりだな。思春、明命」

俺が語りかける。

「ふん、何処かで野垂れ死んでいると思ったが、生き残っているようだな」

思春はそう言った。

「琥音さん、久しぶりですね」

明命は明るくそう言う。

「おう、久しぶりだ。二人も悪かったな。だが、俺は傭兵だ。戦が終わればまた戦場を探す。それが俺の性分なんだ」

「別に私はお前の性分にどうこう言つつもりは無い。旅に出た事も

怒ってはいないが、せめて旅に出るなら一言言え。心配するだろ」
思春は最後の一言は小さく呟いていた。

「そうですよ、急に居なくなるからびっくりしちゃいました」
どうやら思春と明命にも心配をかけてしまったようだ。

「ああ、確かに一言いうべきだった。詫びを込めてしっかり働くから、宜しく頼むぜ」

俺は二人に握手を求めた。

「腕は上がっているんだろうな？」
俺は思春と握手を交わす。

「勿論だ。じやないと戦場で生き残れないからな」

「そうだな」

そして、思春と握手を終える。

「随分遅しくなっていますね。かつこいいですよ」
思春との握手を終えると、明命と握手を交わす。

「ありがとうな。明命も綺麗で可愛いぜ」

「はう、有難うございます」
明命は照れている。やはり可愛いな……。

明命との握手を終えて、二人から離れる。

「三人とも、琥音はあれから強くなってね。今では私より強くなっ

ているの。本当頼りになるわ」

雪蓮は俺に近づき、そう言う。

「お姉様が……」

「信じられないな」

「琥音さん、凄いです」

三人は口々に言う。

「雪蓮より強くなるのに苦労したがな。それに強くなれたのは思春と明命のおかげでもあるんだ。お前たちの技術は役に立っているよ」

「ふん、当然だ」

「なんだか照れますね」

二人は照れていた。

「さて、仲直りは終わったようね。部隊の再編をした後、すぐに出発しましょうか」

雪蓮の言葉に、皆気持ち切り替える。

「そうしよう。興覇、幼平。お前達2人は黄蓋殿の下につけ」

「は！」

「はい！」

冥林がそう言うと、思春も明命も大きく返事を返す。

「では2人には部隊の再編成を行ってもらおうか。真中は儂の部隊じゃ。2人は儂の両翼につけ。」

「了解しました。後曲はどのように配置します?」

祭さんの指示に思春が更に指示を仰いだ。

「後曲中央に雪蓮の部隊を、右は私の部隊がとる。左は穩が取れ」

冥林が更に指示を出した。名軍師だけあって判断が早い。

「待て、では私の部隊はどうするんだ」

蓮華が焦ったように言う。

「蓮華様は後曲の後ろ、輜重隊を護衛すると共に、遊軍として待機しておいて下さい」

「……分かった。」

さすがに聞くのは無粋だったと思ったのか、恥ずかしがって顔を赤くしている。

「じゃあ、俺は蓮華と一緒になるか」

「琥音?」

「琥音には私の隣に居てほしいんだけどなあ」

雪蓮が不満気に言う。

「蓮華には心配かけてしまったしな。俺も蓮華に聞きたいことがある。安心しろ、何かあれば駆けつける」

「そうね、任せるわ」

雪蓮は納得してくれた。

「では部署割が決まったところで、再編成に移る。一刻後には出発するぞ。」

冥林が最後に確認する。

「応」

「はー!」

「はい!」

「はい!」

皆が返事を返した。

「了解したぜ」

俺も返事を返すと、進軍を再開した。

「蓮華、聞いたぜ？ 王になるため頑張ってるらしいな。凄いじゃねえか」

俺は蓮華に声をかける。

「別に私は凄くないわ。王の後継者として当たり前の事をしているだけよ。琥音だって、凄腕の傭兵になったみたいじゃない」

「お前に比べたら俺なんか駄目だ。仕える主も決めずに風来坊のよう
に彷徨ってる。蓮華は立派だよ」

「ありがとう」

蓮華は俺の言葉に照れたのか顔を赤くしている。

「まあ、肩の力が入りすぎてるのは良くないな。もうちよと気楽になれ。皆が支えてくれるし、俺も居る間は支えてやるからよ」

「でも、私は……」

本当、カタブツ気味だな……俺が蓮華の肩の力を抜いてやるか。

俺は蓮華に提案を出す。

「今度、二人で街でも歩くか。頑張ってる蓮華に褒美でも買ってやるよ」

「良いわよ。私はそんな褒美を貰うような事をしていないし」

「良いんだよ。俺が決めたんだ。俺と一緒に街を歩くのは嫌か？」

俺は蓮華の顔を覗き込むように見る。

「い、嫌なわけじゃない」

俺の顔から逃げるようにして隠す。蓮華の顔は真っ赤だった。

「決まりだな。楽しみにしてるよ？」

「もう、琥音は自分勝手ね」

「まあな」

俺と蓮華は笑い合った。

そして、蓮華と思春と明命に会った俺たちは、部隊も増員して初戦を勝ちきった勢いのままに黄巾党本隊が籠る城に向かって行った。

俺は城を遠目に発見すると、蓮華に偵察することを言い、そのまま城の状況を見に行った。

城がしっかりと確認できるが、誰にも見られないところまで行くと城の周囲を囲うように配置された諸侯の軍勢の陣があった。

北に華林が、西に麗羽が、東に白蓮と桃香の旗がある。

皆、それぞれの理想に向けて頑張っているようだ。皆に会いたい気持ちはあるが、今は雪蓮が俺の雇い主だ。俺は雇い主のために働くのが仕事だ。

それに、今は会って語らうような状況でも無い。

俺は黄巾党が籠る城を観察する。籠る城としては最適だろう。見るだけで堅牢な城である事が分かった。

城壁の上には見張りもいるし、城内には二十万近く居るとも聞く。

あれを落とすのには苦勞しそうだ。力攻めでは無理だろう。城内も観察したいが、侵入できても帰れそうにない。まあ、冥林たちと相談すれば良い。策を練るのは軍師の仕事だ。

何も俺たちだけで戦うわけじゃない。他の諸侯を利用しても良いのだ。

雇われた事があるからといって、利用することをためらうような甘さは持っていない。人を利用するのは戦場では当然の事だ。時には非情にならなければ生き残れはしない。

それに、利用しようとしているのは他も同じだ。皆が皆、名声を欲してここに集まっている。連携など考えてもいないし、考えない。

あの城だ。諸侯たちは自分の部隊だけでは戦いがきついのは確かと思いい、だからといって正直に他者と連携を取ろうしたら名声は得られない。だが、他者を利用しなければ勝てないということも確かだ。ならばどうすれば良いか？ その答えは簡単だ。周囲の状況を調べ、諸侯の部隊が集まる時機に合わせて参戦しながらも隙を見て、敵大將を討ち取り、名を上げる事だ。この状況では皆がそうするし実際そうするべきだ。

暗黙の了解になっていると言っても良い。そしてこの状況で、雪蓮たちが選択するべき方法は一つだ。一番最後に参戦して、美味しいところは全て掻っ攫う。冥林ならこんな感じに考えるだろう。俺はあくまでこの状況を報告すれば良い。

まあ、俺がいる以上は名声を得るのは雪蓮たちになるようにさせてもらうがな。

俺は偵察から雪蓮たちの元に戻った。

「なあ、琥音。お前はこう思っている?」

冥林に城と周囲の状況を報告すると、問いを投げかけられた。

「何がだ?」

俺は冥林に問いを返した。

「城とその周囲に居る諸侯たちを見て、どう思ったのか聞いてみた
くてな」

おそらく俺を試しているのだろう。又仕事を増やされるかもしれない。
い。別に構わないが。

「どう思ったか言われてもな。城を俺たちだけでは落とせない事は
確実だ。他の諸侯を利用すれば別だがな。まあ、利用しようとする
のは他の諸侯も同じだろう」

「ならばどうするべきだ?」

冥林はさらに質問をする。

「分かっているくせに白々しいぜ? 周囲の状況を調べ、諸侯の部
隊が集まる時機に合わせて参戦しながらも隙を見て、敵大将を討ち
取り、名を上げる事が一番だな」

「そして、私たちが取るべき策は?」

「一番最後に参戦して、美味しいところは全て掻っ攫う事だ。合格か？」

俺はさっき考えた事をそのまま言った。

「合格だ。軍師としても申し分ないな」

「止めてくれ。そもそも俺に軍略の基本を叩きこんだのは冥林と穏だろ？ 考えるのは軍師の仕事で俺は傭兵だ。雇い主が有利になるよう提案はするが、元々俺は考えるより動く方が好きなんだよ」

「だが、私を休ませてくれるのだろうか？」

冥林は黒い笑みを浮かべた。

「分かった、また指導を頼むぜ」

「ああ、本格的に軍師というものを教えてやろう」

「だが、いずれ敵になるかもしれない男をこれ以上育てても良いのか？」

俺は苦笑しながら尋ねる。

「ああ、成長したお前と知で競うのも悪くない」
冥林は微笑む

「そうか」

俺は又、苦笑した。

そして、雪蓮たちが黄巾党の籠る城に到着した。

「曹、袁、公孫、それに劉。良い感じに集まってるわねえ。そういえば、琥音はここに居る諸侯、皆に雇われた事あるんだっけ？」
雪蓮は俺に質問する。

「まあ、そうだな。劉備には雇われていないが」

白蓮に雇われているときに桃香と愛紗と鈴々に出会った。そして、白蓮の客将の星にもだ。

星は俺を求めてくれた。そして、俺は再会の約束をして旅に出た。

ここでは会えないが、星とはいずれ会わないとな。

「ある意味凄いわね。あなたなら仕官の誘いもいくつかあったんじゃない？」

「ああ、だが俺の事は分かってるだろう？」

俺は雇われても、仕えはしない。この生き方を変えるつもりも無い。

「強情なんだから」

雪蓮はやれやれと首を左右に振ると、ため息を吐いた。

「だが、この状況は計算通りだな。これだけ集まっていれば、敵とは互角に戦えるだろう」

「じゃが、儂らの参戦する場所が無ければ、功名も立てられんぞ？」

冥林の言葉に祭さんが皆が思うであろう疑問を口にする。

「祭の言う通りね。諸侯の軍勢が集まっている以上、時間を掛ける訳にもいかないし」

「かといって、力攻めだけでは落ちんじやろ。」

「そうよね。どうする冥琳？」

雪蓮は祭の言葉に相槌を打つと、冥林に相談をする。

「ああ、穩、確か城内の地図があつたはずだが？」

「ありますよ。もともと大守さんの持ち物だったお城ですからね。はい、これです」

穩は城の地図を冥林に渡した。城の地図があると言うのはありがたい。

城内さえ分かれば、それだけ有効な城の落とし方を考える事が出来る。

「すまん」

冥林は穩から地図を受け取り、軍議が始まった。

机を設置して、地図が皆に見えるように置かれる。

「しかし、厄介な城だな」

冥琳は地図を見ながら溜息混じりにそう言った。確かに城内の地図を見れば、前面は広いが、左右は狭いために大軍で攻めることは難しい。かといって後ろには絶壁がそびえているために回り込む事ができない。本当に堅牢な城だ。

「攻めづらく、守りやすい。まさに教科書のようなお城ですねえ」

そう言いながら穏は難しそうな顔をしてじっと地図を見つめている。

「全軍を展開できるのは前面のみ。左右は狭く、大軍で攻めるには無理があるか」

「後ろには絶壁がそびえていて、回り込むことは不可能でしょう」

俺が思った印象と同様の事を言う蓮華と思春の意見に明命が頷いた。

「めんどくさいから正面から突撃しちやおうよ」

雪蓮は誰よりも早く地図から目を離し、そう発案する。

「うむ。策殿に賛成だ」

祭さんも雪蓮に同意するが、それができないから皆悩んでいるのだ。

「何を馬鹿な事を言っているのです、二人とも。タチの悪い冗談を言っている場合じゃありません」

案の定、蓮華が怒った。

「結構本気なんだけど」

ふざけていたのではなく、本気だったらしい。

「なおタチが悪いです」

俺も同意するよ。蓮華。

雪蓮がしょんぼりとしていた。

「琥音、何やらこの城を落とす方法を思いついたらしいな」

冥林が俺に意見を聞いてきた。

「ああ、多分落とせるだろうぜ」

俺はにやりと笑う。

そう、確かにこの城を落とすのは難しいだろう。だが、この城には欠点があった。

俺は城内の地図を記憶するために集中して観察していた。どう攻めるか想像しながら考えていたが、欠点を見つける事が出来たので落とし方も思いついた。皆が意見を出すまで待っていたのだ。傭兵は

雇い主の許しを得て発言するべきだとも思っている。冥林が言わなければ俺が発言の許可を得るつもりだった。

「琥音、どうやって落とすの？」

「そうじゃ、早う言わんか！」

雪蓮と祭さんが俺を急かす。

皆が俺に注目した。

「先ず、武器庫か兵糧庫か知らないがここに倉がある」
俺は倉であろう絵を指差した。

「そして、敵の中枢に、敵の宿舍が此処だ。これで分かるか？」
俺はさらに指を動かして、説明をする。

「なるほどな」

「あー！」

さすがに冥林と穩は分かったようだ。

雪蓮と祭さん、そして蓮華に思春に明命はまだ分からないようだな。

「どういう事？」

雪蓮は祭さんたちを代表して質問する。

「倉のあたりが死角になっているんだ。見張り台もこの一か所しかない。だからここから夜中に侵入して倉を焼く。それによる敵の

混乱に乗じて一気に攻め落とせば、城は落ちる筈だ。どうだ、冥林？」

「ああ、それなら可能だ。策はそれでいこう。不満は無いな雪蓮？」

冥林は雪蓮に判断を仰いだ。

「勿論よ。琥音の策だし、炎は大好きよ」

雪蓮は不敵に微笑みながら頷く。

「では雪蓮と祭殿には正面にて敵の陽動を担当してもらいます。城への潜入は……」

冥林がこちらを見る。

「俺と思春に明命で行こう。二人とも頼めるか？」

俺は思春と明命を見ながら、二人に確認を取る。

「ああ」

「はい！」

二人の頼もしい返事が返って来た。

「ならば、祭殿。諸侯の軍が引き上げた後、部隊を正門に集結させて下さい」

「ふむ。それは良いが、夜襲を掛けるのか？」

「掛けるフリだけで結構。奴らの目を正門に惹き付けるのが狙いで

す。」

「成る程。囿になる訳か。」

「ええ。その後、琥音と興覇と幼平の部隊が城内に侵入。放火活動を行います。その状況に合わせて、祭殿は雪蓮と合流し、混乱する城内に突入する。これでどうかしら？」

冥林は城を落とす最大の策を完成させた。

「良いんじゃない？ ワクワクしちゃうわ」

雪蓮もやる気満々のようだ。

「し、しかし……絶対に成功するという保証がない以上、お姉様が前に出るのは反対です！」

蓮華が反対の意見を上げる。戦に保障など求めることはできない。常に戦の状況は変わっていく。

分かっているのだろうが虎蓮さんのこともあり、不安なのだろう。

「蓮華。戦に絶対は無い。それぐらい分かっているでしょ？」
雪蓮が蓮華を優しく諭す。

「しかし、母様が死んだ時と、状況が良く似ていて。」
やはり、そうか。

「城攻めの時に私が死ぬかもって？ 無い無い。私が指揮するのは突入部隊だけ。城攻めの指揮は祭に任せるもの。」

「うむ。承った。」

それにと雪蓮は言う。

「もし、私に何かあってもすぐに琥音が駆けつけて助けてくれるわ。そうよね?」

雪蓮は俺を見る。

「勿論だ。俺は雇い主もその仲間も全員を守る。誰も死なせはしないさ」

「琥音……」

俺は蓮華の頭を撫でる。蓮華はくすぐったそうに撫でられている。

俺はしばらく撫でると手を離す。

「ね?だから安心して私の背中を見ておきなさい。……孫呉の王の戦いぶりをね」

雪蓮は優しく言つと、蓮華は頷いた。

「聞き分けの良い子は好きよ。じゃあ蓮華は後方に下がっておきなさい」

「はい」

蓮華は後ろに下がっていった。

「思春、明命。俺たちは部隊の編成と作戦の検討をしよう」

誰が何をするかや合図を決めておかなければ、指揮系統が混乱して

しまう。

「分かった」

「はい！」

二人は俺に同意してくれた。

「祭と私はしばらく待機。冥琳達はどうするの？」

雪蓮は冥林に尋ねる。

「穩は蓮華様の補佐を」

「了解でありまーす」

穩は元気に返事を返す。

「私は雪蓮たちが突入したあとの総仕上げを行う」
これで全員、やる事が決まった。

俺は思春と明命と一緒に部隊を集めると、役割を決める。

雪蓮が城門の見張りを誘導した後、城内に侵入。地上に居る敵の始末を思春が、見張り台の始末と城門を開ける役割を担当。明命は倉を焼くと言ったことになった。

策を提案した事もあり、俺が二人に状況に応じて指揮をする総指揮官となった。

手順も俺が見張り台を片付けた後、思春が地上の敵を片付け、明命が倉を焼く。

見張り台を取ればそこから弓で狙撃をして、二人の支援ができる。

後は二人と別れ、各々作戦の準備に入った。

俺も自分の天幕で武器の整備をして作戦の準備に入る。

そして、作戦開始の時間が近づき、月が浮かぶ夜となる。

「……琥音」

武器の整備が終わった直後、蓮華が後ろから声をかけてきた。

俺は振り返る。

「どつした？」

俺は蓮華に問いかける。

「琥音は、初陣の時はどうだったの？」

なるほど、そういえば蓮華は今日が初陣らしい。緊張しているのだから。

「普通は、緊張するらしいがな。俺は緊張しなかった。出来なかったと言っても良いか」

「え？」

「俺はな、戦場では生き残る事だけを考えてる。どんなに強い奴、偉い奴でも死ねば終わりだ。俺は死を恐れている」

「……」

蓮華は俺の呟きを聞いている。

「俺の父は戦場で戦死した。兵士として勇敢だったらしいが、自分より強い敵に殺されたよ。母も病死した。俺は一人だけで生きることになった。身寄りもいなかった……傭兵生活の始まりだ」

俺は今までのことを思い出しながら言う。

「そして、自分の死は恐れているくせに他人の死には無関心だ」

「どういうこと？」

蓮華は意味が分からないというように声を出した。

「親が死んでも、俺は泣けなかったよ。ああ、死んだんだなと思わなかった。人は初めて人を殺したときは罪悪感などが生まれ、

乗り越えなければ潰れると聞いていたが、俺にはそれが生まれなかったよ。死んで当然だろうという考えしかなかった」

俺は更に言葉を続ける。

「傭兵生活を始める前に決めたのは、戦場で勝ち残る方に雇われて、少しでも良いから報酬を貰う事だ。もし、死にそうになったら雇い主を裏切っても良いから生き残ろうと決めていた。そして、虎蓮さんに雇われて傭兵としての初仕事だ」

「く、琥音。手が……」

蓮華が何か言っているが、無視をする。

「虎蓮さんは俺にとって良い雇い主だった。俺に祭さんを師としてつけさせてもらい、育ててもらった。今の俺があるのは全て虎蓮さんのおかげだ。冥林や穩にも政務や軍略の基本を教わる事も出来たしな。そう、恩人と言っても良い」

「琥音、もう良いから」

「なのに虎蓮さんが死んだ時も、ひとり悲しまずにこれが戦か……なんて思ってたんぜ？ 俺はな、屑だ。何が雇い主やその仲間を守るだ。虎蓮さんに対する償いでも考えてるのか？ 最初から雇い主を失っておきながら、誓う以前の問題だよ。反吐が出る」

「琥音！」

蓮華が叫びながら俺の右手を両手で握る。俺はそちらを見ると、握った右手からは血が滲みだしていた。

無意識だった。俺は冷静な筈だったんだがな。

「まあ、だから俺の意見を聞いても参考にはならないぜ？　俺は壊れているからな。蓮華は緊張しているんだろ？」

蓮華は俺の顔をずっと見ていたが、沈黙しながらも頷いた。

「俺にはそれが羨ましいよ。別に恥ずかしがる必要も無い。誰だって緊張するだろ。しない方がおかしい」

「そんな事……」

俺は蓮華の頭に手を置いて、撫でる。

「心配するな。雪蓮や皆が黄巾党に負けるはず無いだろ？　俺も凄腕になった。何かあっても皆を俺が守ってやる。屑でどうしようもない俺だが、頼りにしてくれるか？」

「も、勿論よ。琥音は頼りになるわ。屑なんかじゃない。自分を卑下しないで」

「そうか、ありがとな。武運祈ってるぜ」

「私も武運を祈ってるわ」

そして、俺は蓮華から離れると集合地点へと向かった。

「作戦を開始する。琥音、興覇、幼平……行け！」

『は！』

思春と明命は返事を同時に返す。

「ああ、行ってくる」

俺は作戦を成功させることだけに意識を集中させて、思春と明命と共に城へと向かった。

傭兵は作戦を遂行する

俺と思春と明命率いる潜入部隊は今、黄巾党本隊が籠る城を監視できる地点で待機していた。無論城壁の上に居る見張りに見えないよう距離は離れている。城の右側面の城門だ。

城壁の上には黄巾党十三人の姿が見えている。もつじき雪蓮と祭さんによる誘導が始まる。

ここからでは城壁の高さがあるため弓による狙撃は無理だ。ここから弓を使えばということだがな。

「さて、もつじき始まるな。皆準備はいいか？」

俺は全員に確認を取る。

「勿論だ」

「いつでも大丈夫ですよ」

俺の確認するための問いに思春と明命が答え、潜入部隊の皆も頷く。

「よし、雪蓮たちが正門での誘導を開始したらあの見張りも動くはずだ。そうなったら俺がああ城壁に居る奴らを片付ける。その後侵入を開始するぞ。いいな？」

俺の最後の確認に全員が頷く。

俺は弓を背中から抜いて、矢を五本持つ。

そして、雪蓮と祭さんによる誘導が始まったのだらう。城壁の見張り十数人が正門に向かうため動く。

「行くぞ！」

俺は走り、氣を両足に溜める。そして城門まで近づきながら跳躍する。

跳躍しながら両足に溜めた氣を解放して放つ。爆発が起こり跳躍の勢いが上がった。

俺は城壁の高さまで上がる。矢を五本番えて見張りに向かって放つ。

矢は見張り五人の眉間を貫き、五人は倒れた。

そして俺は見張り五人を倒したと同時に着地する。俺は丁度見張りたちの中央に着地した。左に三人と右に八人だ。瞬時に左を見て、俺の目の前にいる黄巾党の男の腹部に右足の蹴りを打ち込む。

蹴られた黄巾党の男は血を吐きながら吹っ飛んだ。

俺は弓を背中に仕舞いながら右手で左腰に着いている鞘から剣を抜くと、蹴った男の後ろにいた左右に並んでいる二人の首を右から剣を振って刎ね、その勢いのまま振り返ると後ろから襲いかかった男が右手に持っている剣を振る前に右腕を斬る。

落とそうとしていた剣を左手で掴むと持ち主の首を刎ね、進みながら自分の剣で斬られた男の右後ろにいた一人を左手の剣の一刀で右に腹部を斬り裂き、さらに左手の剣で腹部を斬られた男の左後ろに

いた一人の腹部を右の剣で左に斬り裂く。

その男の右後ろにいた一人の首に左手で持っている仲間の剣を刺し、俺は右手で持っていた剣を両手に持つと首を刺した男の後ろにいた最後の一人を右袈裟に振り下ろして斬り裂いた。

見張りを全滅させた俺は城門から倉を見た。記憶した地図の通りに見回したのだが少し問題が生じた。

見張り台が増えていた。前方に一つとそこから後方に一つ。さらに右に一つあり、左に一つあった。四つの見張り台になっていたのだ。俺は後ろを向くと思春と明命たちが城門に梯子をかけて登り終えた所だった。

「琥音さんお見事でした」

「まさか跳躍して城門に着地するとは思わなかったぞ」

思春と明命は俺を褒めてくれた。

「おう、ありがとよ。ちょっと計画に狂いが出た。見張り台が四つある」

「どうする？」

思春が俺に尋ねる。

「多少時間がかかってしまいが俺が前方の見張り台を取った後、三つの見張り台を片付ける。皆はその後作戦に取り掛かってくれ」

「分かった」

「はい！」

二人の返事を聞いた俺は城門から降りて城内に潜入すると前方の見張り台に向かった。

途中、見張りなどがいたが俺は気配を消しているため見つからない。見つかりそうなきは物陰などに隠れてやり過ごした。見張り台に到着すると梯子を登る。

登りきると見張り台にいた左右に並んでいる二人の男を後ろから右手で抜いた剣で首を右に刎ねた。背中から弓を取り出す。見張り台から前にある見張り台を見ると見張りの男たちは油断しているのかこちらを見ていない。左右の見張り台も一緒だ。

俺は矢を放ち続けて見張り台を無力化する。そして思春と明命の姿を探す。

見つけると思春は地上にいる見張りを始末し、明命は倉に向かっていった。

他の者も思春と明命を支援している。俺も弓で思春と明命に遭遇しそうな見張りを殺して支援する。そして明命が倉に入った後倉から火の手が上がった。

倉が焼かれ、黄巾党は混乱している。明命が焼いた後倉から脱出するのを見ると俺は見張り台から降りて雪蓮と祭さんが待っているだろう城門に向かった。

目の前にいる黄巾党を弓で片付けつつ城門に着き、開ける。

「待たせたな。さあ、後は殲滅するだけだ」

「ええ」

雪蓮は俺の言葉に笑い、そして剣を掲げた。

「よし、今こそ決戦の時！ 皆の者、雄叫びと共に猛進せよ！」
皆に号令を掛けた。

『おおおおおおー！！！！！！！！！！』

雪蓮率いる将や兵士たちが雄たけびを上げ、城へと入っていく。

俺も弓を仕舞って、腰の後ろにある棒を一本抜いてその先に右腰にある薙刀の刃を着ける。さらに左腰から剣を抜く。左手に短薙刀、右手に剣を持って黄巾党に向かって行く。思春と明命たちと合流し勢いを更に上げて黄巾党を殲滅していく。

「殺せ殺せい！ 賊を人と思うなよ！ 餓えた獣を狩り尽くせい！」

祭さんが兵たちを鼓舞する。

「甘寧隊、追撃する！」

『応！』

「周泰隊は敵側方に回り込み、横撃を掛けます！ 我が旗に続いて下さいー！」

『は!』

思春に明命も自分の部隊に指示をする。そして、次々と逃走する黄巾党を俺たちは殺して、黄巾党を殲滅した。

「皆の者! 勝ち鬨をあげよ!」

『おおおおおお』

雪蓮の勝利を告げる声に皆が雄たけびを上げる。

俺は思春と明命へと近づく。

「やったな」

「ああ」

「はい」

俺は思春と明命の右手を自分の右手で叩き合わせる。

こうして黄巾党との戦いは終わった。

そして、皆は南陽へと凱旋を始めた。

俺は凱旋の途中で野営地に決まった所で建てた自分の天幕で武器の整備をしていた。

こまめにしなければ武器は斬れ味を失って行くからだ。常に万全な状態にしないと戦い続けることなどできない。

「琥音、また武器の整備をしているの？」

蓮華が後ろから声を掛けてくる。

「ああ、じゃないと戦い続けられないからな」

「そう。琥音、お疲れ様」

「別に大したことはしていないけどな。俺は働く以上は最善を尽くすだけだ」

「でも、あつという間に作戦を成功させたじゃない」

「思春と明命が居てくれたからな。二人が居てくれなかったらもうちょい時間が掛ってた」

「謙遜するのね」

蓮華が微笑する。俺もつられて微笑した。

「自惚れると碌なことにならないからな。お褒めの言葉は受け取っとくぜ。蓮華こそ初陣良く頑張っていたな」

「そんな、私なんてまだまだよ。皆の助けがないと駄目だわ」

蓮華は顔を赤くしながらも言う。

「それでいいんだよ。王は自分一人で戦うもんじゃなくて皆を引っ張って行くものだ。戦うのは俺や祭さんたち武将の仕事だしな。俺は傭兵だが」

「でも、姉様は……」

「雪蓮は特別だろ。勇敢な王もそれはそれで一つの王として立派だな。何も王の形は一つだけじゃない。いろいろやり方はあると思

うぜ？ まあ、俺は王じゃないから良くは言えないが何も雪蓮の真似をする必要も無いだろ。出来ないとも思っしな」

「琥音……」

「とりあえず自分に合ったやりかたで王を目指せばいいさ。大丈夫だ。蓮華なら立派な王にすぐなれる。それは傭兵の俺が保障する」

「ねえ、琥音」

「どうした？」

「琥音は又、何処かの戦場に行くの？」
蓮華は俺に尋ねる。

「ああ、それが俺の生き方だからな。少し休んだら又何処かの戦場に行くよ」

「……」

「そう、不安な顔をするな。別に今生の別れでもない。独立のために力を貸すという約束もあるしな。また頼りにしてくれよ？」
俺は蓮華の頭を撫でながら言う。

「ええ、琥音。私は自分がどういう王になりたいのか考えてみるわ。そして立派な王になってみせる」

「その息だ。頑張れよ」

蓮華は俺の声に頷く。

俺は撫でていた右手を離して、蓮華から少し離れる。

「さて、俺はもう寝るぜ。蓮華も自分の天幕に戻ると良い。正直
お前は魅力的だ。襲っちまうかもしれない」

「もう、馬鹿。ありがとう琥音」

蓮華は顔を赤くしながらも礼を言う。

「おう」

蓮華は自分の天幕へと戻って行った。

俺はその後ろ姿を見ていたが、しばらくすると自分の天幕で眠った。

傭兵の休息

「ほう、益州で黄巾党の残党との戦が始まるのか」

「へい、今はその準備をしているようです」

「なら、次はそこだな。ご苦労だった」

俺は男に金を渡す。世の中には情報を売買している商人が居る。その商人に戦の情報を調べてもらっていたのだ。益州はまだ行った事も無いし丁度良いだろう。

「いえいえ、毎度ありがとうございました」

「ああ」

俺は情報屋から出ると城に戻った。

城に戻る途中、庭に剣戟の音が響いていた。俺が遠目から確認すると戦っているのは蓮華と思春だった。俺は二人分の水を汲んで様子を見ていた。

どうやら手合わせをしているようだ。

「はあ！」

「……」

蓮華は息を切らせながらも思春に向かって剣を振る。思春はそれ自分の剣で捌いく。見るかぎり蓮華の剣は雪蓮を意識したようであるが、あれは蓮華に向いているとは思えない。

「闇雲に切り込めばいいというものではありません。蓮華様。」

「ええい、その余裕を今日こそは打ち崩してみせる！」

思春の言葉に蓮華は声を上げると構えた。

「やあ！」

そして、思春に向かっていく。

「熱くなるのは、蓮華様の悪癖です。それで剣捌きが多少冴えたとしても、心の方が乱れます」

「言わせてはおかぬっ！」

軽々と避けられ、思春の言葉に蓮華は冷静さを無くしている。

あれではまずいな。動きにも無駄がありすぎる。

雪蓮は自分の勘で相手の攻撃を察知して防いでいるが、蓮華は攻撃することに夢中で動きが隙だらけだ。

「それです。それを諫めているのですが……」

「ちい！」

次々と剣を振るが、思春はそれを避けて、避けて、弾いていく。

「それが孫呉の血、孫呉の気性、私の目には時に危うく映ります。」

「子ども扱いなどはさせておかぬ！」

蓮華は又、攻撃するが隙があるために剣の軌道が見え見えだ。

思春は避けると「ふう」とため息を吐いた。

「呆れたな！その余裕が私を苛立たせるのだ！」

怒りに突き動かされて、蓮華はさらに早く斬撃を繰り出していく。

もう完全に冷静さを無くしている。ここが戦場なら蓮華は何度討たれているか分からない。

勝負というものは相手をよく観察して、動きを読みながら攻撃していくものだ。

隙を窺いながらでないと攻撃は通用しないと言っても良い。とにかく相手の隙を作らなければ勝負には勝てない。

「思春！いつまで余裕を見せている。打ってこい！」

「私の守りを崩せぬ苛立ちが、顔に出ていますよ。」

「うるさい！」

「では、思春、参ります。」

そして、思春が反撃に移った。

「くう、く、ぐ！おのれ、この」

とたんに蓮華が劣勢になる。あれだけ隙を見せていたのだから当然だ。

蓮華は受けるのに手一杯になり、どんどん身体が後退していく。

思春は蓮華をどんどん追い詰めている。

「死の中に活を見出すのが孫呉の剣！食らえ、はあああ！」

「むっ！」

蓮華はなんとか隙を見つけたのか思春の攻撃を弾いた。

だが、それはわざと弾かせていたのだということを俺は分かっていた。

蓮華は剣を振ろうとするが思春はすぐに剣を構える。

そして決着がついた。

「あなたの負けです蓮華様」

「くそ……」

蓮華の首に思春の剣が当てられていた。

「よう、二人ともさっきの見てたぜ」

俺は二人に声を掛けながら近づいた。

「琥音、いつから見ている？」

「蓮華が息を切らした所からだな。とりあえず飲めよ」

俺は二人に水を渡す。

「ありがとう。全く気付かなかったわ」

思春も蓮華も水を飲み始める。

「ああ、邪魔をすると悪いからな。手合わせを見ていて思ったん

だが蓮華、お前は雪蓮の真似をしているな？」

「ええ、それが？」

「正直言つとあれはお前に合っていない。雪蓮は持ち前の勘で相手の攻撃を防げるからな。隙も無くせるが蓮華は隙だらけになっていた。思春もそう思うだろ？」

「ああ」

俺の意見に思春は同意する。

「そ、そんな……」

蓮華は驚いているがこれは事実だ。

「だから雪蓮の動きは真似しない方がよい。王になるなら勝つための剣より生き残る剣を学んだほうが良いだろう」

「生き残るための剣？」

「ああつ、無駄をなくして相手の攻撃を防いで生き残る。仲間が来るまで耐えるかあるいは勝機が掴めるまで粘る剣だな」

俺は剣を抜いて、二人の前に出る。

「無駄をなくすのは損じゃない。雪蓮の動きから無駄を無くすかどうか、見せてやる」

俺は剣を構えて、雪蓮の動きを再現する。

普段意識しない筋肉も使うことで身体は力まずに自然と動くようになる。殺気を消しながら剣を振っていく。雪蓮の動きは相手を喰い尽す獣の剣捌きだが、俺が再現すれば敵を喰うため隙を窺いながら戦う獣の剣となる。

剣を振り下ろすと。俺は剣を振るのを止めて、鞘に納めた。

「凄いわ」

「見事だな」

「ありがとよ、何なら俺が教えてやるよ。生き残るための剣をな。思春良いか？」

「別に構わない。いろんな相手と手合わせをするのも勉強にはなるだろう」

「そうね、お願いするわ」

昼に蓮華に剣を教えることを約束して、俺は蓮華と思春の二人と別れた。

「まあ、こうなるよな。穩から教われれば……」

俺は旅に出るまでの間に冥林と穩から本格的な軍師になれるよう教わっていた。

今日は穩から教わっていたのだ。

「あはは、すみません」

しばらくは持っていたが、もう興奮は最高潮のようだ。

「良いぜ、分かっていた事だしな。それに一段落は着いている。ここで勉強を止めても大丈夫だ。さあ、来いよ」

俺は穩を誘う。穩は俺に近づいてきた。

「はい」

そして、俺たちは変わった。

昼食を食べた後、俺は庭へと向かう。

庭には蓮華と思春が居た。

「なあ、琥音。私と手合わせをしてくれないか？」

「別に良いぜ。始めるか」

「ああ」

俺たちは後ろに下がって、距離を取る。

俺は剣を抜いて両手で構える。思春は剣を逆手に構えた。

審判は蓮華がしてくれるようだ。

蓮華は右手を上げる。

「始め！」

蓮華は声と同時に右手を下ろす。

合図はあったが俺と思春は動かない。思春や明命は相手の隙を狙って一刀のもとに仕留める戦い方だ。俺はその技術を身に付けているためにあえて思春に合わせている。自然と相手の隙を狙った静の戦いになる。

俺はわざと右に身体を動かす。思春が動くために息を吸って力を溜めて動いた。

俺は息を吸うのが聞こえた瞬間に思春に向かって行った。

剣で突きを放つ。思春が剣を振る前に俺の剣が思春の首に当たる直前で止められる。

「俺の勝ちだ」

「私の負けだ。私たちの技術もかなり磨いているな。動きがまったく読めなかった」

俺は剣を引いた。

「ああ、俺でさえここまで成長できたんだ。思春もすぐに強くなれるよ」

「当たり前だ。次はこうはいかない」

「そうか」

「では蓮華様、私はこれで……琥音頼んだぞ」

「分かつてる」

思春は庭から去って行った。

「姉様に勝つだけはあるわね。私にも琥音の動きが見えなかったわ」

「それができるようになるまでかなりかかったがな。さあ、始めるか」

「宜しく願うするわ」

蓮華は剣を抜く。

「とりあえず俺の剣を防ぎ続ける。無駄が無くなるよう指導はする」

「分かったわ」

そして、俺は剣を振りつづけ、蓮華はそれを防いでいく。

たまに騙しや蓮華が対処できない斬撃もする。とにかくいろんな剣を見極めるために観察力を鍛える。ある程度振ったところで蓮華は疲れたようだ。

ある程度休憩すると、次は蓮華の剣の振り方を見て悪いところを注意していった。

「まあ、こんな感じの訓練を続けていけばすぐに良くなるだろう。思春や祭さんにも頼むと良い」

「ありがとう。いろいろ学べたわ」

「それは何よりだ」

蓮華は庭から去って行った。

俺も仕事に取り掛かるために庭から去ろうとした。

「見事な指導じゃったぞ」

祭さんが後ろから声を掛けてきた。

「祭さんがいろいろ指導してくれたからだよ」

「それでも大したもんじゃったわ。のう、わしと勝負せんかの？」

「別に良いが、何で勝負するんだ？」

「弓じゃよ」

祭さんは的を置くと弓を構えた。

そして放つ。矢は見事真中に刺さった。

俺も弓を構えて矢を放つ。真中の矢に当たった。

祭さんも矢を放って真中の矢に当てる。

互いの矢は的に刺さった矢に当たり続け、50は放った頃、決着がついた。

「むっ」

祭さんが放った矢は真中の矢からずれて左上に刺さった。

俺が矢を放つと真中の矢に当たった。

「わしの負けか。わしが教えることはもうないわい」

「そうか。卒業と言う事で良いのか？」

「勿論じゃ、そしてこれでようやくお前の女になれる」

祭さんは俺を抱きしめた。俺も祭さんを抱きしめる。

「祭さん」

「祭で良い。琥音」

「祭」

俺と祭は目を瞑って口を互いに近づけて触れ合った。

「ん……ふう……んっ」

そのまま祭の舌を俺の舌で絡める。

「うむっ……うっ……はっ」

そして唾液を嚙りながら俺も唾液を流していく。

「んちゅ……じゅる……ふう」

そして口を離れた。

「今夜、お前の部屋に行くぞ」

「待ってるぜ」

俺と祭は一旦庭で別れた。

そして、夜になる。

俺が書簡仕事を終えると扉が開けられた。

「琥音」

相手は祭さんだった。そして俺の部屋に入って扉を閉める。

「祭」

俺たちは近づいて抱きしめ合うと口づけをする。そして寢床へと場所を移動した。

どちらも服を脱いで裸になる。俺は祭の身体の至る所を手や舌でじつくりと愛撫していった。

「なかなかすぐつたいの……ふっ……うん」

俺の舌や手で愛撫されることに嬌声を上げていく。

「俺は前戯派なんだ。相手を感じさせるのが好きだ。嬌声を聞くと盛り上がるしな。このあたりか」

胸を指で弄る。

「くああっ……なんじゃこれは」

「祭の感じる所だよ。ここもだ」

そして秘所を愛撫する。

「くあああああああ」

祭は大きな嬌声を上げ、秘所から液体を噴出した。

「これで準備は良いな」

「はあ……はあ……早く来てくれ」

そして、俺は祭と求め合った。

「はあ……はあ……はあ……激しいの、琥音は」

「祭が魅力的だからだよ」

俺は祭と寝床に横になっていた。

「嬉しい事を言ってくれるわい」

「事実だからな」

俺は祭と口付けをした。

「祭、愛している」

「わしもじゃ」

そしてお互い抱き合ったまま眠った。

傭兵は又、江東の虎と一時別れ旅立つ

俺は今、林の中を歩いている。遠くから悲鳴が聞こえた。

「うわあああ」

悲鳴は男の叫びだ。俺はその悲鳴を聞きながら木に腰かける。

「相変わらず、明命は張り切っているようだな」

明命による隠密訓練の最中だ。俺の他にも祭や穩とその部下が参加している。

林の中に潜む明命を見つければ俺と祭と穩の勝ちで、見つからなければ明命の勝ちだ。

敗者には洗っても中々消えない墨で落書きされるという罰が待っている。

書かれる内容は恐ろしいものだ。俺のトラウマになっている。

まあ、明命にはまだ俺を襲う気はないようだ。

遠くから穩の悲鳴が聞こえ、しばらくすると祭の悲鳴が聞こえた。

そして、こちらに迫ってくる明命の気配を感じた。

俺は立ち上がって動かず静止している。さて何処から来るのだろうか？

明命の迫る気配を感じながら襲って来るまで待っていた。弓で狙撃しても良いのだが傷を付けたくないなので素手で捕まえるつもりだ。

俺は力を抜いた。その瞬間後ろから明命が襲いかかってきた。

「甘いな」

俺は右に移動して明命の襲撃を避けた。

「え!？」

俺はそのまま明命を後ろから抱きしめた。

「捕まえたぜ」

「はっ、琥音さん恥ずかしいです」

明命が顔を赤くしているのが丸分かりだ。しかし良い抱き心地だな。

「中々良い抱き心地だ。このまま明命を抱き枕にしたいぐらいだな」

「そんなの恥ずかしすぎて死んじゃいます」

「それは残念だ」

俺は明命から離れた。

「琥音さん凄いですね。私隠密には自信があるんですが」

「実際明命は隠密においては優秀だよ。今の俺でも探しにくいし、昔は良く落書きされちゃう」

「こちらも琥音さんに隙が中々出来なかったので、襲撃するタイミングが掴めませんでした。隙を見せたと思ったら嘘でしたし」

「無駄な力を全部排除しているからな。力を入れなくても瞬時に動けるようになった。もちろん気配を遮断した状態でな」

「琥音さん本当に強くなりましたね。羨ましいです」

「そんなことは無い。俺でさえここまで腕を上げれたんだ。明命ならもっと先へ行ける筈だ。俺ももっと先へ行くけどな」

「やっぱり琥音さんは凄いです」

「ありがとよ。やっぱりかわいいな明命は」

俺はまた、明命を今度は前から抱きしめた。

「はっつ」

明命は顔をかなり赤くしていた。

「さて名残惜しいが、皆を起こすか」

俺は明命の抱き心地を十分楽しむと明命から離れ、歩き出す。

「あ……」

離れたときに明命は声にならない声を出していた。

「どうした、明命？」

「いえ、なんでも……」

俺は振り返って、明命を見た。明命は立ち止まったままだったが、俺が声を掛けると歩き出した。

そして倒れている皆を起こしていたが、もちろん落書きがされていた。

書かれている内容は本人のプライドに関わる事なので俺は胸に留めておくことにした。

街に帰る途中、落書きされた者は民たちに笑われていた。

「また旅に出るぜ。次は益州だ。雪蓮たちが独立したときにまた来るよ」

俺は虎蓮さんの墓に語りかける。益州の主はどんな奴だろうか。良い雇い主なら良いんだがな。そして俺が戻ろうと腰を上げたときに後ろから声が聞こえた。

「やっぱり、ここにいたのね」

後ろから声をかけてきたのは雪蓮だった。

「良く分かったな。勘か？」

「ええ、そうよ」

言いながら雪蓮は微笑する。

「母さん、私ね。琥音の女になったの」

「俺には待つてくれる女が何人が居るから、妻にはできないが好意には応えるつもりだ」

「祭や穏もね。いつそ仕えてくれたらなあ」

俺をじつと見てくる。俺は軽く口づけする。

「それはできないが愛しているのは本当だぜ」

「もう……」

俺と雪蓮はまた口づけをする。

「母さん、祝福してくれる？」

「かならず幸せにするよ」

そして、風が吹いた。これは祝福ということなのだろう。

「ねえ、琥音。私……」

雪蓮は潤った目で俺を見る。

「昂っちまったってか。良いぜ、部屋でやろう」

「うん」

雪蓮は俺の右腕を両腕で掴み、頭を右肩にしなだれからせる。

俺と雪蓮は城に帰った。

「琥音、もういいから……はあああ」

俺は雪蓮の秘所を手と舌で愛撫していた。五回は大きな嬌声を上げさせただろう。

「はあ……お願い、焦らさないで」

雪蓮は潤った目をしながら吐く息も熱く、俺に言う。

「お前の感じる声の中々良かったからな。つい夢中になっちまった。さあ、おねだりしてくれ」

俺が言うと雪蓮は頷き、秘所を自分で開いた。

「お願い。琥音、私に入れて」

「ああ」

俺と雪蓮も獣のように激しく求め合い、やがて何度か本能を解き放った後互いに寢床に横になった。

「すう……すう……すう……」

雪蓮は疲れたのか眠っている。

思ったより自分でも多く本能を解き放ってしまったようだ。俺は雪蓮の額に口づけをした。

「本当、可愛いよ。雪蓮」

俺はしばらく雪蓮の寝顔を眺めると雪蓮の部屋から出た。

「また働いているんだな冥林。休めつていったらどう？」

「いや、琥音のお陰でかなり休めているがな」

俺は夜中になっても仕事を続けている冥林の部屋の中に入った。俺は冥林の仕事をかなり手伝っているがなかなか寝ていてはくれない。

「良いからもう寝ろよ。仕事はしておいてやるから。言うておくが、お前が眠るまで部屋から出ないからな」

「……分かった」

しばらく沈黙していたがため息を吐くと寢床に横になる。

「心配するな。別に夜這いしたりはしないからよ」

「別にお前なら構わないぞ?」

「止めとく。旅が出来そうにないからな」

「それは残念だ」

俺は言いながら仕事に取り掛かる。街の経済状況から軍の状態などあらゆる分野の書簡が並んでいた。冥林といえどもこれだけの仕事を毎日一人でやっていては無理が出るだろう。仕事中毒にでもなっているのか? 俺も人の事は言えないかもしれないが休息は取っている。

「なあ、琥音……」

「ん?」

俺は筆を動かしながら言う。

「雪蓮に祭殿、穩を抱いたそうだな?」

「ああ、俺には何人か俺を待っていてくれる女がいる。俺は節操なしで苦勞を掛けることになるが、その待ってくれる女に加わってくれるそうだ。なら応えるさ。節操なしの最低男だがそれぐらいの甲斐性はあるつもりだ」

「そうか、私も加わって良いか?」

「冥林がそれで良いならな」

俺は冥林を見る。

「構わない。お前はよく働いてくれて、更には私の体の事まで気遣ってくれる。軍略や政務を教えてもすぐ吸収して知力を高めている。感謝しているし師としても鼻が高い。だが、お前を見ているうちもつと深くお前の事を知りたくなった」

「軍師としてか？」

俺は苦笑しながら言った。

「ああ、そして一人の女としてだ」

冥林も苦笑しながら言う。

「なら、とりあえず横になって休んで待っている。仕事が終わったら……な？」

「そうさせてもらおう」

冥林はそれ以上話しかけてこなかった。俺は仕事を続ける。

「こんなもんで良いか。さてと」

俺は仕事を終えて寢床に横になっている冥林を見た。

「すっ……すっ……すっ」

冥林は気持ち良さそうに眠っていた。

「今回はこの寝顔が見ただけ良いな」

俺は冥林の額に口付けをした。

そして自分の部屋に戻って眠ることにした。

別れの日、俺は益州に向かうため雪蓮たちと別れる。

「それじゃあな。独立が近づけばまた力を貸すぜ」

「ええ、待っているわ」

「達者での」

「早く戻ってきてくださいね」

雪蓮と祭に穏は一言言っていく。苦勞させてしまいが仕方が無い。

「ああ」

俺も一言そう言う。

「この前はすまなかったな」

「気にするな。とりあえず身体には気を付けてくれよ。俺を待つてくれるならな」

「ああ、分かっている」

冥林とはそう言葉を交わした。

「琥音、又旅に出るのね」

「ああ、次に俺がここに来た時は二人だけで街を歩こうぜ」

蓮華は俺の声に頷いた。

「琥音、次は負けないからな」
思春はそう言った。

「良いぜ、いくらでも勝負を受けてやる。こっちももっとお前たちの技術を磨いておくよ」

「そうか、元気でな」

俺は思春と握手をした。

「琥音さん、次は琥音さんの技も教えてくださいね」

「ああ、元はお前たちから覚えた技だからな。いくらでも教えるよ。じゃあな」

俺は明命の頭を撫でる。嬉しそうに明命は撫でられていた。

「世話になったな。またいずれ世話になるがその時は宜しく頼むぜ。それじゃあ行つて来る」

俺は雪蓮たちに別れを告げて益州へと旅立った。

傭兵は益州に着く

俺は雪蓮たちと別れた後、益州成都へと向かった。

門を抜けて城に行こうと街の中を歩く。

「うええん、うええん」

街を歩いていた俺だが、遠くから泣き声が聞こえた。

声からして少女の声だろう。俺は声の聞こえた方へと向かった。

「うええん、うええん」

泣いているのはやはり少女だった。紫の髪をおさげにしている、身長からして五歳ぐらいだろう。迷子といったところか。

「どうしたのかな、お嬢ちゃん？」

俺は少女の身長に合わせるように屈みながら聞くことにする。

「あ、あのね……璃々……お母さんとはぐれちゃったの……」

少女は嗚咽で声を詰まらせながらも応えた。

「そうか、家の場所は分かるかな？」
安心できるよう笑顔で少女に尋ねる。

「うん……お城なんだけど……一人じゃ怖くて……それに……」
落ち着いてきたのか嗚咽が収まっていく。

お城ということは侍女か文官か將軍辺りの娘なのだろう。まさか王の娘ではない筈だ。

少女のお腹から腹の虫が鳴った。しょうがない、たまには無償で人助けも良いか。

「俺の名前は琥音っていうんだ。お嬢ちゃんの名前は？」

「璃々……」

呟くように言う。

「じゃあ、璃々ちゃん。お兄ちゃんがご飯を食べさせてやるよ」

「本当？」

璃々は不安そうに言う。

「ああ、本当さ。それじゃあ行こうぜ」
俺は璃々に手を差し出す。

「うん」

璃々は笑顔になって俺の手を握った。そして二人で歩き、店に入る

と食事を取った。

「琥音お兄ちゃん、ご飯ありがとう」

璃々はおじぎをした。中々礼儀正しい少女だ。

「気にするなつて、それじゃあ一緒にお城まで行こうぜ？」

「うん」

そして、二人で城まで歩こうとした時、声が響いた。

「貴様！ 璃々様に何をしている！」

後ろから声を掛けられたので、振り向けば黒髪の短髪で前髪が一部白く、両腕に籠手を付けており右手に大きな金棒を持っている女が居た。周りに兵士が数人いる事からここの將軍だろう。

「あ、焰耶姉ちゃんだ」

どうやら璃々の知り合いらしい。

「知り合いか？」

俺は確認のために尋ねる。

「うん」

璃々は頷いた。とりあえずは一件落着だ。後はこの状況を何とかし

なければな。

「貴様、私を無視するな！」

女は叫び、俺に襲いかかってきた。

血の気の多いやつだな。

女は両手で金棒を持ち、振り上げる。

「はあ！」

そして、力の限り振り下ろしてきた。

俺は当たる瞬間に後退した。金棒は俺がさっき立っていた地面を砕く。

当たれば人間も破壊されるだろう。当たればだがな。

「貴様、何者だ！」

女は俺の事を只者ではないと思ったようだ。俺に再び襲いかかろうと金棒を振り上げる。後ろに居る兵士たちも持っていた槍を構える。

俺は腰の剣を地面に捨てる。

「ん？」

女の動きが止まった。俺は構わず弓と矢に槍や薙刀と矛の穂先に刃先と二本の棒を地面に次々捨てて最後に鉄甲を地面に捨てた。

女も兵士も俺の行動に困惑している。

「こつちはあなたたちと戦う意思は無い。俺の性は祇、名は柳、字は罫空。傭兵です。益州成都で黄巾党残党の討伐があると聞き、雇われに来ました。城へと向かう途中にこの少女を見つけて迷子と聞き、城に母親が居ると言うので一緒にいました。詳しい事はその少女に聞いてください」

「焰耶姉ちゃん、琥音お兄ちゃんの言うことは本当だよ。璃々を助けてくれたの」

俺の言葉に璃々が肯定する。

「むっ、だが貴様が唆したかもしれないだろう」
女は納得していないようだ。

そして、女の後ろからさらに二人の女が現れた。

「璃々！」

一人は紫の長髪の女。見た目からすれば璃々の母親だろう。これで何とかなったか？ 璃々の母親と思わしき女は璃々に近づく。

「お母さん！」

璃々も女に近づいて、二人は抱き合う。俺の予想は当たったようだ。

「お母さんごめんね……ごめんね……」

璃々は母親に会えた安心感から泣きだす。

「良いのよ、お母さんも一人にしてごめんなさいね」

璃々の母はそう言うと言つて自分の娘を強く抱きしめた。

「良かったな、紫苑」

もう一人の女はそう言って、璃々の母の肩に手を置く。

こちらは銀髪で髪を後ろを括り、櫛で止めている女だった。

「ええ……あなたは？」

しばらく抱き合っていた璃々の母は璃々から離れると俺を見た。

「あのね、琥音お兄ちゃんが璃々にご飯を食べさせてくれたの。そしてね、お城まで連れてってくれようとしてたんだ」

璃々が俺の事を説明してくれた。何とかかなりそうだ。

「そう……娘がお世話になったようで有難うございます」

「わしからも礼を言う。璃々が世話になった」

二人は頭を下げる。

「別に構いません。城に向かう途中の事で、娘さんの家も城みたいでしたから手間も省けるところでしたし」

気まぐれみたいなもんだったし、感謝されても困る。

「焰耶！ お前も早く礼をせんか！」

銀髪の女は黒髪の女に怒鳴る。

「ですが、桔梗様。こいつが璃々様を……」

黒髪の女はまだ俺を疑っていた。

「馬鹿もん！ この男は武器を捨てているだろう。敵意が無いと言う証明をしている。それにお前は璃々の言う事を信じないのか！」

「痛！」

銀髪の女は黒髪の女の頭を拳で叩いた。黒髪の女は頭を押さえながら俺に対して頭を下げる。

「疑ってすまなかった。璃々様を助けてもらい感謝する」

どうやら銀髪の女は黒髪の女の上司らしい。ということは武人で、璃々の母も武人なのだろう。

良く観察すれば、それらしい雰囲気もある。

「いえいえ、疑われる俺にも問題がありました。さて、自己紹介をしましょう。俺の性は祇、名は柳、字は罽空。真名は琥音。傭兵です。ここ、益州成都で黄巾党残党の討伐があると聞き、雇われに来了ました。お願いします」

「私は性は黄、名は忠、字は漢升、真名は紫苑。宜しくね琥音君」

「はい、紫苑さん。宜しくお願いします」

俺と紫苑さんは握手をする。

「琥音お兄ちゃん、璃々も宜しくね」

「ああ、宜しくな」

俺は璃々と握手をする。

「わしは性は巖、名は顔、字は無い。真名は桔梗だ。どうやら腕が立つようだな。」

「ええ、凄腕です。雇って損はさせませんよ。桔梗さん」

「なら、後で証明させてもらおう」

「それは勿論」

俺と桔梗さんは握手をする。

「私の性は魏、名は延、字は文長、真名は焰耶だ。腕に自信があるなら私と勝負しろ！」

「構いませんよ。城の方で手合わせしましょうか」

「ああ」

そして、焰耶と握手をする。

「少し、素を出しても良いですか？」

俺の問いに三人は頷いた。

「じゃあ、皆宜しくな。それと城で武器を渡すより此処で渡す方が良いから誰か預かっておいてくれ」

「分かった、私が預かるう」

焰耶が自分の兵士と一緒に俺の武器を預かる。

そして、俺たちは城へと向かった。

玉室に入り、俺は益州を治める劉璋に自分の事を説明した後、懇願する。

「黄巾党残党討伐に俺も加わらせてください」

「ほう、お前は武に自信があるのか？」

「はい、それなりに使えると自負しています」

「なら、せいぜい役に立て。そうすれば報酬はやるう」

俺は不快な気分だった。

劉璋は見た限り、自分本位の人間だろう。他人は自分の道具としか思っていないようだ。

俺を見下した目で見ている事から分かる。こいつは王だが真面目ではなく、快楽を貪り続けているはずだ。贅沢もかなりやっているのだろう。屑だな。

玉室に居る文官や武將たちも目が腐っている。こいつらも又、己が権力を利用して快樂を貪っているのだろう。

紫苑さんや桔梗さんに焰耶も居るが、皆、俺に対して申し訳なさそうにしていた。

真面目なのは一握りで、後は皆墮落している。いずれ、この国は滅ぶ。

「は！ 有難うございます」

俺はそんなことを思いながらも劉璋に頭を下げる。

「ああ、せいぜい感謝するんだな」

劉璋はそう言うのと、もう用は無いとばかりに俺を手で追い払う仕草をする。

俺は王室を出た。つい舌打ちする。

どうやら、失敗したようだ。こいつは絶対に報酬をまともには支払わない。

紫苑さんたちが居るから手を抜くことはしないが、どうやって報酬を取るとするか考えないといけないようだ。

こうして、俺は成都の劉璋くすに雇われることになった。

傭兵は成都の武將と手合わせする

俺は王室を出た後、紫苑さん、桔梗さん、焰耶と一緒に庭へと行って俺の力を見せることになった。手合わせの相手は焰耶だ。

手合わせの審判は桔梗さんがしてくれる。俺たちから少し離れた所で紫苑さんに璃々が見ている。

俺と焰耶は庭の中央で向かい合っている。

「やっぱり、このほうがしっくりくるな」
俺は持っていた全ての武器を返してもらい、装備している。

傭兵にとって武器は何より大切なものだ。これが無いと体術が使えるということも不安になる。

もう身体の一部と言っても良い。

「おまえ、それ全部使えるのか？」

金棒を持ちながら焰耶が俺に尋ねてくる。

「使えなかったら持ち歩かねえよ。 実際、全部使いこなせるからな」

俺は腰の後ろから棒を二本抜くと接合して一本の長い棒にする。
槍や薙刀や矛の穂先や刃先は使う気は無い。金棒ならこれで十分だろう。

手合わせだしな。

「ほう、中々言うな。それはぜひ見たいものだ」
桔梗さんが興味深そうな表情をしながら言う。

「それはいいが、今はこれで十分だ」

「貴様！ それはどどういう意味だ！」

俺の声に焰耶が反応する。しかし血の気の多いやつだな。
挑発にも簡単に乗りそうだな。

「そのままの意味だ。焰耶が相手ならこの棒一本で十分と云っているんだ」

「その言葉、かならず後悔させてやる！」

焰耶は金棒を構える。俺も棒を構えて焰耶と対峙した。

「琥音お兄ちゃん、頑張れー」

璃々が応援をしてくれた。紫苑さんも俺に対して微笑みながら会釈をする。

「ああ、恰好良いところ見せてやるよ」

俺は応えると、視線を焰耶に戻す。

少しの静寂の後、桔梗さんが右手を上に掲げた。

「それでは、始めい！」

桔梗さんは手を振り下ろした。

「いくぞ！」

焰耶が金棒を振り上げ、前へと足を一步踏み出した瞬間に俺は間合いを詰めて両手で持った棒で焰耶の首元に突きを放つ。

「な！？」

焰耶は俺に迫ろうと動いてたが俺の放った棒に動きを止めざるを得なかった。

俺は首元に当たる寸前で止めている。

「俺の勝ちだな？」

俺は焰耶に言う。

「あ、ああ」

焰耶は呆然としながらも頷いていた。

「勝負ありじゃ！」

桔梗さんが俺の勝ちを告げ、俺と焰耶の手合わせは終わった。

焰耶は武器が金棒という事もあり、動きが読みやすい。俺が相手の拳動を読めるようになったのもある。金棒は振り回す、振り下ろす、あるいは突きと攻撃が限定されるから動きも目立つ。

「琥音お兄ちゃん、すごい」

璃々が明るい声で言う。紫苑さんは呆然としていた。

「ありがとよ、璃々」

璃々の方を見て言うと、俺は棒を引く。

「ま、まったく動きが分からなかった」

焰耶は混乱している。焰耶からすれば俺が突如前に動いたと同時に棒を首に突き付けていた風にしか見えなかった筈だ。

「やはり、焰耶では敵わないか。次はわしとやってくれるか、琥音」

いつの間にか桔梗さんが武器を持っていた。大剣の上に筒があり、その上に持ち手が着いていて、筒から巨大な矢が出ている。接近戦と遠距離に対応しているようだ。

羨ましくはあるが、俺の筋力では使えそうにない。

「ああ、良いぜ。随分と変わった武器だな？」

「珍しいだろう。名を豪天砲と言う」

「中々良い名前だな。それじゃ始めるか」

俺は棒を二本の棒に分解して、腰の後ろに戻すと、左腰の鞘から剣を抜いて、両手で構える。

桔梗さんは俺から少し離れて豪天砲を構える。

「矢は使わなくて良いのか？」

桔梗さんは俺に尋ねる。まあ、確かに矢でやった方がこの場面では確実だろう。

「矢は後で使うことにする。それに全部使えって言ったのはそっちだろう？」

「確かにな。焰耶、合図をしろ！」

「は、はい！」

焰耶は手を掲げた。

さて、この間合いからでは矢を避けて迫っても逃げられるだろう。なら、少し進ませてもらおう。俺は桔梗さんに分からないようすり足で前に進む。

桔梗さんは合図と共に撃とうと力を溜めているのが見て分かった。

「始め！」

焰耶が手を振り下ろす。

「いくぞ、琥音！」

そして、豪天砲から巨大な矢を放たれる直前に俺は右へ移動する。

巨大な矢は俺がさつき立っていた場所を進んでいった。俺は気にせず右へ移動した直後に桔梗さんに迫る。剣を左に振って桔梗さんの首を斬る直前で止めた。

「参った。わしの負けだ」

桔梗さんは降参をする。

「まさか、桔梗様が負けるなんて……」

焰耶は自分の師が負けるとは思わなかったのか驚いている。俺は剣を鞘に納めた。

「それじゃあ、次は弓の腕を見せてもらおうかしら」

隣で見ていた紫苑さんが弓を持って歩み寄って来た。

「わーい、お母さんと琥音お兄ちゃんの勝負だ。どっちも頑張れー！」

璃々が俺と紫苑さんを応援する。

「分かった。弓だな」

俺は背中から弓を抜いた。

「勝負方法はどうするんだ？」
俺が紫苑さんに尋ねる。

兵士の一人が庭に的を二つ置いた。

紫苑さんは庭から離れ、弓を放つなら遠距離である場所まで離れた。

俺もそれに続く。

隣では桔梗さんに焰耶と璃々が見ていた。

「琥音君は遠距離は得意かしら？」

「まあ、そこそこはいけるぜ？」

「じゃあ、速射は？」

「そこそこだな」

「そう、じゃあ合図の後、弓を撃って先に的に当たった方の勝ちよ。良いかしら？」

「ああ、問題は無い」

そして、俺と紫苑さんは的を見る。

「始めい！」

桔梗さんの声があった瞬間に俺は矢を一本抜くと番えて放つ。見事的の真中に命中して刺さる。

紫苑さんもほぼ、同時に放っていた。

「同時か……じゃあ、矢が尽きるのが早い方の勝ちにしましょう」

「良いぜ」

「琥音お兄ちゃん、弓を射るの、お母さんと一緒だ」

「まさか、弓の腕もこれほどとはな」

「本当に一つ、一つの武器を使いこなしている……」
璃々に桔梗さんと焰耶が口々に言う。

俺と紫苑さんは又、的を見る。そして、桔梗さんの声が響く。

「始めい」

俺は声と同時に矢を五本抜いて、番えて放つ。

全て真中に刺さっている矢に命中する。それを繰り返した。

「終わりだ」

俺が最後に矢を五本放つ。矢はもう無い。

「負けたわ、琥音君」

紫苑さんが最後の矢を放った。俺の矢が丁度尽きた頃だった。

「お母さんに勝っちゃうなんて琥音お兄ちゃん凄い」
璃々が口を開けて驚いた。

「五本の矢を同時に射って真中に全て命中させるとは……剣に棒、おそらく槍に薙刀に矛、弓まで使えるとはまるで武器の達人だな」
桔梗さんが呟くが俺は訂正する。

「体術も使えるぜ。というより皆、元は達人たちの技術を覚えて工夫しているだけだ」

「そうか、技術か。これは頼もしい男が来たのう」

桔梗さんは笑いながらそう言う。

「何故、お前ほどの男が傭兵をやっているんだ。お前なら何処かの武将にもなれるんじゃないか？」

焰耶が俺に尋ねてきた。

「俺は忠義心というのを持っていないくな。仕えずに傭兵をするほうが性に合ってるんだ。今までも幾つかの国に雇われた」

「忠義心を持っていないだと！ 貴様裏切る気か！」

焰耶が金棒を持って叫ぶ。本当に血の氣が多いな。

「雇われている以上は黄巾党残党討伐に力を貸す。雇い主を裏切ることとはしない。報酬を貰わなければならないのに裏切ってどうするんだ？」

「それもそうだな。悪かった」

焰耶は落ち着いてくれたようだ。金棒を地面に下ろす。

「別に気にしねえよ」

「それじゃあ、琥音君頼りにさせてもらっわね」

紫苑さんは微笑みながらそう言う。

「ああ、頼りにしてくれ」

俺も笑いながらそう言った。

紫苑さんたちはあの劉璋^{りゅうしょう}には勿体ない良い武人だ。俺は黄巾党残党討伐に精一杯の力を貸すことを再度誓った。

劉璋^{りゅうしょう}よ、紫苑さんたちに感謝しろよ。

傭兵は益州の武將と触れ合う

「はあ！」

焰耶が俺に向かって金棒を振り下ろす。俺は後退して避けると同時に両手で持った剣で突きを放つ。

「くそ」

焰耶は俺ではなく、俺が先ほどまで立っていた地面を砕いた直後に首に剣を突き付けられ動けないでいる。俺は焰耶から剣を引いて後退すると再び両手で構える。

「うおおお」

焰耶は隙をなくすためか金棒で俺の顔を狙って突きを放つ。俺は右に避けながら剣を振り上げ振り下ろす。そして焰耶を頭から両断する寸前で剣を止める。

「……」

俺は焰耶から離れて間合いを取るが、焰耶は瞬時に俺の頭部を狙って左に金棒を振る。俺はまた後退して避ける。焰耶はそのまま左に金棒を振り終えると瞬時に突きを放つ。

俺はそれを左に避け、剣を焰耶の籠手を纏っていない両腕の部分へ剣を振り下ろし、寸止めする。

「くそ、私の攻撃を避け続けるとは……何故、打ち合わないんだ」

俺が焰耶から離れたと同時に焰耶が言う。俺はため息をつく。

「そう、言われてもな。お前の金棒と打ち合ったらこっちの剣が折れちまう。それに別に俺は力自慢ってわけでもないんでな」

「男のくせに軟弱な奴め。次はお前からかかって来てみる」

焰耶は俺を挑発しながら焰耶は金棒を構える。俺も剣を構えた。

「別に構わないが、打ち合いする気は無いからな」

「ふん、どんな攻撃だろうと防いでやる」

俺は焰耶に向かっていきながら剣を振り上げる。焰耶も俺の剣を防ぐ気なのか金棒を振り上げる。俺はわざと焰耶の隙を狙わずに焰耶に向かっていった。

焰耶の反応は遅れながらもこのまま俺が剣を振り下ろせば金棒と打ち合うだろう。

俺は焰耶に近づく寸前に右へと移動し、剣も左へと下ろした。焰耶の左側へと接近する。

焰耶は俺がそのまま剣を振り下ろすと思ったのだろう。虚をつかれ動きが止まる。

俺は剣を右に振って焰耶の腹を裂く寸前で止める。

「何故だ、動きが全く読めない」

俺は焰耶から離れると剣を鞘に納めた。

「琥音、お前は虚を突くのが上手いな。それに良く相手の動きを観察して読んでいる。動きにも全く無駄が無いし間合いも把握している」

俺と焰耶の手合わせを見ていた桔梗さんが言う。

「それはどうも」

俺は礼を述べた。

「焰耶、お前は動きに無駄がありすぎる。観察も甘いぞ」

「は、はい!」

焰耶は自分の師の言葉に返事を返した。

「じゃあ、俺は璃々と遊ぶ約束があるんでな。これで失礼させてもらっぜ」

俺はそう言つと歩いて庭から璃々の元へと移動した。

「いくよ、琥音お兄ちゃん」

璃々が球を俺に向かって蹴る。

「俺もいくぞ、璃々」

俺はそれを足で止めて璃々に向かって球を蹴る。

もちろん璃々が球を取れるよう弱い力でだ。

璃々は球を足で止めると又、球を蹴る。

俺は璃々としばらく球遊びをした。

「よし、じゃあ良く見てな璃々。良い物見せてやるから」

俺は球を右手で持ち、離すと同時に右足で頭上に蹴り上げる。

球はしばらくすると俺に向かって落ちてきた。俺はそれを又、右足で軽く蹴りあげる。落ちてくる球を右足で蹴り上げるのを繰り返していく。ときには踵や膝なんかも使っていく。

「凄ーい、琥音お兄ちゃん。球を全然落としてない」

璃々が満足したところで俺は頭上へと上がり、落下してくる球を掴んだ。

璃々もやってみたいと言い、俺は璃々が怪我をしないよう見ながら璃々が俺がやったような球蹴りをするのを見ていた。さすがに難しかったようで二・三回しか蹴り上げる事が出来なかった。そして次に璃々が肩車をするようせがんで来たので俺は肩車をして庭を歩く。

「わーい、高ーい」

「どうだ、楽しいか？」

「うん」

璃々は俺の問いに嬉しそうに答える。

俺は次々と璃々の要求に応えて璃々と遊んでいた。

「すう……すう……すう」

遊び疲れたのか璃々は眠っている。寝床で眠っている璃々の側には母親である紫苑さんが居た。

「ふふ、今日は琥音君といっぱい遊んだから疲れちゃったのね」
璃々の顔を見て微笑しながら言う。慈愛あふれるその表情は正に一
児の母親だった。

「今日はありがとうね。琥音君も璃々のわがままに付き合わされて疲れちゃったんじゃない？」

「別にそんなことは無い。妹が出来たようで嬉しかったしな」
俺は苦笑しながら紫苑さんに向かって言う。

「そう、璃々にも立派なお兄ちゃんが出来たみたいね」

「俺はそこまで立派じゃないけどな」
俺と紫苑さんは笑い合う。

「琥音君のご両親も立派なんでしょうね」

「どうか、良い親だったと思うが良く分からない。それにもういないしな」

「え？」

紫苑さんは俺の呟きに呆然とする。

「父は戦で死んで、母は病死。二人以外に身よりが居なかった俺は傭兵生活を始めた」

「ごめんなさい。辛いことを思い出させてしまったわね」

そう言い、紫苑さんは俺に謝る。

「別に良い。俺は両親が死んで何とも思わなかったからな。涙も出なかった」

「琥音君……」

「気にする必要は無い。俺自身気にしてないからな。それじゃあ後はお願いするぜ」

「ええ、今日は本当にありがとう」

紫苑さんが俺に頭を下げる。

「良いつて、俺も楽しかったんだ。感謝される必要は無い」

俺はそう言って部屋を出た。

そして、数日後に俺は紫苑さんと桔梗さんと焰耶と共に黄巾党残党討伐へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7179u/>

真・恋姫†無双～技を極める傭兵

2011年12月13日00時51分発行